静岡県博物館協会　研究紀要　第34号

静岡県博物館協会　研究紀要　第34号

研究紀要

平成22年度
第34号

静岡県博物館協会

静岡県博物館協会
研究紀要

第34号／平成22年度
表紙／大岡信ことば館 展示室内

目　次

2　【記録】山岡鉄舟と明治の群像展　常葉学園大学 造形学部長　日比野 秀男編

30　静岡近代美術年表稿　昭和戦前編　1　立花 義彰

46　特別展「近代を彩った鹿児島の美術家たち」顛末　平成22年10月9日（土）～11月14日（日）
フェルケール博物館 学芸部長　西野 和豊

52　「報告」博物館園の交流 ── 富士山ネットワーク推進委員会の試み
富士市立博物館 学芸員　井上 卓哉

58　詩人の軌跡　－大岡信ことば館収蔵品から－　大岡信ことば館 学芸員　松﨑 なつひ

66　静岡市立登呂博物館リニューアルオープン　静岡市立登呂博物館 主任主事　稲森 幹大

70　静岡市美術館の新規開館について　静岡市美術館 学芸課長　以倉 新

78　静岡県博物館協会　研究紀要投稿規程

編集･発行
静岡県博物館協会（事務局）
〒422-8002　静岡市駿河区谷田53-2
静岡県立美術館
電 話･054-263-5857　FAX･054-263-5742

デザイン　有限会社サイズ
発行日　2011年（平成23年）3月31日
印刷　株式会社アプライズ

【記録】山岡鉄舟と明治の群像展

日比野 秀男（常葉学園大学 造形学部長）編

■はじめに

山岡鉄舟という人物について、私は書の達人という印象が強い。膨大な書の数々を見慣れてきた私たちにとって当然なことである。それと難解な字に閉口した経験も多い。この山岡鉄舟の展覧会をするとなると、この難解な書を鑑賞する人にどのように理解していただくかということに頭を悩ませる。ましてや子供が理解しやすく親しみやすい展覧会にしたいという注文がつけばなおさら難しくなる。英語をはじめて知る子どもに理解させるということと似ているかもしれない。たかだか150年くらい前の字が全く外国語に近いということでもある。

これは、150年前の様々な出来事そのものが理解しにくいということでもある。最近、多くの博物館や資料館で開催されている「ちょっと昔の道具展」と言った展覧会の内容はおじいさんが子供であった時代の様子を知る展覧会である。たとえば70代の方の子供時代とすれば昭和30年代前後である。「ちょっと昔の道具展」の展示内容はこの昭和30年代から40年代にかけての社会の様子を知ってもらう内容となっている。

さて、山岡鉄舟の展覧会を考えたとき、山岡鉄舟が生きた時代とはどんな時代だったのか、そのことから考えなくてはいけないのではないかということに気がついた。

山岡鉄舟の展覧会

子どもに親しまれる展覧会

この二つのお題をいただいた私は途方にくれはしないが、トホトホホ、と言った印象であった。

本稿では、この展覧会の概要を報告することが目的である。展覧会というものは終わってしまえば、カタログだけが残るだけであるとよく言われる。年報等で後日、記録されるにしても出品目録、入館者数などのデータだけである。展覧会の展示構成がどのようであったかなどについてこれまで紹介された例を見ることはできない。もし、何か適切な記録があるとするならばご教示頂きたいものである。

本稿は展示の概要が分かるように配慮してゆくこととしたい。このような記録を作ることを会期中には十分意識していなかったことから使用する写真など十分でないかもしれないがご容赦いただきたい。

（会場入口）

展覧会概要

文化庁「地域文化芸術振興プラン」
静岡県の成立と近代教育の夜明け
「山岡鉄舟と明治の群像展」

会　　期	平成22年3月10日（水）–22日（月）
休 館 日	3月15日（月）
会　　場	駿府博物館
主　　催	財団法人静岡県文化財団、地域文化芸術振興プラン静岡県実行委員会、文化庁、静岡県
特別協力	財団法人駿府博物館
協　　力	全生庵、鉄舟寺、磐田市教育委員会、沼津市明治史料館、富士市立博物館
後　　援	静岡県教育委員会、静岡市教育委員会

■1、展覧会の組み立て

展覧会を開催する以上、開催主旨（「ごあいさつ」参照）と展示するものを何にするかということが一番肝心なことである。幸いなことに鉄舟が建立した全生庵（東京・谷中）の所蔵品については全面的なご協力をいただけるということであったので鉄舟の関連資料についてはよいとして、その他の資料をどのように肉付けしてゆくかということになった。

にわか勉強で明治前半、鉄舟の生きた時代について調べてゆくと「教育」「文明開化」「幕末明治の美術」というテーマを設定してゆけば静岡との関連も持たせた展示もできるのではないかということに落ち着いた。

そこで、「展示資料の選定」「テーマの解説」ということからそれぞれ専門の先生方のご協力をいただくこととして「山岡鉄舟と明治の群像展」企画運営委員会（資料1）を設け実施に進むこととした。

私が展示構成で一番考えたことは「通史」「図説」の展示にはしたくないということである。「通史」とはこの明治前半の様々な動きについての解説を多くしたくないということである。実物資料によってこの時代とともに山岡鉄舟を知っていただくということに主眼を置きたいと考えた。企画運営委員会でお集まりいただいた先生方にお願いしたことは「絵解き」の展示にしたいということであった。実物資料を見ただけでは何なのか多くの場合理解できないのではないかという危惧があった。鉄舟の書は読みにくいし、振り仮名があったとしても内容については何なのかわからない。当時の文化にしても飛行機があるわけではないし、電卓があるわけでもない。現在とは全く違う時空の中で生きていたに違いない。しかしながら、そうした中で今日と通じるものがあるはずであるという考えもあった。子供たちに理解してもらうということは今のテレビに代わるものがあるとすればどんなものなのか、そのようなことが理解できるような展示を試みたいと考えた。

上野動物園の開園が明治15年（1882）、木村屋総本店の「あんぱん」を明治天皇に献上したのが山岡鉄舟であったということを知った時、今の人たちにも理解でき、親しみを感じていただけるものがあるはずだということも確信が持てた。

前述した「絵解き」をするために「解説パネル」だけでなく、「写真パネル」を多用することとした。展示総数177件のうち50件弱が写真パネルである。これは解説パネル以外であるので、解説パネルも含めればかなりの数になる。

「解説パネル」は概要であるので個別資料の解説については当初は重視していなかった。なぜならば専門家と言うのは個別資料について詳しいが、専門家の詳しい解説は一般の方々が理解するには多くの困難が伴うからである。ましてや子供が理解するとなるととても困難なことになってしまう。そこで企画運営委員の先生方にはテーマの概要を書いていただくこととした。しかしながら概要を書いたとしても個別の資料についても簡単な解説をお願いすることとし、「２０字程度」の一言解説をお願いした。キャプションにつければ、名称を知るとともに、それが何なのかということが理解できるようにしたかったからである。各事項の末尾に執筆者名を（　）の中に記した。

■2、「山岡鉄舟と明治の群像展」展示概要

展示の概要は展示の様子が分かるように構成した。本展は以下の４部構成からなっており、さらに各部の中はいくつかのテーマによって構成される。

第１部　静岡県を築いた明治の群像
第２部　近代静岡の教育
もう一つの文明開化
第３部　山岡鉄舟・人と偉業
第４部　幕末明治の美術

記述の順序は、テーマ（❶など白抜き数字）、展示リスト、展示風景写真、解説パネル（末尾に執筆者）の順とした。

（学生によるギャラリートーク風景）

第1部　静岡県を築いた明治の群像

❶江戸幕府から明治新政府に

1、鉄舟居士木像　　高村光雲作

2、山岡鉄舟居士之讃　石碑（写真パネル）

3、大政奉還、王政復古、戊辰戦争、廃藩置県、地租改正（解説パネル）

❷　　❶

江戸幕府から明治新政府へ

嘉永6年（1853）、浦賀沖に突如軍艦（黒船）が姿を現し、人々を驚かせます。ペリー来航です。開国和親か、拒否・撃退（攘夷）かで国内は対立、嵐のように揺れ動きました。幕政批判が高まるなか、天皇を日本の中心として敬う尊王（尊皇）思想が力を持ちます。欧米列強の圧倒的な軍事力を前に、攘夷決行の無謀さが明らかとなるなか、幕府に代わる天皇中心の政治体制も模索されました。

大政奉還で勢力温存を図る徳川慶喜に対し、薩摩・長州両藩の武力倒幕派は王政復古を強行、戊辰戦争が明治元年（1868）勃発、幕府は崩壊します。ペリー来航後わずか15年、この激動の時代に人々は命がけで行動しました。その一人に、サムライの心を誰よりも持つ山岡鉄舟もいます。

廃藩置県や地租改正、徴兵制により欧米を手本とする天皇中心の近代国家建設が新たに始まりました。四民平等、文明開化の世となり殖産興業や学制により経済や教育発展の基礎も築かれます。県下にも徳川家に従い多くの旧幕臣が移住、静岡藩が成立、静岡学問所や沼津兵学校など教育を重視した独自で特色ある地域づくりが始まりました。静岡藩は廃藩置県で消滅しますが、彼らの知識や精神は、新しい国家や地域の建設に生かされます。木像の鉄舟は端然と座し、また肖像画の鉄舟は透き通るような眼差しをしています。波乱に満ちたこの時代を、彼はどのように生き抜いたのでしょうか。（鈴木）

❷戊辰戦争

4、末広五十三次図会（目次、日本橋、江尻、府中、藤枝、京都）

末広五十三次図会

江戸時代は外国に対して長崎だけが開かれた港でした。しかし、江戸時代の終わりにはアメリカ、ロシアなど多くの国が日本に開港を求めました。そのような動きに対して外国人を追い払って通交するべきでないと訴える人々もいました。この人たちをを攘夷派(じょういは)と呼んでいます。特に長州藩（現在の山口県）の人たちが急先鋒でした。長州藩の下関港ではアメリカ、フランス、オランダの船に攻撃を仕掛けましたがアメリカの艦船によって下関港は壊滅的な打撃を受けました。その後、朝廷は攘夷派の長州藩を危険と感じ、長州征伐を命令しました。この版画は将軍家茂が慶応元年(1865)9月、長州征討のために江戸を出発し、東海道を京都に向かう様子が、東海道五十三次の各宿場ごとに描かれています。合計55枚あります。二代国貞、月岡芳年、橋本亭貞秀、歌川芳幾など当時の著名な版画家によって描かれています。（日比野）

❸最後の将軍、徳川慶喜

5、一行書「仰之弥高」　徳川慶喜書

6、徳川慶喜・家達像　玉置金司・矢崎千代治作

7、登美宮吉子和歌短冊

❹（1）　　❸

最後の将軍

江戸幕府の最後の将軍となった徳川慶喜は天保8年（1837）9月29日、水戸藩主斉昭の7男として江戸の藩邸に誕生。母は有栖川宮織仁親王の王女、登美宮吉子です。弘化4年（1847）9月、一橋家を相続し、14代将軍の座を紀伊慶福（のちの家茂）と争って敗れましたが、大老井伊直弼の死によって将軍後見職となりました。ついで京都で禁裏御守衛総督の任につき、上洛時の家茂を補佐しました。慶応2年（1866）12月、15代将軍となり、幕政を主導しましたが、翌年10月、大政奉還を上表し将軍職も辞しました。この後、慶喜は鳥羽伏見の戦いを起こして朝敵とされ追討の軍を受けましたが、誠意を以て朝廷に謝したため許されています。維新の折、謹慎の身を江戸から水戸、そして静岡に置いており、殊に静岡には罪の許された後も長く留まり、閑雲野鶴の30年、悠々自適の生活を送っています。狩猟、釣り、花見、花火見物、寺社参詣、湯治、写真撮影、油絵、自転車、能、謡い、講談、小鼓、囲碁、将棋、玉突き、刺繍等々、老後に向かいつつある生活を楽しむ慶喜の姿は、遺品や家扶日記が雄弁に物語っています。慶喜が、東京移居のため静岡を後にしたのは、明治30年（1897）11月16日のことで、その死は、別家を興し、徳川宗家から自立したのち、明治天皇崩御の悲しみに癒えぬ最中、大正2年（1913）11月22日のことでありました。享年77歳。（小林）

徳川慶喜　一行書「仰之弥高」

慶喜の書は幼時より定評がありました。一橋家を相続した後、戸川安清・鈴木清熙等を師と仰ぎ、その書風も数度の変遷を経て、晩年はゆったりとした落ち着きのある中に剛健を含んだ書を遺しています。本書は慶喜が『論語』の中の孔子の門人、顔淵が高遵堅固な師の人格を称えた「之を仰げば弥高く　之を鑽れば弥堅し」の語句の一部を筆にしたもので、東京へ移居してからの書と思われます。（小林）

徳川慶喜・家達像

フロックコートに身を包む、礼装の徳川慶喜と家達です。『徳川慶喜家扶日記』明治24年11月5日条に「一位様　三位様　御肖像久能山ニ御所蔵之儀ニ付、前田五門参上、梅沢引合候事」とあり、同7日条にも「一位様御肖像之儀ニ付、梅沢覚久能山へ出張、前田五門へ御衣冠之御写真被下候事　玉置金司矢崎千代次　御油画ニ仕候由」とあるので、本像は久能山東照宮に蔵するため、衣冠姿の慶喜像とともに写真をもとに玉置金司・矢崎千代治が描いたものであることが知られます。（小林）

登美宮吉子筆　和歌短冊『竹』

登美宮吉子は、有栖川宮織仁親王の5女で、徳川慶喜の生母です。文化元年誕生。天保2年、水戸徳川家9代斉昭と結婚。同8年に慶喜が生まれています。吉子は聡明にして和歌をよくし、書は御家の有栖川流を習学して短冊・色紙・懐紙などに多くの自詠の遺作があり、後宇多天皇御製や『卜斎記』の写本も伝わります。また『隅田川道記』・『日光道之記』と題する紀行文を筆にするなど和文にも長じました。この短冊は、明治10年の詠で「竹　代々へてもかはらぬ色に生そひてうきふししらぬ庭の呉竹　吉」とあり、吉子74歳の筆であります。この年、和宮の薨去や西南戦争などの出来事がありましたが、吉子の周辺は平穏であり、4月に静岡の慶喜を訪れて、久能山に参詣したり、安倍川や大谷川の舟遊びに興じています。明治26年正月27日逝去。90歳。母吉子の死を弔む慶喜の詠歌があります。「つねならはかはりなしやとのたまはむ　みことはなきそかなしかりける」（『徳川慶喜歌集』）（小林）

❹若き日の山岡鉄舟（1）

8、鉄舟肖像　自賛

9、高山陣屋（写真パネル）

10、山岡家系図（パネル）

11、読書講兵　　清河八郎書

山岡鉄舟の少年時代

鉄舟は174年前、天保7年（1836）6月10日に、江戸の本所（東京都墨田区）で生まれました。名は高歩、通称は鉄太郎、鉄舟は号です。父は、徳川将軍家の600石取りの旗本（上級家臣）小野朝右衛門高福、母は磯といいます。鉄舟10歳の弘化元年（1844）、父が約11万石もの幕府の天領（直接支配地）を支配する飛騨郡代に任命されます。小野家は高山陣屋（岐阜県高山市）に入り、少年鉄舟は、飛騨で井上清虎に剣術を、岩佐一亭に書を学びました。

恵まれた生活も長くは続かず、両親が相次いで病没、墓を飛騨に残し、17歳の鉄舟らは江戸の異母兄宅に寄寓しました。遺産を兄弟に与え、役も財産もない鉄舟は、「ぼろ鉄」と呼ばれても気にせず、名高い北辰一刀流千葉周作の道場玄武館で修行に励み、「鬼鉄」と恐れられました。（鈴木）

❺　　❹（2）

❹若き日の山岡鉄舟（2）

12、尊攘遺墨　　清河八郎
13、清河八郎肖像スケッチ（写真パネル）
14、伊藤博文等書簡集　　山岡鉄舟書
15、鉄舟青年期（33歳）の肖像（写真パネル）

青年時代の山岡鉄舟

20歳の時鉄舟は、7歳年上で希代の槍達人山岡静山と出会い、心底尊敬して師と仰ぎますが、間もなく静山は亡くなります。その悲しみは、何日も墓前を守る彼の姿に静山実弟の高橋泥舟が驚いたとの逸話にも表われています。泥舟の懇願で静山の妹英と鉄舟は結婚、跡継ぎが無く貧しい山岡家を継ぎました。サムライ山岡鉄舟の誕生です（「山岡家系図」）。泥舟は一歳上の槍達人で、安政3年（1856）その腕前から講武所槍術教授に任命、鉄舟も同所世話役となりました。

玄武館で鉄舟は、出羽庄内藩郷士出身の秀才清河八郎と出会います。「読書講兵」は、彼の文武両道重視の思想を表し、共感した鉄舟は私塾文武指南所に出入りしました。（鈴木）

尊皇攘夷への共鳴

大老井伊直弼が桜田門外の変で暗殺、幕府の権威は傾きました。外国人襲撃が多発し、八郎も実行のために石坂周造ら同志たちと虎尾の会を結成、鉄舟や松岡萬も幕臣なのにその中心となります。「尊攘遺墨」には八郎の攘夷実現策が綴られています。

文久3年（1863）、幕府は八郎の策を採用、将軍警備を名目に浪士組を結成、泥舟は浪士取扱、28歳の鉄舟も取締役として京都へ同行しました。後に分裂し壬生浪士組（新撰組）となる近藤勇らも隊員です。京で突如攘夷実行を唱えた八郎を幕府は危険と考え江戸に戻らせ暗殺、即日同志の泥舟や鉄舟も閉門させられました。謹慎解除後の彼らと幕臣関口隆吉が、政局の情報交換をしていたことが書簡から読み取れます。（鈴木）

❺江戸無血開城への道

16、江戸開城談判図（結城素明原画、写真パネル）
17、戊申解難録　　山岡鉄舟書
18、山岡鉄舟手記　山岡鉄舟書
19、鉄舟胴乱

江戸に迫る官軍

鳥羽・伏見の戦いで新政府方に大敗、朝敵（天皇の敵）となった慶喜は江戸に脱出します。江戸城内では抗戦派と恭順（和平）派が激しく対立しましたが、絶対恭順を決意した慶喜は、知将勝海舟を陸軍総裁に任命し自らは上野寛永寺で謹慎、遊撃隊頭高橋泥舟が身辺警護にあたりました。海舟は、下級の幕臣ながら蘭学や兵学に通じ、咸臨丸で太平洋を横断した幕府海軍の創設者です。幅広い見識を持ち坂本龍馬らに慕われ、討幕派も幕府内第一の人物と見なしていました。

慶應4年（1868）2月15日慶喜追討のため有栖川宮熾仁親王を大総督、参謀を西郷隆盛とする東征軍（官軍）が出発します。静寛院宮など様々な方面から、慶喜や徳川家への寛大な処置を求める嘆願がなされました。新政府首脳も寛大処分に傾きますが幕府方への疑念も深く、東征軍の先鋒は江戸に迫ります。3月5日大総督は駿府（静岡市）に到着、翌日江戸城総攻撃を15日と決定しました。この時、一人のサムライが海舟の書状を手に、江戸を飛び出しました。山岡鉄舟です。（鈴木）

江戸無血開城への道

官軍陣中を正面突破した鉄舟は、3月9日駿府（静岡市）伝馬町で参謀西郷隆盛に面会、慶喜の恭順が本心であることを伝えます。鉄舟は、提示された七か条の降伏条件に対し、慶喜処遇については隆盛に一歩も譲らなかったと「談判筆記」に記しています。初対面の隆盛は、彼の捨て身の覚悟を強く感じました。

書付を得た鉄舟は江戸に駆け戻り報告、勝海舟始め幕閣は新政府側の要求がわかり大いに喜び対案を練ります。海舟はイギリス公使へも攻撃回避を働きかけ、交渉決裂時の江戸焦土策も手配、13日・14日と徳川家存続をかけた隆盛との会談に臨みました（「江戸開城談判」）。その結果、隆盛は翌日の総攻撃を延期、江戸無血開城への道筋が開かれ、江戸の町は戦火をまぬがれたのでした。（鈴木）

❻（2）　　❻（1）

❻静岡藩を支えた海舟・鉄舟（1）

20、「駿藩役名便覧」
21、勝海舟肖像（写真パネル）
22、鉄舟肖像　勝海舟画賛
23、牧之原茶園に立つ中條景昭像（写真パネル）
24、牧之原開拓士族名簿（写真パネル）
25、士族開墾地絵図面（写真パネル）

❻静岡藩を支えた海舟・鉄舟（2）

26、山岡鉄太郎書簡
27、関口隆吉書簡（勝海舟宛）

静岡藩を支えた海舟・鉄舟

家名存続は許されたものの、徳川家は新政府より駿河・遠江等70万石への移動を命じられました。8歳の新藩主徳川家達を頂く静岡（府中）藩の幹事役として内外の難問調整に努めたのが、勝海舟と山岡鉄舟です（「駿藩役名便覧」）。明治初年、家族・従者も含め約10万人余とも推定される旧幕臣が駿河・遠江に移住しました。中にはリストラされても徳川家に従おうとする「無禄移住者」も数多く含まれていました。海舟や鉄舟が過酷な運命に直面する旧幕臣達の世話に奔走していることが、海舟への「関口隆吉書簡」からわかります。

将軍警護の精鋭隊は鉄舟のあと中條景昭が統率、駿府移住後隊は新番組と改称しますが、関口隆吉への「山岡鉄舟書簡」は彼らの窮乏ぶりを伝えます。鉄舟、隆吉らの意を受け景昭らは、刀に鍬を持ち開墾方として牧之原へ入植、辛酸を舐めながらも荒地を大茶園に変えて行きました。

第2部　近代静岡の教育

❼近代教育の芽生え―寺子屋―

28、寺子屋（UNE　ECOLE　JAPONAISE）
29、実語教
30、庭訓往来
31、孝教

❼

近代教育の芽生え―寺子屋―

わが国の近代教育制度成立には地域文化の形成に深く関わった寺子屋の教育的土壌がその背景にあります。寺子屋では「三つ心、六つ躾、九つ言葉、文十二、理十五で末決まる」という諺にみられる段階的養育法に基づいた教育が行われていました。

子どもの登校時間はまちまちで、就学年齢や在学年数

も特に決められていませんでした。6歳から13歳までの子どもが多く、3〜6年通うのが一般的でした。また女子の就学人数は男子と比べて少数でしたが、寺子屋では女子教育も行われ、「女大学」のように男子と明確に区別した教科書を使い、女子としての教養を積んでいました。

寺子屋は、入学金も授業料も必要ありませんでしたが、親はお礼として入門金や月謝を金銭や物(野菜等)で支払っていました。(安藤)

❽近代教育の幕開け

32、女大学
33、寺子屋読書千字文
34、一掃百態(複製)
35、高札
36、第六単語図
37、第六連語図
38、単語篇
39、連語篇
40、学問のすすめ
41、小学教訓
42、洋算早学
43、小学讀本

❽

近代教育の幕開け

明治5年(1872)8月3日、わが国近代教育の出発点をかざる『学制』が公布され、「邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカラシメンコトヲ期ス」という「国民皆学」の方針が明確に打ち出されました。明治政府は「旧来の因習を破り」「知識を世界に求める」ことを国の基本方針として、近代国家建設の基礎に教育を置き、欧米諸国の教育制度を基に、国家的に統一された公教育の組織化を目指したのです。

『学制』公布の前日には『学制』の前文とでもいうべき『学事奨励ニ関スル被仰出書』が出されました。そこには福沢諭吉の『学問ノススメ』にみるような立身出世主義の考え方や国民皆学の理念が明確に宣言されています。

また『学制』では、全国を8大学区に、大学区を32中学区に、中学区を210小学区に分け、各小学区に小学校を設立する計画が立てられました(人口約600人に1校の割合で小学校を置く)。『学制』の実施は小学校の設立を意味するものでしたが、実際には小学校の設立は地方の自発性と実費に委ねられたため、設立に着手したのは翌年以降でした。明治6年(1873)、全国には12,000余りの小学校が誕生しましたが、これは計画の5分の1弱の学校数です。また就学率は男子が39.9%、女子が15.1%、平均28.1%と国民皆学にはほど遠いものでした。

明治12年 (1879)、『学制』が廃され、新たに『教育令』が発せられ、明治19年(1886)には諸学校令が公布されました。こうして近代教育制度が確立し整備されましたが、その軌道は『学制』によって敷かれたのです。(安藤)

❾

❾明治初期の小学校授業風景

44、見付小学校の机
45、見付小学校の椅子
46、教員人形
47、児童人形
48、小学入門(復刻版)
49、掛け図(乗算九九図、レプリカ)
50、明治の授業風景(岩科学校、写真パネル)

明治初期の小学校授業風景

『学制』下における小学校の授業は、教育内容をアメリカに倣って整備しました。「師匠と寺子」が「教師と生徒」という名称に変わり、指導法は「個別教授」から「一斉教授」へ、テキストも「往来物」から「教科書」となり、読み、書き、算盤中心だった内容から、下等小学では、綴字、習字、単語、会話、読本、修身、書牘、文法、算術、養生法、地学大意、理学大意、体術、唱歌の14教科に編成されました。子どもが使う学習用具も「筆と紙」から「石筆と石盤」へと変わりました。

教室では子どもは椅子に腰かけ、主な教具である掛図(単語図、連語図、九九図、博物図等)を使った授業が行われました。掛図は文部省や師範学校がアメリカの掛図を日本風にアレンジして作りました。単語図を使用する場合、教師は棒で単語を指しながら一人ずつ指名して読ませ、そして全員で復唱した後、一列目から順番に読み、さらに列単位で同じことを読んでいく、という教授法をとっていました。(安藤)

❿寺小屋の授業風景

51、机(寺子屋:原泉舎)
52、師匠人形(寺子屋:原泉舎)
53、寺子屋で使われた書見台
54、子供人形(寺子屋:原泉舎)

❿

寺子屋の授業風景

寺子屋で学ぶ子どもの人数は平均10名くらいで、日常生活に必要とされる「読み・書き・そろばん」という実用的な初歩教育が行われていました。師匠のしつけは大変厳しいものでしたが、師匠は個々の子どもの個性や得手不得手を見抜き、商売往来、庭訓往来、江戸往来等の「往来物」と呼ばれる教訓的、産業的、地理的な教材や、論語・実語教等の漢籍、田畑や山林等の面積や年貢量等の計算を教える書物等を、子どもに応じて選び、個別にカリキュラムを作成して指導しました。そのため年長の子どもが師匠の助教となり年少の子どもを教える方法がとられていました。

自学自習を基本に据えた寺子屋では、師匠と子どもの座席関係は現在の教室のような対面式の整然としたものではなく、寺子屋風景を描いた浮世絵等にみるように、師匠と子どもの位置関係は実に多様でした。

また、清書、浚、席書の三種類の試験がありましたが、今日的な試験とはちがい、手習いの上達を見るためのものでした。(安藤)

⓫-1近代教育をリードした栄光の学校Ⅰ
—静岡学問所—

55、E. W.クラークの撮影した明治初年の静岡(写真アルバム)
56、E. W. クラークの撮影した明治初年の静岡(写真パネル)
57、仙八肖像(写真パネル)
58、ニューヨーク州商業会議所(1858)年報
59、静岡街一覧之図
60、無所争斎間取図
61、富春院境内(写真パネル)
62、尚志碑(写真パネル)
63、静岡新聞第1号、2号、3号
64、自由之理

⓫-1

⓫-1

近代教育をリードした栄光の学校　―静岡学問所―

静岡学問所（明治元年（1868）9月～明治5年（1872）8月）

大政奉還（1867年）の後、徳川家は駿府に府中藩（藩主家達）として移され、新政府により謹慎を命じられた15代将軍慶喜とともに多くの旧幕臣が移住してきました。そこで、人材育成の目的で明治元年（1868年）9月に「府中学問所」が開設されました。旧幕府の昌平坂学問所、開成所の教授陣から、向山黄村（学問所頭）、津田真道、中村正直（敬宇）、外山正一、加藤弘之らが採用され、漢学、洋学、国学、洋算を教えました。翌年、向山黄村の発案で府中を「静岡」とあらためたため、「静岡学問所」と改正されると同時に、旧幕臣の師弟だけでなく、希望するものは誰でも就学することができるようになりました。また、明治4年（1871）には、静岡藩幹事役の勝海舟の要請でE.W.クラークがアメリカからよばれ、学問所の隣に伝習所を建設し、理化学の教師として明治6年まで静岡で教鞭を執りました。その間100名以上の教師と1500名ほどの生徒と交流しましたが、明治5年8月に学制が発布され、地方の学校が廃止となると静岡学問所・伝習所も廃校となり、クラークらは東京の開成学校（後の東京大学）に移りました。やがて学問所の痕跡は使用されていた書籍（実物資料）のみとなりました。その一部は、静岡師範学校を経由して、多くは「葵文庫」に引き継がれ、現在は静岡県立中央図書館に所蔵されています。（福原）

E.W.クラーク（1849~1907）と仙八（1832~1874）

エドワード・ウォーレン・クラークは1849年アメリカのポーツマスの神父の家に生まれました。大学時代に1通の手紙が来て、静岡初のお雇い外国人教師としての招きを受け入れます（22歳）。最初は静岡学問所からやや離れた蓮永寺から馬車で通いましたが、勝海舟の計らいもあり、駿府城内に自ら設計した洋館を静岡の大工とともに建設しました。その隣に使用人の仙八（サムパッチ）と呼ばれていた日本人の家も建設されました。彼の本名は仙太郎、現在の倉敷市出身の水夫見習い（炊）で、1850年に栄力丸（17名乗組・乗組員の一人はジョセフ・彦）で出帆したところ嵐に遭い、紀伊半島沖で遭難してしまいます。53日ぶりにアメリカ商船に救助され、サンフランシスコに入港後、乗組員はバラバラとなり帰国をめざします。その間アメリカの文化や習慣、言語を学び、仙八は日本人で最初に写真に写された人物となります。やがて彼はアメリカ艦隊の乗組員（料理人）となり、ペリーとともに黒船に乗って来航（1853年）し、その後アメリカ人の料理人として日本に上陸（1860年）します。そして、クラークの使用人兼通訳として雇われ、洋館の隣に住むことが許され、来訪者にも西洋料理が振る舞われました。これらの展示写真はクラークが撮影し、静岡を離れる際に勝海舟にプレゼントされたものです。明治初年の人々の数奇な運命が、多くの文物を静岡にもたらしました。（福原）

⓬　　⓫-2

⓫-2 近代教育をリードした栄光の学校Ⅰ
―静岡学問所―

65、西国立志編
66、中村正直肖像（写真パネル）
67、中村正直書（墨跡）

中村正直と明治文化

中村正直、勝海舟（安房）、徳川慶喜、クラーク、仙八との交流

クラークと中村正直との交流は深く、中村の翻訳書「自由之理」（実物資料）の序文を書いたことでもその親交の深さがうかがえます。また、勝海舟とも同様で、勝を介して徳川慶喜とも親交があり、クラーク、慶喜とともに静岡市の北方にある鯨が池にたびたび鴨撃ちに同行していたようです。それが縁となり、鯨が池付近の門屋村名主白鳥惣左衛門と知り合い、勝海舟は母親のために白鳥家の土地を譲り受け、家を建てました。残念ながら母親は完成を見ずに他界しましたが、現在、同地の宝樹院という寺に移築され公開されています。また、仙八はクラークとともに晩年を東京で過ごし、クラークがアメリカに帰郷する前に亡くなり（1874）、中村正直の菩提寺に葬られました。（福原）

教育・文化の中心だった静岡　富春院と出版活動

中村正直（1832～1891）は江戸で幕臣の家に生まれました。昌平坂学問所で学び、教授（1855）、幕府の儒官（1862）となりました。イギリスに渡る（1866）も、明治維新が起きたため帰国し、静岡学問所の一等教授に就任（1869）しました。住居として静岡市葵区大岩にある富春院の境内に「無所争斎」という建物（図面参照）を建て、そこで外国書の翻訳活動に取り組みました。サミュエル・スマイルズの「Self Help」を「西国立志編」（実物資料）という名で翻訳して出版（1870）し、約100万部以上を売り上げ、福沢諭吉の「学問のすすめ」と並ぶ大ベストセラーとなりました。続いて、ジョン・スチュアート・ミルの「On Liberty」を翻訳した「自由之理」（1872）は、その後の自由民権運動に大きな影響を与えました。この年学問所が閉鎖となると、中村は大蔵省に出仕（1972）し、翌年に同人社を開設（1873）し、さらに、福沢諭吉、森有礼、西周らとともに明六社のメンバーとして「明六雑誌」の出版を通し、啓蒙思想の普及に努めました。女子教育、聾唖教育にも尽力し、東京帝国大学教授、元老院議官、貴族院議員などを歴任、1891年に病没しました。中村が静岡で過ごした3年間はまさに日本の教育・文化の中心であり、地域に与えた影響は大きかったといえます。学問所、伝習所は私立学校に引き継がれ、クラークは洋館でキリスト教の布教に努めたため、静岡には全国に先駆けて学校や教会が建設され、「静岡新聞」（実物資料）が発行される（1873）など、出版も盛んとなりました。（福原）

⓬近代教育をリードした栄光の学校Ⅱ
―沼津兵学校―

68、徳川家兵学校掟書
69、沼津兵学校校舎（写真パネル）
70、沼津兵学校平面図（写真パネル）
71、西周肖像（写真パネル）
72、沼津兵学校生徒と教授陣（写真パネル）

近代教育をリードした栄光の学校Ⅱ –沼津兵学校–

江戸から静岡に移住した徳川家(静岡藩)は、明治元年(1868)12月沼津城内に徳川家兵学校を設立しました（翌年8月に沼津兵学校と改称）。頭取の西周は開明的な理念と規則を「徳川家兵学校掟書」に盛り込み、藩士を対象に陸軍士官の養成を行いました。教授陣には当時の日本を代表する赤松則良、塚本明毅ら有数の学者・技術者・軍人が選ばれ、兵学をはじめ英学、仏学、数学等、西洋の先進的教育内容や教育方法を取り入れた高水準の教育が行われました。同時に兵学校の予備校として沼津兵学校附属小学校も設立されました。

優秀なスタッフと進んだ教育制度や教育内容を備えた沼津兵学校は全国諸藩から注目され、政府の大学南校や陸海軍兵学寮と並ぶ最高学府的存在でした。

明治4年（1871）の廃藩置県によって静岡藩が廃藩となると、沼津兵学校は兵部省が接収、管理することとなり沼津出張兵学寮と改名され、翌5年（1872）5月には陸軍士官学校に合併・吸収され、廃校となりました。（安藤）

⓭沼津兵学校の教育

73、経済説略
74、筆算訓蒙
75、法朗西単語篇
76、英国史略
77、荒川重平　図画ノート（写真パネル）
78、荒川重平　数学ノート（写真パネル）
79、江原素六肖像（写真パネル）

沼津兵学校の教育

沼津兵学校の生徒は、資業生4年、本業生3年を経て、試験に合格すると得業生(士官候補生)となります。また「徳川家兵学校掟書」の規定では、入学が許可される年齢制限は、14歳から18歳までと制限されていました。しかし設立当時は30歳以下の旧幕府陸軍関係者300余名を選抜して予備科に編入させ、明治2年（1869）の秋までに4回の入学試験があり、110余名の合格者を資業生として採用しました。そのため年齢制限は規定通りとならず、10代から30代までの生徒が在籍していました。

授業は軍事技術の基礎としての数学が必須科目で、代数や幾何等日本古来の和算とは違う洋算教育を実施したり、体育としてフランス陸軍系の兵式体操（歩兵繰練）を取り入れたりして、我が国の先駆的な教育が展開されていました。

教科書編集も教授陣によって積極的に行われ、『筆算

訓蒙』（明治2年刊）『兵学程式』（明治3年刊）等、「沼津版」と称される教科書が教授陣によって刊行されました。（安藤）

⓮

⓮明治初期に創設された小学校
—見付学校と岩科学校—

80、見付学校校舎（写真パネル）
81、岩科学校校舎（写真パネル）
82、出校当番証印簿
83、見付学校幹事任命書
84、卒業証書
85、石盤、石筆、石盤ふき
86、岩科学校校長室（写真パネル）
87、振鈴
88、児童の習字作品

明治初期に創設された小学校—見付学校と岩科学校—

明治維新後の日本では初等教育の整備が遅れていたため、日本はアメリカの小学校に倣って小学校をつくりました。教員養成制度をはじめとして教材・教具や教授法に至るまであらゆるものをアメリカから輸入し、校舎もアメリカ風にしようと洋風あるいは擬洋風建築の小学校が各地につくられました。

静岡県では明治8年（1875）に木造擬洋風建築の「見付学校」（現：磐田市）、明治13年（1880）にはなまこ壁を活かした社寺風建築様式と洋風の手摺りを付したバルコニーのある「岩科学校」（現：松崎町）が竣工しました。岩科学校正面玄関の扁額は時の太政大臣・三条実美、2階西の間の欄間には入江長八による「千羽鶴」（鏝絵）があります。

校舎建築のために各地域では建築資金調達に苦労しながらも、教育によって地方を発展させようとする当時の民衆の情熱を、これらの学校から伺い知ることができます。記録によると明治14年（1881）の見付学校の生徒数は男子300名、女子182名、合計482名で、就学率は66％でした。（安藤）

⓯地域の実情に合わせた教育

89、地理初歩　　90、下等小学習字臨本
91、児童心得　　92、坊中学校校舎
93、中泉学校
94、就学札
95、遠江風土歌
96、改正　静岡懸誌　全
97、西之島学校図

地域の実情に合わせた教育

明治5年（1872）に文部省が公布した『小学教則』では、小学校の教育制度や教育課程における教科設定が明確に示され、使用する教科書（例えば福沢諭吉の『学問ノススメ』は下等第６級読方読本標準教科書）も具体的に指示されました。しかし教科書の編集事業が十分に整備されていなかったため、民間が出版した啓蒙書や翻訳書あるいは各地域で出版された身近な地域を学ぶための地方誌等が教科書として使用されました。また教科書や学用品、さらには教科書の代用としての掛図が十分に整わない地域では、『小学教則』通りの実施は大変困難な状況でした。

こうした地域では独自の教育方針と教育内容を『小学教則』に即して作成し、地域の実情に合わせた教育を行いました。しかし当時は閉鎖的な考え方が強く、授業料も徴収していたために就学率は低く、学校では在学証明書ともいえる就学札を着衣に見えるように付けさせ、不就学児の就学を促す手だてを講じていました。（安藤）

上野動物園　　あんぱん　　西之島学校図

もう一つの文明開化

98、元昌平阪聖堂に於テ博覧会図
99、東京上野公園地
　明治十四年第二回内国勧業博覧会場一覧之図
100、木村屋のあんぱん（写真パネル）
101、あんぱん誕生物語（写真パネル）
102、『安愚楽鍋』（復刻版）
103、上野動物園の開園（写真パネル）
104、東京名所日本橋—京橋之間
　鉄道馬車往復之図

もう一つの文明開化（食文化の文明開化は明治5年）

江戸時代から明治初年の変化はさまざまな分野で文明開化すなわち人の知恵が発達し、生活が便利になることが求められました。いっきに西洋文明を取り入れ模倣しようと努めたのです。アイスクリーム、ラムネ、西洋菓子などから牛鍋まで新しい食品が生まれました。木村安兵衛は明治2年（1869）、東京・芝に文英堂（翌年、木村屋と改称）というパン店を開店しました。この木村屋は明治7年にあんパンを発売し、翌8年には、山岡鉄舟が明治天皇に献上しました。『西洋料理通』という本は明治5年（1872）に発刊されましたが、仮名垣魯文という文学者が書き、挿絵は当時、有名であった河鍋暁斎という画家が描いています。その中にはすでにカレーライスの作り方もあります。お肉は赤ガエルの肉を入れるとあります。どんな味だったのでしょう。（日比野）

もう一つの文明開化（上野動物園の開園は明治15年）

中国の上海で今年、万国博覧会が開催されます。この万博は1851年、イギリスのロンドンで最初に開かれ、慶応3年（1867）、パリで開催され、その万博に日本は初めて参加しました。代表使節として将軍慶喜の弟の昭武が出席しました。当時の日本のあらゆる産物が出品展示されました。日本で開催されたのは昭和45年（1970）で、大阪を会場としアジアでは最初の万博です。世界中の産物を一堂に集め、実際に人々の目に触れさせ、新知識を吸収し様々な文化の発展を促しました。日本国内の博覧会は明治5年（1872）東京・湯島の聖堂で開催されました。博覧会が文明開化の重要な方法であることを明治新政府の人たちが承知していたからです。上野の動物園は明治15年（1882）に開園されました。（日比野）

第3部　山岡鉄舟・人と偉業

⓰　　鉄道馬車

⓰明治天皇と山岡鉄舟

105、辞令（茨城県参事）
106、辞令（伊万里県権令）
107、和歌（晴れてよし曇りてもよし富士の山
　もとの姿は変わらざりけり）
108、水指　明治天皇下賜
109、ギヤマン銘酒瓶　明治天皇下賜
110、ギヤマン　明治天皇下賜
111、西郷隆盛銅像（写真パネル）　上野公園
112、成趣園　西郷南州書
113、御紋付銀盃　明治天皇下賜
114、御小皿、御土器、明治天皇下賜
115、任官状　侍従
116、任官状　宮内少輔
117、任官状　御用掛

⑯

明治天皇と山岡鉄舟　その1

人材難の明治新政府は、静岡藩から多くの旧幕臣を登用しました。廃藩置県後、鉄舟も茨城県参事や佐賀の伊万里県権令（知事に相当）に任命されました。名誉や権力にこだわらない鉄舟は、難題を解決すれば直ぐに辞職します。義兄泥舟は、出仕を断り在野で生きる道を貫きました。

鉄舟の厚い尊王心とその人柄を知る新政府筆頭参議西郷隆盛は、21歳の明治天皇の教育係就任を直接要請しました。明治5年（1872）、37歳の鉄舟は10年を期限に侍従を引き受けます。旧幕臣が政府高官になることへの批判に対し、鉄舟は変わらない「富士の山」の姿にその心境を托したともいいます。

天皇は、皇居の火事や兵士の反乱に真っ先に駆けつけ警護した鉄舟を深く信頼しました。征韓論で新政府は大分裂、隆盛は辞職します。隆盛を惜しんだ天皇は、慰留のために鉄舟を鹿児島に派遣します。再会がないことを予期してか、二人は別れに揮毫を交換、「成趣園」がそれです。（田中之）

明治天皇と山岡鉄舟　その2

若き明治天皇は、酒に強く力自慢で、相撲を取りたがり周囲を困らせました。ある時鉄舟は、急にいどんだ天皇を押さえつけ行いを諌めました。以後天皇は相撲はやめ、深酒は慎んだと言います。

天皇に仕えて10年後の明治15年（1882）、当初の決意どおり鉄舟は宮内省を辞職します。慰留を固辞する鉄舟をみて、天皇は彼に宮内省御用掛の役名を与えました。鉄舟の酒好きを知る天皇は、後に胃癌が進行し酒も飲めない鉄舟のことを聞き、自ら吟味した酒と盃を与えたと言います。

全生庵には、鉄舟が皇室より賜った品々が大切に伝えられていますが、日常の山岡家の生活は極めて質素でした。若い頃より貧乏ぶりは有名でしたが、任官して高給を得た時代も、夫妻は義弟石坂周造など周囲の者を惜しげもなく援助し、自身の貧乏を少しも気にしなかったといわれます。（田中之）

⑰書と剣

118、古紫石唐硯一式　鉄舟愛用
119、印章
120、一刀流免状
121、無刀流剣法秘伝　巻子本
122、無刀流剣道春風館記録
123、岩佐一亨書　一楽斎
124、鉄舟二十歳頃の書

⑰

⑰

書と剣

鉄舟は、剣・禅・書の達人として知られています。なかでも書は、弘法大師流51世の名書家岩佐一亭に書法を学び、15歳にしてその流派の52世を譲られ、師より一楽斎の号が与えられたほどでした。肉太の筆線を駆使しながら一気呵成に書きあげる禅味を帯びた書風で、生涯にわたって漢詩や禅語など多く書を残しています。一説には生涯で百万枚を書いたとも云われています。鉄舟が創建した全生庵には多くの書とともに使用した印章や硯が保管されています。

生涯のうちで最も力を注いだのは剣の道でした。9歳から真陰流を本格的に学びはじめ、その後、北辰一刀流の手ほどきを受け、修練を重ねて45歳で一刀流の奥義を究め、免許皆伝となりました。そして自ら無刀流を創立するほどの達人となりました。鉄舟の目指した剣とは、勝敗にこだわらず、無我の境地で心を鍛錬することにありました。つまり剣の修行は少年時代から志した禅の心にも通じるものだったのです。（田中之）

⑱　⑰

⑱鉄舟の禅修行と全生庵再興（禅と全生庵Ⅰ）

125、滴水老師述臨済禅師
126、鉄舟額　　肩あって・・・
127、全生庵全景（写真パネル）
128、葵観世音　　山岡鉄舟書
129、葵聖観音菩薩縁起
130、全生庵本堂建立勧進諸言

禅と全生庵

禅とは、仏教の一派である禅宗の修行の一つで、座禅による修行を通して、人間の心性の本源を悟ろうとする営みです。禅宗は達磨によってインドから中国に伝わり、日本にもたらされた教えで、鎌倉初期に栄西禅師が臨済宗を、次いで道元禅師が曹洞宗、また江戸時代になって明の隠元禅師が来朝して黄檗宗を開き、この三つの宗派によって禅がおこなわれてきました。鉄舟によって復興された全生庵は、座禅を基本として師から与えられた公案（問題）を座禅修行によって会得していく臨済宗の寺院です。全生庵には、達磨図や修行の状態をあらわした十牛図、禅の書など、鉄舟が書き残した書画が多く残されています。また境内の墓所には鉄舟をはじめ、鉄舟と因縁のあった石油開発者石坂周造、明治期の落語名人三遊亭円朝らの墓があります。（田中之）

鉄舟の禅修行と全生庵再興

鉄舟は13歳頃から父の教えを受け、人の道を極めるために剣の修行とともに禅の修行にも励みました。20歳の時に願翁禅師（川口・長徳寺）に師事し、以後、35歳になって星定禅師（三島・龍澤寺）、獨遠禅師（京都・相国寺）、洪川禅師（鎌倉・円覚寺）、滴水禅師（京都・天竜寺）に参禅、剣の修行とともに剣禅一如の境地を求めました。45歳の時には滴水禅師の印可（悟りを得たことの証明）を受けました。努力と至誠をもって禅の悟りを得た鉄舟は、自分が関わった鉄舟寺をはじめとする寺院の復興につとめ、自ら書を書いて寺院復興の資金に充てました。なかでも自らの菩提寺となった全生庵は、維新の動乱で亡くなった多くの人々を弔うため、かつて鎌倉建長寺の開山蘭渓道隆禅師が居住した全生庵の旧趾であった東京谷中の地に、普門山全生庵の寺号をつけて明治13年（1880）に再興した寺院です。そして江戸城の守本尊にもなった葵観音を遷し、同庵の本尊としました。（田中之）

⑲

⑲ 仏教再興と諸寺復興への願い（禅と全生庵Ⅱ）

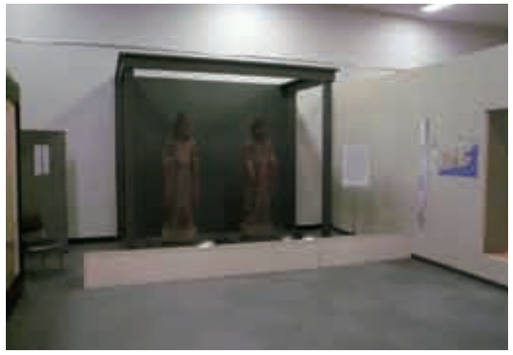
131、蒔絵重箱（静寛院宮遺品）
132、南無阿弥陀仏
133、福田会育児院設置願
134、奥山半僧坊大権現　　山岡鉄舟書
135、臨済寺山門（写真パネル）
136、絶筆大蔵経写経

仏教再興への願い

明治10年（1877）、静寛院宮（皇女和宮、第14代将軍夫人）が亡くなると、葬儀委員長の鉄舟は、宮の望みどおり反対を抑え夫の眠る増上寺へ埋葬しました。重箱は宮の遺品です。また、明治12年孤児救済・養育の施設である福田会育児院が東京に設立、宮内大書記官の鉄舟が後ろ盾となり、仏教界で初めて各宗指導者が横断的に参加、渋沢栄一ら旧幕臣も協力しました。書にある浄土宗高僧福田行誠はその中心人物です。また、臨済宗の名僧白隠への国師号下賜も実現させました。このように、鉄舟は維新後排斥されていた仏教全体の名誉回復に尽力した、仏教界の大恩人です。県内でも鉄舟寺再建を始め、「奥山半僧坊」の方広寺復興や臨済寺山門建設などを助けました。（田中之）

年表

㉒ ⑳



㉑

⑳禅と全生庵Ⅲ

137、十牛図
138、鉄舟達磨の図　廓然無聖
139、鉄舟達磨の賛　一花五葉開

㉑山岡鉄舟と文化財保護

140、木造梵天立像（伝日光菩薩）
141、木造帝釈天立像（伝月光菩薩）

山岡鉄舟と文化財保護

山岡鉄舟の事跡にはさまざまなものがありますが、深い仏教への帰依と文化財保護の先駆者であったという視点も忘れることはできません。静岡市清水区村松に所在する鉄舟寺は山岡鉄舟が明治16年に再興したことから鉄舟寺という名称がついていますが、もとをたどれば久能山頂にあり荒廃していた久能寺を再興したものです。今日、鉄舟寺は臨済宗妙心寺派に属していますが、もとは天台宗の古いお寺でありました。永禄12年（1569）までには武田信玄によって現在の地に移転させられました。天台宗は平安時代初期に最澄（伝教大師）によって中国からもたらされた密教であります。空海（弘法大師）が中国からもたらした真言宗とともにとても多くの仏教美術を今日に伝えています。鉄舟寺にも天台宗のお寺にふさわしい多くの仏教美術が伝えられました。仏像は長いこと荒廃したお寺に伝わったと言われる通り、とても痛んでいます。しかしながら、古い仏教美術の素晴らしさは今なお燦然と輝いています。（日比野）

㉒鉄舟寺再興に見る鉄舟と文化財保護

142、鉄舟寺外観（写真パネル）
143、木造菩薩坐像
144、木造蘭陵王面
145、久能寺経（複製）

鉄舟寺再興に見る鉄舟と文化財保護

「木造蘭陵王面」は中国・北斉の蘭陵王が周軍を破る姿を写したものとされ、奈良・平安時代に完成し、宮廷・大きな神社・お寺で演じられた雅楽に使われるお面です。この面の制作年代は鎌倉時代と考えられていますが、堂々とした立派な形には彫刻としての素晴らしさを見ることができます。「久能寺経」（複製）の原本は国宝に指定されている平安時代に制作された貴重なお経です。平安時代と言えば雅な文化を思い浮かべますが、お経が書かれている料紙の豪華で繊細な装飾は目を見張ります。「木造菩薩坐像」は鎌倉時代の運慶と並ぶ仏師である快慶の作風とよく似ていると指摘されています。小さいながらも引き締まった顔はとてもよい表情をしています。この仏像には両手がありません。無論もともとは両手がありましたが、仏像が制作されて800年間近く経っています。その間に両手が失われてしまいました。このような一部が失われていても、貴重な文化財であります。山岡鉄舟はとても大切な文化財を今日に残してくれるという素晴らしい仕事をした人でもありました。（日比野）

㉓次郎長・円朝と鉄舟（鉄舟をめぐる人々Ⅰ）

146、松岡萬銅板肖像・松岡神社外観（写真パネル）
147、相良油田（写真パネル）
148、鏝絵清水次郎長像　　入江長八作
149、山本長五郎（清水次郎長）の手紙
150、三遊亭円朝自画賛　髑髏図

㉔ ㉓

鉄舟をめぐる人々

明治維新後、剣・禅一味の境地を得た鉄舟のまわりには、彼を慕う多く人々が集いました。鉄門四天王の松岡萬、石坂周造をはじめ、関口隆吉、清水次郎長など明治という新たな時代の中で静岡県の発展に大きな功績を残した人物も少なくありません。

松岡萬は、牧ノ原開墾の提案者で、地元の農政・架橋にも貢献したことで知られ、岡部にあった郷村のために尽力したことにより、地元民から生きながら守護神として祀られました。また石坂周造は、清河八郎と共に尊皇攘夷運動に荷担して投獄され、赦免後に新政府に従事、後に実業家となり、日本の太平洋岸唯一の産油地であった相良油田（静岡県榛原郡菅山村、現在の牧之原市西部）を開拓しました。清水次郎長は、逆賊として駿河湾に放置されていた遺体を収容・埋葬したことを縁として鉄舟と親交を深めました。また明治期の落語界の名人三遊亭円朝は、鉄舟との縁で禅の修行に励み、滴水禅師から無舌居士の号を授けられています。人格を磨き上げた円朝はその芸道を極め大いに活躍しました。（鈴木）

㉔鉄舟の志を継ぐ人・関口隆吉（鉄舟をめぐる人々Ⅱ）

151、従三位勲三等故静岡県知事関口隆吉君之肖像
152、関口隆吉書簡（中條景昭宛）
153、巡察復命書（静岡県）
154、静岡県知事任命書
155、山岡鉄舟書簡（関口隆吉宛）
156、関口隆吉屋敷跡（八穂神社、写真パネル）
157、洞月院境内の顕徳碑（写真パネル）

鉄舟の志を継ぐ人　関口隆吉

関口隆吉は江戸時代から明治にかけて幕臣、明治新政府の役人として活躍した政治家です。天保7年（1836）、関口隆船と琴の次男として江戸に生まれ、17歳で父の職をつぎ御持弓与力となり、兵法、農政、経済などを学び、勝海舟、山岡鉄舟、高橋泥舟などと親交を結びました。慶応3年（1867）、徳川慶喜が大政奉還し、幕府が無くなると、慶喜に従い、江戸城明け渡しの立会人になるなど旧幕府のために働きました。

明治3年（1870）には父の出身地（遠州佐倉村）に近い月岡村（現菊川市）に家族とともに住み、中條景昭や大草高重らとともに牧之原の開墾事業に従事します。翌年、隆吉は明治政府の強い要請を受け、静岡を離れ、地方官（山形県、山口県など）を歴任、14年には元老院議官となり、16年に1府8県を視察します。17年静岡県令、19年静岡県知事となり治山、治水事業をはじめ県政に力をつくしました。しかし22年4月、開通したばかりの東海道線の列車衝突事故により重傷を負い、5月17日に亡くなりました。（田中文）

㉖ ㉕

㉕ 鉄舟入定

158、受爵状　叙従三位

159、鉄舟入定像　南禅寺毒湛老師賛

160、鉄舟弔句（勝海舟）

161、鉄舟弔句（高橋泥舟）

鉄舟入定

鉄舟は50歳を過ぎた頃から健康が優れず、明治19年の春頃から胃病が重くなり、明治21年7月19日、胃癌のため53歳でその生涯を閉じました。幕末の動乱から明治維新にかけて新しい日本のためにその生涯をささげた鉄舟の亡骸は、自らが創建した全生庵に葬られました。

鉄舟は、病床につきながらも剣・禅一味の精進を続け、亡くなる数日前にも稽古着を身につけていました。亡くなる直前、自らの死期を悟り、体を清め、白衣に着替えて病床に正座し、眠るが如くの大往生を遂げたといわれています。その様子を写した図が鉄舟入定像として全生庵に残されています。また、鉄舟とともに幕末の三舟と称せられた勝海舟と高橋泥舟（鉄舟の義理の弟）が、鉄舟への弔いの句をしたためた書も残されています。

鉄舟は、亡くなる前年の明治20年に華族に列せられ、爵位を授けられました。そして亡くなる1ヶ月前には従三位が追贈され、死後その勲功によって勲二等に叙されました。（田中之）

第4部　幕末明治の美術

㉖ 幕末･明治の日本画家

162、蘆荻葦鷺図　　渡辺小華筆

163、渓山訪友図　　鈴木香峰筆

164、龍虎図　　柴田泰山筆

165、寿老人図　　狩野芳崖筆

㉖

幕末･明治の日本画家

幕末明治期になると、江戸時代後期に発展した様々な画派の様式を受け継ぎながらも、時世相を反映した個性的な画家たちが登場します。当時の主な流派として、江戸時代を通じて大きな勢力をもった幕府御用絵師・狩野派、京都を中心に写生的な画風で一世を風靡した円山四条派、江戸で開花し庶民の美術として発展した浮世絵、中国の文人文化にあこがれた文人画などがありました。とりわけ、この時期文人画は全国的に広がりをみせ、静岡でも盛んに文人画家によって書画会などが開催されています。ここでは静岡にゆかりある画家のうち、狩野派と文人画、特に三河国田原藩士であった渡辺崋山や椿椿山など文人画家で写実を意識した画系の作品を紹介します。（吉田）

㉗ 明治前期の洋画家

166、巨岩海浜図　　川村清雄作

167、静物写生　　川村清雄作

168、日本風景画　　徳川慶喜作

169、岡田良一郎像　黒田清輝作

㉗

明治前期の洋画家

高橋由一が、その迫真的な表現に驚き、油彩画家を志したことはよく知られています。しかし明治初期の洋画は、油彩画の技法としての珍しさはあっても、油彩画表現ならではの新しい視覚、つまり遠近法、明暗法を駆使した絵画表現には未だ到達していませんでした。当時の油彩画は画題だけでなく技法においても日本画の域を抜け出ていませんでした。

新しいものを好んだ15代将軍徳川慶喜は、写真のほか油彩画も残しています。明治元年（1868）に徳川藩によって設立された沼津兵学校に旧幕府の洋学者をそろえたことからもわかるように、慶喜は最新の西欧の情報の中心にいました。また、幕臣で16代家達と交友し、留学して油彩画を研究した川村清雄は、本格的な油彩画の技術を獲得した初期の画家といえます。川村は、油彩画ならではの新しい視覚である、遠近法と明暗法を自由自在にあやつり、それを日本的主題と融合させ、独特の味わいあるタッチによる優れた作品を残しました。（吉田）

㉘

㉘ 明治前期の版画家

170、東京名所図

（「高輪牛町朧月景」「浅草夜見世」「日本橋夜」「大伝馬町大丸」）　小林清親作

明治前期の版画家

江戸時代、庶民の美術として爆発的に広まった浮世絵版画とその多色刷り木版の技術は、明治初年において印刷文化の中心にありました。しかし木版画に代わる技術として、石版画や銅版画など様々な印刷技術が誕生すると、次第にその役割を終えることになります。

明治期の浮世絵には、舶来の絵具を多用した毒々しいほどに強烈な色彩の作品が数多くみられます。これらは「明治赤絵」といわれ、安価な量産品でした。しかしその一方で、西洋画の洗礼を受けたこの時期、浮世絵版画の伝統的技法により、「光と影」を意識した新しい表現も誕生します。これはいわば浮世絵版画という木版画の技術の粋をつくした作品ともいえ、この時期だからこそ生まれた表現といえるでしょう。ここでは「光線画」と呼ばれる、文明開化の「光と影」を伝統的な浮世絵木版画の技術をもってとらえた、幕臣画家にして最期の浮世絵師・小林清親の代表作「東京名所」シリーズを紹介します。（吉田）

㉙

㉙ 幕末･明治の写真家、画家

171、下岡蓮杖自写像（写真パネル）

172、蓮杖写真館（写真パネル）

173、下岡蓮杖撮影江川英武像（写真パネル）

174、下岡蓮杖資料（写真パネル）

175、下岡蓮杖撮影三人の少年（写真パネル）

176、下岡蓮杖撮影琴を弾く女（写真パネル）

177、函館戦争図、台湾戦争図（写真パネル）

幕末･明治の写真家、画家、下岡蓮杖

下岡蓮杖は写真家の元祖と言われた人物ですが、今日では必ずしも最初の写真館を開設した人物ではないと考えられるようになりました。それでも、日本の写真家ではごく初期の人であることには変わりありません。下田の出身で最初は画家になるために江戸で学びました。その後、下田に戻り、下田の奉行所の手伝いをするうちに写真技術を学びました。今日伝えられている蓮杖の写真を見ますと人物と風景を撮った写真があります。これらは外国への土産物あるいは外国に日本の珍しい風物を紹介するものでした。「函館戦争図、台湾戦争図」は横5メートル近いとても大きな作品です。これはパノラマ画と考えられます。この明治の初めは外国や国内の珍しいものを紹介する博覧会が催され多くの人々が見に出かけました。「パノラマ館」と呼ばれる一種の見世物小屋もありました。このような大きな絵はジオラマとして制作されたものです。（日比野）

■3.「山岡鉄舟と明治の群像展」の学生ギャラリートーク

「博学連携」が重視されてきている今日、博物館と学校関係者が施設利用の望ましい在り方について検討したり、利用促進を進める取り組みが様々に行われてきている。

これまで学校では学習との関わりから博物館等の施設を見学する活動は行われてきていた。しかし多くの場合、学校側からの一方的な見学であり、施設をどのように利用するか、子どもに施設を利用させることでどのような力を身に付けさせたいのか等、施設側の担当者との十分な連携がないまま実施されてきているのが現状である。そのため博物館がもつ豊富な情報を生かし切れないまま活動が展開されている。まさに学校教育に携わる教師と博物館の関係者等との連携こそがこの問題解決に向けての大きな鍵であるといえる。

そこでこの課題克服のために本展示会では、「博学連携」推進の一方策として、今後教師を目指す教育学部の学生によるギャラリートークを位置づけ、博物館をもう一つの教室、もう一つの学校として活用できる教師の育成を目指し、そのために必要とされる資質・能力形成の場としたのである。専門的知識を必要とするギャラリートークではあるが、学生自身が持つ知識をどのように活用して、どのように来館者に表現し、伝えていくかというコミュニケーション・メッセージを重視し、個々の学生の個性や特性を生かした取り組みとした。これは、今後、博物館を子どもたちに利用させるときには欠かせない教師に必要な姿勢、能力であり、子どもの学びの場を広げる貴重なコンセプトとなる。つまり博物館利用において重要な点は、博物館で子どもに何を学ばせたいのかの明確化である。

また博物館展示は、地域の特色を発見する貴重な場でもある。本展示会における山岡鉄舟はまさに地域発見の機会、場であり、地域を知る重要な入り口である。同時に博物館内の展示方法を理解することにより、静岡という地域の特色・特性との関連性を知る重要な手がかりを得、そこには隠れたメッセージがあることに共感したり感動したりする。このようにまず教師自身の知性と感性を豊かにすることが「博学連携」への大きな一歩になると考える。学芸員資格を取得するための博物館実習ではなく、教育学部における教員養成スキルとして博物館利用の方法を体験的に学ぶ機会は、これからの教員養成への新たな扉を開けることになる。この意味においてギャラリートークを体験したことは、学生にとって教師として必要となるスキル形成の場となったといっても過言ではない。

以下は展示会を終えての学生の感想である。

○「あれだけ研究をしたのに、いざやってみるとわからないことや口でうまく説明できないことばかりだった。この展示会で今の自分に足りないものがみえてきた。ギャラリートークは教師に必要な説明・解説する力、表現する力を鍛えてくれる良い活動だと思う。研究したり実際にトークをしたりすることは本当に大変だったが、それ以上に説明した後の達成感や満足感は忘れることはできない。」

○「今までの研究は『つもり』でしかなかったが、会期中は毎日家に帰っては資料を読み返したり、調べ直したり、仲間の解説を聞いたり、お客さんの意見を聞いたりと、常に勉強漬けでした。しかしお客さんの拍手や『ありがとう』『とてもよくわかったよ』といっていただけたことが、私の大きな心の支えになりました。本当に大きな達成感・充実感でいっぱいです。」

○「日常生活や大学の授業だけでは簡単に身に付けられることのできない『力』を身に付けられたような気がします。」

学生によるギャラリートークは今後の「博学連携」に向けて大きな一石を投じたと考える。（安藤　雅之）

【記録】山岡鉄舟と明治の群像展

■おわりに

今回の展覧会は限られた時間の中で展示構成を考え、解説を執筆し、出品依頼もしなければならなかった。最初の企画運営委員会の開催から展覧会までの日程は以下の通りであった。

平成21年10月17日　第1回「山岡鉄舟と明治の群像展」企画運営委員会

平成22年1月31日　第2回「山岡鉄舟と明治の群像展」企画運営委員会

展覧会は3月10日～3月22日ということが決まっており、会議の開催から展覧会まで5カ月としても印刷、ディスプレイ業者への発注などから言えば原稿作成、出品依頼は2ヶ月半であった。

このような時間の制約の中で準備がされたのであるが、出品交渉については各所有者ともに大変協力的であった。ほぼ、予定通りの資料を展示することができた。しかしながら展示の全体を「絵解き」の空間にしたいという点からは、やはり難しい内容となってしまったことは否めない。そうした中で写真パネルを多用したことと、解説を多くしたことから入館された方々はずいぶんとゆっくりと鑑賞されていた。学校への広報が功を奏して親子連れの姿も見られた。しかし圧倒的に多いのは高齢者の姿であった。このような高齢者の姿を見ると、子供向きなどと無理して言わなくても高齢者向きであるということでもよいかもしれないということを感じた。

「絵解き」についての観点からは展示そのものはやや満足できるものではなかったがギャラリートークを担当した学生諸君の活躍によってその幾分かは解消されたと考えている。会期12日間の入館者は4000人余であったが学生のギャラリートークを聞いた人は総入館者数4041人のうち、1,000人弱の人々がギャラリートークを聞いてくれていた。

ギャラリートークは毎時にスタートすることとし2名が1チームで会期中、毎日実施した。このトークは常葉学園大学教育学部社会専攻1年生が担当したが、必ずしも歴史を学んでいる学生ではなかった。1回の解説で多い時には30人くらいの人が聞いていたし、終わると拍手が出ることも多かった。

この様子を見ていて私は気がついたのであるが日本最北の動物園、旭山動物園が再生したのも飼育係の人たちが自分が担当する動物の解説をはじめたのが一つのきっかけであったということを思い出した。飼育係の人たちが見ている裏の動物の姿を直接聞くということが入館者にとっては新鮮であったからである。寝てばかりいる動物ではなく生きた姿が見られるようになったのである。学生たちの十分ではないが、自分たちが一生懸命調べた内容は山岡鉄舟展を見に来た人たちにも十分通じたのではないだろうか。

学芸員という人材が資料の研究者であることは無論であるが、その資料の研究者であるということは学芸員の多くの仕事の一部であるということを改めて気づかせてくれた展覧会であった。

おわりに展覧会の実施にあたって企画運営委員の皆さん、会場館、出品者など多くの方々のご協力を受けたことに心よりお礼申し上げます。また、本稿の編集には(株)ブレーンの協力を受けました。

資料1

「山岡鉄舟と明治の群像展」企画運営委員会（担当）

委員長	日比野秀男	常葉学園大学　総括、第4部
副委員長	織田　元泰	常葉学園大学　総括
	土橋　幸彦	財団法人駿府博物館　総括
委員	安藤　雅之	常葉学園大学　第2部
	小林　明	久能山東照宮博物館　第1部
	鈴木　基之	静岡県立掛川工業高等学校 第1部、第3部
	田中　文雄	前静岡県立中央図書館　第3部
	田中　之博	三島市郷土資料館　第1部、第3部
	福原　章浩	静岡市立賤機中学校　第2部
	吉田　恵理	財団法人静岡市文化振興財団　第4部
顧問	田村　孝子	財団法人静岡県文化財団
事務局	財団法人静岡県文化財団	

（所属は展覧会開催時）

関連事業など

①開会式　3月10日（水）　150名

②特別講話「山岡鉄舟の人と生涯」（全生庵住職　平井正修）
3月10日（水）　205名

③講演会「教育事始メ」（常葉学園大学大学院准教授　安藤雅之）
3月13日（土）95名

④特別イベント「講談と講演で識る山岡鉄舟」
（講談師　宝井馬琴、小説家　山本兼一）3月20日（土）405名

⑤ギャラリー・トーク（常葉学園大学教育学部社会専攻1年生）1日6回、会期中計64回実施、参加者延べ931人

⑥ガイドブック（日比野秀男編・著）A5版、16p、入館者全員に配布。

⑦入館者総数　4041名

⑧メディア紹介　NHK静岡（3月10日）、SBS静岡放送（3月10日）、

資料2

ごあいさつ

江戸時代の終わりから明治の初めは福沢諭吉が「人生を２回過ごしているようだ」(『文明論之概略』)と言ったとおり、江戸幕府の崩壊による政治体制の転換から近代教育・文化の誕生に至るまで大きく変貌しました。このような大きな変革は、その変革を実現した先人達の労苦によって成し遂げられたことは間違いありません。

２１世紀にはいった今日も、すさまじい科学の進展と社会構造の変化はまさに現代に生きる私たち自身が「人生を２回過ごす」ことになりつつあります。ここで改めて江戸から明治への変革期を先人達はどのように乗り越えたかについて再確認することは、私たちに大きな勇気と指針を与えてくれるに違いありません。

この展覧会は明治の初めに静岡県とかかわりを持ち、社会の変化に的確に対応し、目覚ましく活躍した山岡鉄舟をはじめとする先人達を紹介するとともに、当時の新しい教育と文化の誕生についての認識を新たにする機会を提供します。

むすびに、会場を御提供いただきました財団法人駿府博物館様、また貴重な作品をご出品いただきました全生庵・鉄舟寺・磐田市教育委員会・沼津市明治史料館・富士市立博物館様をはじめ、多くの皆様の御理解と御協力に対し深く感謝の意を表します。

主催者

（会場パネル・ガイドブック）

資料3

「山岡鉄舟と明治の群像展」のみどころ

「第１部　静岡県を築いた明治の群像」では、鉄舟をはじめ最後の将軍・徳川慶喜、西郷隆盛、関口隆吉など明治前半に活躍し、静岡県ともゆかりの深い人物を紹介します。「第２部　近代静岡の教育」では明治初期に建てられた岩科学校（松崎町）、見付学校（磐田市）などを紹介するとともに当時の授業がどのように行われたのかなどについて実物資料によって見ていただきます。今日考えましても掛図などはとても視覚効果に富んだものであります。短い期間ではありましたが静岡学問所、沼津兵学校など当時の日本のトップクラスの教育機関が静岡県にあったことは驚きです。「第３部　山岡鉄舟・人と偉業」では鉄舟の人と業績の全体像を紹介します。鉄舟は幕臣で明治新政府では明治天皇の侍従として活躍しました。剣術の修行、書との出会い、仏教の擁護など様々な分野で活躍しました。鉄舟という人物を評した西郷隆盛の言葉に「命もいらぬ、名もいらぬ、何んとも始末に困る」という表現は鉄舟という人物をとてもよく言い表しています。「第４部　幕末明治の美術」では幕末から明治という大変な変革の時に生まれた美術について見ていただきます。社会の変革と同じように美術においても新しさが求められましたが、その一面で、以前からの美術を楽しむ人たちがいたこともたしかです。洋画、日本画、版画、写真などから新しい時代の息吹というものを感じていただきます。

この展覧会を通して、江戸時代から近代日本の始まりという激動の変革期において鉄舟をはじめ明治の先人達はどのようにして生き抜いたのか知っていただきたいと思います。短い期間ではありますが、政治、教育、文化、産業など様々な分野で次々と新しい改革がなされたことに驚いてしまいます。　困難な時代に生きる私たちに「こんな大変な時代にたくましく生きた先人達がいたんだ」ということを知ることは、大きな勇気と自信を与えてくれるに違いないと確信しています。最後に、この時代を紹介するには必ずしも十分ではなかったということについてお詫び申し上げておきたいと思います。一つのテーマだけで十分に展覧会ができる程の大きなテーマでした。

この展覧会に多大なご協力をいただいた多くの方々に厚く感謝の意を表します。

（文責　日比野秀男）

（会場パネル・ガイドブック）

資料4

山岡鉄舟とその時代

時代	西暦	和暦	おもなできごと
江戸	一八〇二	享和　二	十返舎一九「東海道中膝栗毛」を刊行する
			勝海舟生まれる
	一八二五	文政　八	異国船打ち払令発布
	一八二八	文政　十一	シーボルト事件起きる
			西郷隆盛生まれる
	一八三六	天保　七	山岡鉄舟小幕臣の四男として江戸で生まれる
	一八三七	天保　八	大塩平八郎の乱起きる
	一八四一	天保　十二	天保の改革令を発する
	一八五三	嘉永　六	ペリー来航
	一八五四	嘉永　七	日米和親条約に調印する
		安政　一	東海地方に安政東海地震起きる
	一八五五	安政　二	江戸を中心に安政大地震起きる
	一八五八	安政　五	日米修好通商条約に調印する
	一八六〇	万延　一	桜田門外の変起きる（井伊直弼暗殺）
			薩摩藩、長州藩を中心に尊皇攘夷運動が起こる
	一八六六	慶応　二	坂本龍馬の仲介により薩長同盟が結ばれる
	一八六七	慶応　三	徳川慶喜、将軍職辞退を朝廷に奏上する（大政奉還）
明治	一八六八	明治　一	鳥羽伏見の戦いで徳川慶喜敗れる　戊辰戦争
			山岡鉄舟小駿府で西郷隆盛と会見する
			西郷隆盛と勝海舟が江戸で会談し、江戸城無血開城となる
			徳川慶喜小松岡周らを率いて水戸から駿府（宝台院）に転居し、謹慎する
			駿府藩小府中学問所の頭取に向山黄村、一等教授に中村正直を任ずる
			陸軍学校の学校頭に西周が任じられる
	一八六九	明治　二	駿河府中を静岡と改称する
			徳川慶喜小謹慎を解かれ、宝台院から紺屋町代官所（現浮月楼）に移る
	一八七〇	明治　三	中村正直小「西国立志編」を静岡で刊行を開始する
	一八七一	明治　四	静岡藩小静岡県となり、徳川家達小藩知事を免ぜられる（廃藩置県）
			山岡鉄舟小茨城県の初代知事となる
			静岡県庁小ドイツ人クラークと学問所の教師として3年間の契約を結ぶ
			沼津兵学校小廃止となり、江原素六らが自費運営を図る
	一八七二	明治　五	中村正直小「自由の理」を静岡で刊行する
			福沢諭吉小「学問のすすめ」を刊行する
			学制発布
			静岡学問所小廃止され、クラークらは私立慶機社（私立英語学校）を設立する
	一八七三	明治　六	静岡新聞小発行される
			クラークが文部省より開成学校教師を任ぜられ、伝習所（旧学問所）は廃止となる
	一八七五	明治　八	静岡県小師範学校を設置し、初代校長に江原素六を任ずる
	一八七七	明治　十	西南戦争小起き、西郷隆盛没す
	一八七八	明治　十一	クラークがニューヨークで「日本における生活と経験」を刊行する
	一八七九	明治　十二	静岡師範学校で民権結社参同社小結成される
	一八八〇	明治　十三	国会開設の建白書小提出され、自由民権運動小盛んとなる
	一八八三	明治　十六	静岡英学校小開校する
			山岡鉄舟小東京谷中に全生庵を創建する
			山岡鉄舟小久能寺を再興する
	一八八八	明治　十九	淡谷太郎ら8人で大臣暗殺を計画し、検挙される（静岡事件）
	一八八八	明治　二十一	山岡鉄舟小没する
	一八八九	明治　二十二	大日本帝国憲法小発布される
	一八九〇	明治　二十三	第一回総選挙小行われる
	一八九一	明治　二十四	中村正直小没する
	一八九四	明治　二十七	日清戦争起きる
	一八九七	明治　三十	西周小没する
	一八九九	明治　三十二	勝海舟小没する
	一九〇四	明治　三十七	日露戦争起きる

（福原章浩作成）

資料5

文化庁「地域文化芸術振興プラン」静岡県の成立と近代教育の夜明け

山岡鉄舟と明治の群像展

主催：財団法人静岡県文化財団／地域文化芸術振興プラン静岡県実行委員会／文化庁／静岡県　特別協力：財団法人駿府博物館

展示目録

期間 3月10日(水)～22日(月) 於　駿府博物館

第１部　静岡県を築いた明治の群像

テーマ	場所	No.	作品名	作者	時代	員数	所有者
江戸幕府から明治新政府に	フリースペース	1	鉄舟居士木像	高村光雲	昭和 9 (1934) 年	1 躯	全生庵
		2	山岡鉄舟居士之讃　石碑			1 枚	全生庵
		3	大政奉還、王政復古、戊辰戦争、廃藩置県、地租改正			1 枚	パネル
戊辰戦争		4	末広五十三次図会 (目次、日本橋、江尻、府中、藤枝、京都)	二代国貞ほか	慶応元 (1886) 年	6 枚	浜松市美術館
最後の将軍 徳川慶喜	1	5	一行書「仰之弥高」	徳川慶喜	明治	1幅	久能山東照宮博物館
		6	徳川慶喜・家達像	玉置金司 矢崎千代治	明治 24 (1891) 年	1 面	久能山東照宮博物館
		7	登美宮吉子和歌短冊	登美宮吉子	明治 10 (1877) 年	1 枚	久能山東照宮博物館
若き日の山岡鉄舟	2	8	鉄舟肖像　自賛	山岡鉄舟	明治 19 (1886) 年 11月	1 幅	全生庵
		9	高山陣屋写真(高山市　国史跡)			3 枚	パネル
		10	山岡家系図			1 枚	パネル
		11	読書講兵	清河八郎		1 幅	全生庵
	3	12	尊攘遺墨	清河八郎	万延元 (1860) 年か	1 巻	全生庵
		13	清河八郎肖像スケッチ			1 枚	
		14	伊藤博文等書簡集 (山岡鉄太郎、関口隆吉宛)	山岡鉄太郎	元治元 (1864) 年～慶應元 (1865) 年	1 巻	静岡県立中央図書館
		15	鉄舟青年期(33 歳)の写真		明治元 (1868) 年	1 枚	福井市立郷土博物館
江戸無血開城への道	4	16	江戸開城談判図	結城素明	大正 15 (1926) 年	1 枚	聖徳記念絵画館
		17	戊申解難録(慶應戊辰三月駿府大総督府於テ西郷隆盛氏ト談判筆記)	山岡鉄舟	明治 15 (1882) 年	1 冊	全生庵
		18	山岡鉄舟手記(慶應戊辰三月駿府大総督府ニ於いて西郷隆盛氏ト談判筆記)	山岡鉄舟	明治 15 (1882) 年	1 冊	静岡県立中央図書館
		19	鉄舟胴乱		幕末	1 口	全生庵
静岡藩を支えた海舟・鉄舟	5	20	「駿藩役名便覧」		明治2 (1869) 年 1月	1	静岡県立中央図書館
		21	勝海舟肖像写真		維新前後か	1 枚	パネル (福井市立郷土博物館提供)
		22	鉄舟肖像　勝海舟画賛	勝海舟	明治年間	1 幅	全生庵
		23	牧之原茶園に立つ中條景昭像	池田隆三郎	昭和 63 (1988) 年	1 枚	パネル
		24	牧之原開拓士族名簿			1 枚	パネル (島田市博物館提供)
		25	士族開墾地絵図面			1 枚	パネル (島田市博物館提供)
	6	26	山岡鉄太郎書簡 (関口隆吉宛)	山岡鉄太郎	明治 2 (1869) 年	1 巻	静岡県立中央図書館
		27	関口隆吉書簡(勝海舟宛)	関口隆吉	明治 2 (1869) 年	1	静岡県立中央図書館

第２部　近代静岡の教育

テーマ	場所	No	作品名	作者	時代	員数	所有者
近代教育の芽生え～寺子屋～	7	28	寺子屋 (UNE ECOLE JAPONAISE)	エメ・アンベール (画工:L.Crepon)	明治 3 (1870) 年	1	個人蔵
		29	実語教			1 冊	磐田市教育委員会
		30	庭訓往来		文化 3 (1806) 年	1 冊	磐田市教育委員会
		31	孝教		文化 12 (1815) 年	1 冊	磐田市教育委員会
近代教育の幕開け	フリースペース	32	女大学			1 冊	磐田市教育委員会
		33	寺子屋読書千字文		天保 14 (1843) 年	1 冊	磐田市教育委員会
		34	一掃百態(複製)	渡辺崋山	文政元 (1818) 年	1 冊	個人蔵
近代教育の幕開け	フリースペース	35	高札		明治 5 (1872)年	1	磐田市教育委員会
		36	第六単語図		明治 7 (1874)年	1 面	富士市立博物館
		37	第六連語図		明治 7 (1874)年	1 面	富士市立博物館
		38	単語篇	文部省	明治 5 (1872)年	1	磐田市教育委員会
		39	連語篇	東京書房	明治 6 (1873)年	1	磐田市教育委員会
		40	学問のすすめ	福沢諭吉	明治 5 (1872)年	1	磐田市教育委員会
		41	小学教則		明治 5 (1872)年	1	磐田市教育委員会
		42	洋算早学		明治 5 (1872)年	1	磐田市教育委員会
		43	小學讀本	文部省	明治 7 (1874)年	1	富士市立博物館
明治初期の小学校授業風景		44	見付小学校の机 (教室用)		平成 4 (1992) 年	3	磐田市教育委員会
		45	見付小学校の椅子 (教室用)		平成 4 (1992) 年	6	磐田市教育委員会
		46	教員人形 (立像)		平成 4 (1992)年	1 躯	磐田市教育委員会
		47	児童人形		平成 4 (1992) 年	3 躯	磐田市教育委員会
		48	小学入門(復刻版)			6	磐田市教育委員会
		49	掛け図(レプリカ:乗算九九図)			1	富士市立博物館
		50	明治の授業風景(岩科学校)		復元	1	パネル (松崎町振興公社提供)
寺子屋の授業風景		51	机 (寺子屋:原泉舎)		江戸時代末期	2	富士市立博物館
		52	師匠人形 (寺子屋:原泉舎)			1	富士市立博物館
		53	寺子屋で使われた書見台		江戸末期	1台	磐田市教育委員会
		54	子供人形 (寺子屋:原泉舎)			1	富士市立博物館
近代教育をリードした栄光の学校 Ⅰ ― 静岡学問所 ―	覗ケース①②	55	E.W. クラークの撮影した明治初年の静岡	E.W クラーク	明治 5 (1872) 年	1冊	静岡県立中央図書館
		56	E.W. クラークの撮影した明治初年の静岡	E.W クラーク	明治 5 (1872) 年	6	静岡市文化財資料館
		57	仙八肖像		幕末	1	横浜美術館
		58	ニューヨーク州商業会議所年報　(学問所所蔵書籍)		明治	2 冊	静岡県立中央図書館
		59	静岡街一覧之図		明治初年	1	静岡県立中央図書館
		60	無所争斎間取図		明治	1	富春院
		61	富春院境内		現在	1	パネル(富春院)
		62	尚志碑	吉野作造ほか	大正 15 (1926)年	1	パネル(富春院)
		63	静岡新聞第 1 号		明治 6 (1873)年	1	個人蔵
		64	自由之理		明治	1	富春院
	8	65	西国立志編	中村正直編	明治 3 (1870) 年	11 冊	静岡県立中央図書館
		66	中村正直肖像写真		明治	1	パネル (国立国会図書館提供)
		67	中村正直書 (軸)		明治	1	富春院
近代教育をリードした栄光の学校 Ⅱ ― 沼津兵学校 ―	9	68	徳川家兵学校掟書		明治元 (1868) 年	1	沼津市明治史料館
		69	沼津兵学校　校舎写真		明治元 (1868) 年	1	パネル (沼津市明治史料館提供)
		70	沼津兵学校　平面図		明治元 (1868) 年	1	パネル (沼津市明治史料館提供)
		71	西　周　肖像写真			1	パネル (沼津市明治史料館提供)
		72	沼津兵学校 生徒と教授陣集合写真			1	パネル (沼津市明治史料館提供)
沼津兵学校の教育	10	73	経済説略		明治 2 (1869) 年	1	沼津市明治史料館
		74	筆算訓蒙		明治 2 (1869) 年	1	沼津市明治史料館
		75	法朗西単語篇		明治 3 (1870) 年	1	沼津市明治史料館
		76	英国史略		明治 3 (1870) 年	1	沼津市明治史料館
		77	荒川重平　図画ノート		1869～1871	1	パネル (沼津市明治史料館提供)
		78	荒川重平　数学ノート			1	パネル (沼津市明治史料館提供)
		79	江原　素六　肖像写真			1	パネル (沼津市明治史料館提供)

明治初期に創設された小学校 ― 見付学校と岩科学校 ―	覗ケース③	80	見付学校　校舎写真			1	磐田市教育委員会
		81	岩科学校　校舎写真			1	
		82	出校当番証印簿		明治 6（1873）年	1	磐田市教育委員会
		83	見付学校幹事任命書		明治 9（1876）年	1	磐田市教育委員会
		84	卒業証書	水野信之助	明治 9（1876）年	1	磐田市教育委員会
		85	石盤･石筆･石盤ふき			1 組	磐田市教育委員会
		86	岩科学校･校長室			1	パネル作成（松崎町振興公社提供）
		87	振鈴			1	磐田市教育委員会
		88	児童の習字作品		明治初年	2	磐田市教育委員会
地域の実情に合わせた教育	11	89	地理初歩		明治 12（1879）年	1	磐田市教育委員会
		90	下等小学習字臨本		明治 12（1879）年	1	磐田市教育委員会
		91	児童心得	静岡縣學務課編	明治 15（1882）年	1	富士市立博物館
		92	坊中学校校舎			1	磐田市教育委員会
		93	中泉学校			1	磐田市教育委員会
		94	就学札	水野練之助		1	磐田市教育委員会
		95	遠江風土歌	立志社 近藤巳太郎	明治 6（1873）年	1	磐田市教育委員会
		96	改正　静岡縣誌　全	平山陳平編	明治 12（1879）年	1	富士市立博物館
	12	97	西之島学校図	掛沢竹雨	昭和 13（1938）年	1	磐田市教育委員会

もう一つの文明開化。（食の文明開化は明治　　5 年）

テーマ	場所	No	作品名	作者	時代	員数	所有者
博覧会の開催	13	98	元昌平阪聖堂に於テ博覧会図	昇斎一景	明治初期	1 枚	静岡県立中央図書館
		99	東京上野公園地　明治十四年第二回内国勧業博覧会場一覧之図	梅寿国利	明治 14（1881）年	3 枚続き	静岡県立中央図書館
あんぱんができるまで（山岡鉄舟から明治天皇に献上「明治 8 年」）		100	木村屋のあんパン写真		明治 7（1874）年 発売開始	1 枚	パネル
		101	あんぱん誕生物語（木村屋ホームページパネル）（5枚）			5 枚	パネル（木村屋総本店提供）
牛鍋･開化期の世相	14	102	『安愚楽鍋』（復刻版）		原本･明治 4 ～ 5（1871 ～ 72）年	5 冊	常葉学園短期大学
上野動物園の開園		103	上野動物園の開園写真		明治 15（1882）年	1 枚	パネル（東京動物園協会提供）
鉄道馬車		104	東京名所日本橋一京橋之間　鉄道馬車往復之図	紅英斎	明治 15（1882）年	3 枚続き	静岡県立中央図書館

第 3 部　　山岡鉄舟･人と偉業

テーマ	場所	No	作品名	作者	時代	員数	所有者
明治天皇と山岡鉄舟 Ⅰ	14	105	辞令（茨城県参事）		明治 4.11.13－ 12.9	1 枚	全生庵
		106	辞令（伊万里県権令）		明治 4.12.27－ 5.2.24	1 枚	全生庵
		107	和歌（晴れてよし曇りてもよし富士の山　もとの姿は変わらざりけり）	山岡歩	明治 5 年 12 月	1 幅	鉄舟寺
	15	108	水指　明治天皇御下賜		明治年間	2 口	全生庵
		109	ギヤマン銘酒瓶　明治天皇御下賜		明治年間	1 口	全生庵
		110	ギヤマン　明治天皇御下賜		明治年間	2 客	全生庵
		111	上野公園　西郷隆盛銅像		明治 30（1897）年	1 枚	パネル
	覗ケース④	112	成趣園　西郷南州書		明治 7（1874）年	1 面	全生庵
明治天皇と山岡鉄舟 Ⅱ	覗ケース⑤	113	御紋付銀盃　明治天皇御下賜		明治年間	1 口	全生庵
		114	御小皿･御土器　明治天皇御下賜		明治年間	5 客	全生庵
		115	任官状　侍従		明治 5（1872）年	1 枚	全生庵
		116	任官状　宮内少輔		明治 14（1881）年	1 枚	全生庵
		117	任官状　御用掛		明治 15（1882）年	1 枚	全生庵
書と剣	覗ケース⑥	118	古紫石唐硯一式　鉄舟愛用			1 面	全生庵
		119	印章「山岡高歩」二顆、「鐵舟」二顆、「藤原高歩」二顆、「山岡高歩之印」「鐵舟居士」「江上清風山！明月」「屏風千雙爲臨済宗法燈幕末～明治派本山越中州国泰寺第五十四世越叟禅師山岡鐵舟居士書」など			10 顆	全生庵
		120	一刀流免状		明治 19(1886)年 11 月	1 枚	全生庵
		121	無刀流剣法秘伝　巻子本	山岡鉄舟	明治年間	1 巻	全生庵
		122	無刀流剣道春風館記録		明治年間	1 帳	全生庵
	16	123	岩佐一亭書　一楽斎	岩佐一亭	幕末	1 幅	全生庵
		124	鉄舟二十歳頃の書	山岡鉄舟	幕末	1 幅	全生庵

鉄舟の禅修行と全生庵再興（禅と全生庵Ⅰ）	17	125	滴水老師述臨済禅師		明治年間	1 幅	全生庵
		126	鉄舟額　肩あって･･･	山岡鉄舟	明治年間	1 面	全生庵
		127	全生庵全景			1 枚	パネル（全生庵提供）
		128	葵観世音	山岡鉄舟	明治年間	1 幅	全生庵
仏教再興と諸寺復興への願い（禅と全生庵Ⅱ）	18	129	葵正観音菩薩縁起	山岡鉄舟	明治年間	1 巻	全生庵
		130	全生庵本堂建立勧進諸言	山岡鉄舟	明治年間	1 面	全生庵
		131	蒔絵重箱（静寛院宮遺品）		明治初年	2 揃	全生庵
		132	南無阿弥陀仏	山岡鉄舟、鵜飼徹定、福田行誠		1 幅	全生庵
禅と全生庵Ⅲ	19	133	福田会育児院設置願		明治 12（1879）年	1 枚	パネル
		134	奥山半僧坊大権現	山岡鉄舟		1 面	全生庵
		135	臨済寺山門写真	徳川慶喜撮影	明治年間	1 枚	パネル
		136	絶筆大蔵経写経	山岡鉄舟	明治年間	1 冊	全生庵
		137	十牛図	山岡鉄舟	明治年間	1 巻	全生庵
	20	138	鉄舟達磨の図　廓然無聖	山岡鉄舟	明治年間	1 幅	全生庵
		139	鉄舟達磨の賛　一花五葉開	山岡鉄舟	明治年間	1 幅	全生庵
山岡鉄舟と文化財保護	フリースペース	140	木造梵天立像（伝日光菩薩）		平安時代	1 駆	鉄舟寺
		141	木造帝釈天立像（伝月光菩薩）		平安時代	1 駆	鉄舟寺
鉄舟寺再建に見る鉄舟と文化財保護	21	142	鉄舟寺外観			1 枚	パネル
		143	木造菩薩坐像		鎌倉時代前期	1 駆	鉄舟寺
		144	木造蘭陵王面		鎌倉時代	1 面	鉄舟寺
		145	久能寺経（複製）		原本･平安時代	1 巻	鉄舟寺
次郎長・円朝と鉄舟	22	146	松岡萬銅板肖像･松岡神社外観		現代	1面･1枚	松岡神社
		147	相良油田写真		現代	2 枚	静岡県立中央図書館
		148	鏝絵清水次郎長像	伝･入江長八作		1 面	塩新田自治会
		149	山本長五郎（清水次郎長）の手紙	清水次郎長	明治 20～21年前後	1 幅	全生庵
		150	三遊亭円朝自画讃　髑髏図	三遊亭円朝	明治年間	1 幅	全生庵
鉄舟の志を継ぐ人　関口隆吉（鉄舟をめぐる人々Ⅰ）	23	151	従三位勲三等故静岡県知事関口隆吉君之肖像	増田寛厚	明治 22（1889）年	1 面	静岡県立中央図書館
		152	関口隆吉書簡（中條景昭宛）	関口隆吉	明治 10（1877）年	1	静岡県立中央図書館
		153	巡察復命書（静岡県）		明治 16（1883）年	1 枚	静岡県立中央図書館
		154	静岡県知事任命書		明治 19（1886）年	1 枚	静岡県立中央図書館
		155	山岡鉄舟書簡（関口隆吉宛）		明治 20（1887）年	1 巻	静岡県立中央図書館
		156	関口隆吉屋敷跡（八穂神社）写真パネル			1 枚	静岡県立中央図書館
		157	洞月院境内の顕徳碑			1 枚	文化政策室
鉄舟入定（鉄舟をめぐる人々Ⅱ）		158	受爵状　叙従三位		明治 21（1888）年	1 枚	全生庵
	24	159	鉄舟入定像　南禅寺毒湛老師賛	中田誠実画	明治年間	1 幅	全生庵
		160	鉄舟弔句	勝海舟	明治年間	1 幅	全生庵
		161	鉄舟弔句	高橋泥舟	明治年間	1 幅	全生庵

第 4 部　　幕末明治の美術

テーマ	場所	No	作品名	作者	時代	員数	所有者
幕末･明治の日本画家	25	162	蘆荻葦鷺図	渡辺小華	慶応 2（1866）年	1 幅	掛川市二の丸美術館
	26	163	渓山訪友図	鈴木香峰	明治 13（1882）年	1 幅	富士市立博物館
		164	龍虎図	柴田泰山	明治年間	1 幅	常葉美術館
	27	165	寿老人図	狩野芳崖	明治 14 -18（1881-5）年	1 幅	静岡県立美術館
明治前期の洋画家	28	166	巨岩海浜図	川村清雄	大正年間	1 面	静岡県立美術館
		167	静物写生	川村清雄	明治 8（1875）年	1 面	静岡県立美術館
	29	168	日本風景画	徳川慶喜	明治初期	1 面	久能山東照宮博物館
		169	岡田良一郎像	黒田清輝	明治	1 面	大日本報徳社
明治前期の版画家	30	170	東京名所図(「高輪牛町朧月景」「浅草夜見世」「日本橋夜」「大伝馬町大丸」)	小林清親	明治 9（1876）年	4 点	静岡県立美術館
幕末・明治の写真家、画家	フリースペース	171	下岡蓮杖自写像	下岡蓮杖	明治初年	1 枚	『幕末･明治の横浜展』カタログより
		172	蓮杖写真館	下岡蓮杖	明治初年	1 枚	『幕末･明治の横浜展』カタログより
		173	下岡蓮杖撮影江川英武像	下岡蓮杖	明治初年	1 枚	パネル（(財)江川文庫提供）
		174	下岡蓮杖資料	下岡蓮杖	明治初年	1 枚	パネル（(財)江川文庫提供）
		175	下岡蓮杖撮影三人の少年	下岡蓮杖	明治初期	1 枚	パネル（横浜美術館提供）
		176	下岡蓮杖撮影琴を弾く女	下岡蓮杖	明治初期	1 枚	パネル（横浜美術館提供）
		177	函館戦争図、台湾戦争図	原画制作下岡蓮杖	明治 8（1875）年	1 枚	パネル（靖国神社遊就館提供）

資料5

「山岡鉄舟と明治の群像展」

ガイドブック作成
日比野秀男

［ガイドブック］

1

2 3

4 5

6 7

8 9

10 11

12 13

14 15

16

【新聞寄稿】

「静岡新聞 平成22年3月6日（土）夕刊」

「朝日新聞、平成22年3月10日（水）朝刊」

【記録】山岡鉄舟と明治の群像展

静岡近代美術年表稿　昭和戦前編　1

立花 義彰

この年表は、『静岡県博物館協会紀要』第30号及び31号の「静岡近代美術年表稿　明治編」同29号「大正編」に継ぐ時代の年表であり、編集については共通した部分が多い。その着手は前二者より先行していたが、東京への出品関連の資料の多さや、戦中期の記事解釈等から難航していた。前者の問題については、記事内容の確認も含め『日本美術年鑑』、『出品目録』等を用いて必要と思われる事項について補い、後者の問題については、静岡県立美術館で中川雄太郎旧蔵諸資料複写等を参照し、更に明治編、大正編編纂の過程で新たに判明した静岡県出身作家の事項を加えて一応の区切に至った。

東京で出版された県人会誌『駿遠豆』は、在京の静岡県出身画家の動向を詳しく紹介しており、とりわけ静岡県美術協会については、中川の資料だけでは判らなかった諸活動についてもきわめて詳しく報道しており参考となる。

中川雄太郎（1910-1975）は、国画会に出品した版画家で、戦中期、県美術協会事務等を歴任した。戦後、中川の『郷土の画人』『静岡県版画史話』は県内美術唯一のまとまった先行研究と言えるが、偏向と誤謬が甚だしく、それゆえ今回本年表によって初めて明らかになる事項も多い。

静岡県美術協会は、昭和9年に発足し、昭和10年11月に第1回展を開催、今回確認できる範囲では、昭和18年第9回展まで活動している。何故、中川が自身の持つ資料を確認しなかったは不明だが、中川雄太郎の「郷土の画人」、『静岡市史』、また拙著「静岡の美術試論」等までが昭和16年第7回までとするは誤り。稿者恥じる他ない。

年表後半では、戦時下の銅像供出がどのような報道のされ方をされていたかがうかがわれるが、それら諸新聞報道―展覧会についても含め－は、報道のされ方が戦意高揚や奉納奉仕に偏している都合上、実態を正確に述べているかにはなお疑問が残ろう。

しかしながら、それらの不確かさに煩わされながらも、今日の我々に興味深くも読み取れる事は、芸術の地方への普及の時期・地方=郷土の時代から戦時体制強化期の、芸術家を取り巻く社会の有様であろう。

「美術」界の出来事―今日の電子情報化社会にも似た“炎上”現象、自主規制の形を取った“文化統制”等―の素材提供により、、この粗雑な素描も、今日的な意義を失っていないものと確信したい。

今号では、昭和元年から昭和5年までの部分を（1）として公表する。

凡　例

民友	『静岡民友新聞』
新報	『静岡新報』
静岡	『静岡新聞』
浜松	『浜松新聞』
東日	『東京日日新聞』
読売	『讀賣新聞』（地方版）
朝日	『朝日新聞』（地方版）
熱海	『熱海新聞』
駿遠豆	『駿遠豆』
美術年鑑	『日本美術年鑑』
出品目録	『昭和期美術展覧会目録』『大正期美術展覧会目録』『近代日本アートカタログコレクション』所収出品目録類及び原本等。
目録	中川雄太郎所蔵資料コピー
案内	中川雄太郎所蔵資料コピー
規則	中川雄太郎所蔵資料コピー

S．/　昭和　年　月　日

《》　作品名　（太字は図版が掲載されているもの）

他『アトリエ』『工芸』『中央美術』『塔影』『美術新論』『美之国』『みづゑ』は誌名を表記。各市町村史等は簡略に書名を表記。

大正15年・昭和元年　1925

1/ 1　駿東郡下各小学校教員第1回作品展覧会於郡役所。絵画、塑像、手工芸品の3類。（新報1/3）

1/17　孤渓俳画展覧会於浜松演武館。（浜松1/18,20）

1/18　三島神社宝物館着工。（民友1/19）

1/23　第13回日本水彩画会展於東京上野竹の台陳列館（-2/17）。
赤城泰舒《**百日草**》**《**松戸風景**》***石川欽一郎《**朝鮮の女**》*他。小泉癸巳男《かき舟》栗原忠二《道頓堀の夕》《薔薇》（美術年鑑S2*,みづゑno.251**,中央美術12-3***）

1/23　第22回太平洋画会展於東京上野竹の台陳列館（-2/17）。
杉本宗一《肖像》仙波均平《花》野田半三《静物》（出品目録）

1/24　浜松洋画協会新年会於浜松中村館。（浜松1/14）

1/24　山崎鵜水展観於静岡屋形町神明神社。山崎鵜水来静中。（民友1/22）

1/29　第3回槐樹社展於東京上野日本美術協会（-2/10）。
田辺嘉重《風景》《はぼたん》《静物》（出品目録）

1/　赤城泰舒他、水絵同盟結成。
（みづゑno.252,中央美術12-2,美術年鑑S2）

/　小泉癸巳男版画頒布会。（みづゑno.252）

/　本田庄太郎を浜松新聞記者訪問。（浜松2/2,3,4）

2/ 9　久石統嶺、結婚。（浜松2/8）

2/10　佐々木松太郎展於浜松演武館（-12）。（浜松2/6）

2/10　松蔭寺白隠禅師遺物展覧館地鎮式。（民友2/9）

2/11　栗原忠二送別会於三島竹葉亭。（新報2/13）
15日、再渡欧。（中央美術12-2）

2/13　和田三造講演会於見附高等女学校。（浜松2/16）

2/13　児童創作品展覧会於静岡商品陳列所・葵文庫他（-14）。（民友1/14）

2/16　第7回中央美術展於東京上野日本美術協会（-3/5）。
伊藤孝（会友）《**池畔**》《街道》（中央美術12-3,出品目録）

2/24　第13回光風会展於東京上野竹の台陳列館（-3/21）。
青木新作《登り道》赤城泰舒(会員)《秋景》《湖畔暮色》《伊豆山》《**夏の景**》*《精進湖登山道》石川欽一郎《支那閩江の滞船》《福州大橋橋畔》《福州河畔の廟》《福州の河岸》《**支那福州蒼前山**》**
小泉癸巳男《龍華寺へ行く道》清水柳太《干物と壺》野田半三《静物》水野以文《山の手風景》（みづゑno.254*,中央美術12-4**,出品目録）

2/26　第4回春陽会展於東京上野竹の台陳列館(-3/20)
栗田雄、入選。(浜松2/26)
茨木猪之吉《新緑》栗田雄《冬日小景》《**少女**》《郊外冬日》島田四郎《風景》中島松二《花の静物》原田聚文《沼》
（アトリエ3-4,中央美術12-4,出品目録）

/　川端三雄作品頒布会。(浜松3/2,7)

3/ 6　安倍郡教育品展覧会於静岡商品陳列所・葵文庫講堂・安倍郡公会堂（-7）。
（新報1/14,3/2,8、民友1/15,3/1,5）

3/ 6　俳画展覧会於静岡紺屋町楽雅堂（-10）。
（民友3/5）

3 /7　県教育会館開館。（新報3/7,8）

3 /7　第5回国画創作協会展於東京日本美術協会陳列館（-22）。
柏木俊一《**秋**》《鞍馬山門》（アトリエ3-4,出品目録）
梅原龍三郎《**江ノ浦の山**》*《**江ノ浦の家**》**《**江ノ浦**》***
（美術年鑑S2*みづゑno.253**,中央美術12-4***,美之国2-4,出品目録）

3/23　書画半折展覧会於浜松演武館。（浜松3/23）

3/24　全国漆器展覧会於静岡商品陳列所。
（新報3/15,30、民友3/26）

/　一碧楼揮毫会。(浜松3/25)

3/　中村岳陵、献上画の絵巻中の《宮島》を制作。

/　赤城泰舒、代々木北山谷185へ転居。
（中央美術12-4）

/　村本山雨楼『書画道』刊行。
（民友4/2,13,19,24,28,29,5/6,7,8,9,28,29,7/3,6,7,10,14,19,23,26,27,30,8/1,2,3,4,5,6,7,8,10,11,12,13,14,15,17,19,21,23,24,25,26,28,29,9/2,4,5,6,8,9,11,18,22,25,29）

/　野田半三、静岡高等学校講師となる。

4/ 2　野田半三個展於東京基督教青年会館（-4）。
（美術年鑑S2）

4/ 3　原崎一郎洋画展覧会於小笠郡堀の内。
（民友4/3）

4/ 9　浜松新聞社第4回展於浜松銀行（-18）。
上波雨蓬《**夏景山水**》松本紫園《**田家早梅**》岸波

静岡近代美術年表稿　昭和戦前編　1

柳渓《**富岳**》該山正遷《**十六羅漢**》佐藤紫雲《**富岳遠望**》石澤天崖《**三皇の図**》徳山探華《**山荘読書**》深野知堂《**老梅**》内野皎亭《**山水図**》水島爾保布《**鐘馗**》田中米邨《**玉堂富貴**》浦田廣季《**唐美人**》《**鐘馗**》小牧松園《**花園の鶏**》岸勝《**円頂双鶴**》石上蘭山《**梅渓尋旬**》渡辺守孝《**樵夫観瀑**》石澤天崖《**破墨山水**》川内南雪《**高士**》町井　山《**梅花書屋**》石上蘭山《**霜後渓山**》江花羽谷《**梅花書屋**》松本紫園《**初春**》佐久間雲涛《**春宵千金**》加藤南柯《**仙**》中村文舟《**夏日池亭**》入江當年《**美人図**》松浦朴堂《**霜風泌身**》内野皎亭《**山水**》矢野松玉《**老梅**》山口松涛《**蘆葉達磨**》佐久間天採《**富岳遠望**》林梅仙《**あやめ**》逸見静陽《**松に小禽**》加藤種月《**やなぎ**》佐久間雲涛《**亀**》野間日墨草《**秋景山水**》花盛秀鳳《**猫**》横山大観《**海上の松**》同《**渓谷勝景**》同《**深山渓流**》岡米堂《**春晴看花**》石澤天崖《**萬年報喜**》大河内米雲《**梅渓訪友**》柏谷素山《**双鶴**》杉原不仙《**雨後渓流**》林紫泉《**蓬莱山水**》榊原晴雲《**鯉群**》廣岡寛之《**高閣**》八尾春堂《**虎棲む山**》日向雷峯《**山水**》山下仙谷《**鷺**》日向紫翠《**猿猴**》橋本華洞《**雪景山水**》堪忍堂老年《**達磨**》掛澤竹雨《**竹林七賢人**》本多貞翠《**西山の春雨**》轟梅外《**曳船**》湊汲古《**秋景山水**》佐々木美山《**猛虎**》瀧山虹斎《**雨後山水**》榊原晴雲《**寛政美人**》渡辺直堂《**川蝉に鮎**》天野雨外《**陶淵明**》小林呉橋《**鐘馗**》山下青城《**花鳥**》藤島秀超《**登竜門**》同《**鶴亀千年**》一江秋芳《**双鶴**》鈴木鶴仙《**春景山水**》中山秋湖《**蛭子大黒**》宇山関鳳《**山水**》山下青崖《**牡丹と猫**》佐藤紫雲《**山鳥**》細谷秀鼓《**花鳥**》草刈樵谷《**初夏山**》白石挙松《**暁光**》大塚紅緑《**唐美人**》益田玉城《**風かほる**》杉山響洋《**瀧**》瀧山虹斎《**山水**》杉山響洋《**老梅**》中島石南《**山水**》大塚紅緑《**夕伊佐衛門**》村上委山《**牡丹**》古荘肇成《**雉子**》他。
（浜松3/19,21,23,24,26,27,28,29,30,31,4/1,2,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14,15,16,18,19,20,21,26）

4/10　岡本一平漫画会於静岡倶楽部(-12)。
（新報3/31,民友3/30）

4/10　袴田勇、外波山竹史に入門の予定。(民友3/31)

4/11　静岡県下小学児童書き方展覧会於静岡商品陳列所(-13)。
審査:沖六鵬、平岩高暉。(民友3/2,4/13)

4/11　新古書画半折展示即売於浜松蓮華寺。4/18同。
（浜松4/10,17）

4/11　村松益次郎描更紗帯地第1回展於浜松金井屋(-15)。(浜松4/11)

4/13　三條会於東京美術倶楽部。近藤浩一路《信楽早春》《葡萄》《残月》(みづゑno.255)

4/24　静岡尚美会漫画展於静岡商品陳列所(-26)。
池辺均他展示。服部亮英の揮毫。(新報4/22,民友4/8,23)

4/24　「子供と女に寄する」本田庄太郎個人展於浜松演武館(-26)。(浜松4/5,22)

4/24　山下青城、名古屋、長野に赴く。(浜松4/26)

4/25　山本瑞雲《**松島十湖銅像**》除幕。(浜松4/10,12,25*,26,新報T14.10/23,T15.4/15,25,民友4/19,25)
山本瑞雲、28日まで滞在。《服部倉次郎像》制作依頼を受ける。(新報4/30)

4/29　大村西崖、中国調査旅行(5/22)。(美術年鑑S2)

5/ 1　静岡清風会洋画展覧会於静岡商品陳列所(-3)。
（新報4/23,30）

5/ 1　三島光潮会第2回美術展覧会於三島記念館(-2)。(民友4/27)

5/ 1　第1回聖徳太子奉賛美術展於東京府美術館(-6/10)。
近藤浩一路《白雲無尽》都築真琴《春寒》中村岳陵《陸近し》藤井白映《採果》赤城泰舒《暴れた海》《春光》柏木俊一《水辺新緑》《沼畔疏林》川合改次郎《雨》栗田雄《ポーズせる裸女》《静物》原田聚文《春沼》《冬ざれ》松井昇《茶の萌む頃》《高原の秋》澤田寅吉[政廣]《星座》杉本宗一《肖像》《裸婦》二橋美衡《母性衝立》(出品目録)

5/ 2　柏木俊一主宰春光会、白隠坦庵良寛等先賢遺墨と現代大家作品による展覧会於三島魚半。
（民友4/27）

5/ 5　和田三造、見付青年団旗を制作し披露。
（新報4/30,浜松5/7）

5/15　三輪捨三郎個展於浜松演武館(-16)。
（浜松5/3,15,民友5/4）

5/　平井楳仙、静岡安田屋旅館に滞在。
（民友5/20,新報5/21）

5/22　静岡麗光会第2回洋画展覧会於静岡商品陳列所(-24)。(新報4/23,5/18,22,民友5/18,22)

5/28　諸大家近作品展覧会於静岡商品陳列所(-6/1)。
（新報5/27,30）

5/　近藤浩一路、中国へ写生旅行。(美術年鑑S.2)

/　中村秀吉の森山焼、珍重される。(民友5/22)

/　澤田政廣、王子町上十条1237へ転居。
（中央美術12-6）

6/ 2　東西大家日本画展・郷土美術展於東京日本橋三越(-7)。
近藤浩一路《閑居清韻》(中央美術12-7)

6/12　沼津美術協会主催新画清賞展覧会於沼津銀行。
（新報6/10,浜松6/7,27）

6/20　志太郡教育会展覧会於藤枝小学校(-25)。(新報4/23,6/18,22)

6/23　東西会美術展於東京松坂屋(-29)。近藤浩一路《鯉》(美術年鑑S2)

6/27　沼津美術協会漫画展覧会於大富館旅館部(-29)。
服部亮英、水島爾保布揮毫。(新報6/16,浜松6/11,13,26,27,29)

/　近藤浩一路、京都鞍馬口室町上ルに転居。
（中央美術12-7）

/　竹内栖鳳、沼津に静養中。(浜松6/27)

7/ 3　第3回白日会展於東京府美術館(-15)。
青木新作《道》(出品目録)

7/ 4　良寛追善祭於浜松新清館。(浜松6/29)

7/10　松島十湖逝去、享年78歳。(浜松7/11,12,19,民友7/11)

7/16　浜松工業試験場冬織物図案展覧会於同場(-25)。
（浜松7/16,民友7/16）

7/24　《鈴木佐次郎像》除幕式於雄踏小学校。
（浜松8/24）

8/　みづゑ会主催水彩画講習会於鳥取市高等技芸女学校。講師赤城泰舒他。(みづゑno.　)

8/ 2　浜松洋画協会主催絵画講習会於浜松誠心高女(-6)。(浜松6/13)

8/ 3　鷲津本興寺虫干し(-10)。(新報8/1)

8/ 5　安田呉竹富士登山、還暦及び富士登山40回を記念して百画揮毫。(新報8/6)

8/11　静岡県教育品展覧会於静岡師範学校・城内東尋常高等小学校(-20)。
（新報5/2,8/12,17,浜松7/23,8/17）

8/　栗原忠二、中旬よりパリに来り月末ロンドンに帰る。
（みづゑno.261）

9/ 4　第13回院展於東京府美術館(-10/4)。
近藤浩一路(同人)《**茶摘**》*《九里峡》中村岳陵(同人)《**梳髪**》*藤井白映《**伊豆風景**》杉本宗一《**憩ふ女**》*(美術年鑑S2*,美之国2-10、アトリエ3-10,中央美術12-10**,出品目録)

9/ 4　第13回二科展於東京府美術館(-10/4)。
曽宮一念《**梨畑道**》《田園晩秋》《アネモネ》《青色の静物》《グレキシニア》茨木猪之吉《若葉の頃》中村穆《卓上静物》(美術年鑑S2*,みづゑno260*.アトリエ3-10,中央美術12-10,出品目録)

9/14　曽宮一念、二科会友に推薦される。(美術年鑑S2)
本多庄太郎、東京府北豊島区赤塚村成増45に転

/　居。(浜松9/24)

9/25　東西諸大家美術品展覧会於県教育会館(-27)。
（民友9/21,26）

10/　静岡新報創刊35周年記念読者福引抽選外読者に山元春挙《大黒天》。(新報9/18)

10/ 3　静岡県主催第2回織物染色講習会於志太郡青島小学校講堂。(民友9/9)

10/ 8　第1回彩塵会展於大阪白木屋(12)。栗田雄他。
（中央美術12-12）

10/ 9　山田長政記念塔地鎮式。(新報10/10)

10/10　書画売立会於富士銀行本店。(浜松10/4)

10/12　静岡美術協会書画展於沼津山本旅館(-13)。
（浜松10/16）

10/14　瀬尾南海揮毫会於小山町室伏宅。(民友10/15)

10/　本多貞翠画会、沼津美術協会が主催。
（浜松10/16,11/15）

10/16　第7回帝展於東京府美術館(-11/20)
細井繁誠《路地》澤田寅吉[政廣]《影》
（出品目録）

10/16　第1回等迦会展於銀座松坂屋(-19)。
一木陜二郎他。(中央美術12-7,12)

10/20　静岡工芸協会第1回作品展覧会於静岡商品陳列所(-25)。(民友10/15,16,17,19,22)

/　柘榴社設立。曽宮一念他。(中央美術12-11)

10/23　無名会第1回展三島町記念館(-25)。(民友10/20)

10/31　浜松美術趣味普及会第9回古今書画陳列会於浜松渓泉堂。(浜松10/29)

11/12　郷土資料展於葵文庫(-14)。(民友10/19)
11/14　白隠遺墨展於沼津依田邸。(浜松11/13)
11/　竹内栖鳳、沼津に滞在。(浜松11/15)
/　沼津美術協会、益田玉城展予定。(浜松11/15)
11/21　白薇会展覧会於静岡商品陳列所(-23)。
(新報11/20、21、民友11/18,23)
佐伯米子、遠山五郎、塚本茂、近藤光紀、鈴木保徳、里見勝蔵、鶴田吾郎、鈴木良三、中村彝、鈴木信太郎、石橋武助、寺内萬治郎、耳野卯三郎、鈴木金平、伊藤成一、堀進二、野田半三、曾宮一念の特別陳列。
11/20　沖六鵬《誠忠詩歌屏風》完成披露。(民友11/23)
11/24　浜松工業試験場春夏物図案展覧会於遠州織物組合。(新報11/26)
11/25　北村西望《橘中佐銅像》静岡到着。(新報11/26,民友11/26,27)12/5地鎮式。翌3/10除幕式。
(民友2/28,5/4,7/25,8/18,10/3,5,11/16,24,12/6,24,S2.2/19,22,23,3/11,新報4/18,5/4,11/5 S2.1/30,浜松8/11,18,20)
11/　小林観爾来静。(新報11/26,浜松S2.1/19)
11/27　日本少年指導会名士揮毫頒布会於教育会館(-29)。(新報11/15)
/　大矢米年、来浜。信行社に滞在し揮毫。
(浜松11/29)
12/ 3　大村西崖展於東京日本橋三越(-7)。
(美術年鑑S3)
12/ 5　山本瑞雲《服部倉次郎像》除幕式於浜松弁天島。
(新報4/30,12/5,民友12/5,浜松12/5)
12/　現代大家絵画展(新報12/5)

昭和2年 1926

/　和田三造、磐田郡見付より東京に転居。
/　浜松工業試験場麻生技師、岡尾技手、浜松工業学校相生垣教諭、飛行第7連隊より依嘱された鳥瞰図の作成。(新報1/9)
/　伊豆山神社後奈良天皇親翰の国宝指定。
(東日静岡版1/11)
1/12　柳宗悦、来浜し中村邸にて講演会。
(浜松1/9,28,29)
1/14　小山翠村、沼津美術協会の招きにより、沼津に滞在し揮毫(-27)。(浜松1/9,28)
1/15　国際少年美術協会フランス児童自由画第5回展覧会於浜松国光館(-17)。(浜松1/16)
/　中村不折作品頒布。(浜松1/19)
1/21　白薇会第4回展於静岡商品陳列所(-23)。(美術年鑑S3)
1/22　第14回日本水彩画会展於東京府美術館(-2/9)。
赤城泰舒《**渋温泉風景**》等6点。(みづゑno.265*,中央美術13-3)
石川欽一郎《支那福州》《**山の男**》《田舎路》《小さき流れ》《山の女》
(美術年鑑S3*,みづゑno.265)
2/ 1　第7回日本創作版画協会展於東京丸菱(-5)。
栗田雄(会員)《静物》《風景》小泉癸巳男(会員)《不忍の梅雨》出品。(みづゑno265,出品目録)
2/ 9　近藤浩一路来静、静岡出身の義太夫大隈太夫襲名披露祝の緞帳を顕光院にて制作、12日に静岡歌舞伎座にて披露。(民友2/13)
2/11　浜松師範学校第2回洋画展覧会於浜松演武館(12)。板倉賛治《内海》他。(浜松2/6,10)
2/11　浜松市公会堂開館式。(浜松2/13.東日遠州版1/19)
2/12　第23回太平洋画会展於東京府美術館(-27)。
茨木猪之吉《晩秋高原》本間八重子《椿》松原郁二《静物》小林猷治郎《黒猫》(出品目録)
2/12　島田工芸協会製作品展覧会於島田第一小学校(-14)。(新報1/29)
2/18　商品陳列展覧会於静岡商品陳列所(-22)。
(新報2/23)
2/18　第14回光風会展於東京府美術館(-3/5)。
赤城泰舒(会員)《赤い上着》《曇り日》《夏の渓流》《山村夏景》《伊豆海岸》《**河口**》《静物》石川欽一郎(会員)《支那厦門港》《支那厦門鼓浪嶼》《支那厦門港泊船》《支那厦門龍頭山》《支那潮州田舎》《支那汕頭の街》《支那潮州韓江》一木陜二郎《M母堂肖像》小林猷次郎《富山遠望》清水柳太《旧都清水にて》(美術年鑑S3,みづゑno.266,出品目録)
2/19　静岡市九小学校連合児童作品展覧会於城内西尋常小学校(-20)。　(新報2/18,20)
3/　都築真琴、『アトリエ』に連載(-S6.2/)。
(アトリエ4-3,6,7,8,5-12,7-9,10,12,8-2)
3/ 3　青い目の人形展於教育会館(-7)。(新報3/4)
3/ 7　大村西崖逝去、享年60。銅像建設の募金。
(美術年鑑S3,中央美術13-8)
3/10　北村西望《橘周太中佐像》除幕式。
(民友3/2,11,19,4/8,新報1/30,2/25,3/11,4/7,東日静岡版2/14,3/11,12)。
3/11　浜松洋画協会展於浜松演武館(-12)。
(浜松T15.12/7,2/28)
3/11　第8回中央美術展於東京府美術館(-31)。
伊藤孝(会友)《冬の山》《ざくろ》《**森ヶ崎風景**》松原郁二《卓上》(出品目録,中央美術13-4)
3/20　函館師範学校長橋本文寿蒐集欧米児童図画展覧会於静岡師範学校(-22)。(新報3/20)
3/23　山内信一、沼津美術協会の招きにより来沼。臨川閣大松に滞在し揮毫。(浜松3/16,24,31,新報4/15)
3/26　俣野弟四郎個人油絵展覧会於県立沼津中記念会館(-27)。(新報3/24)
3/30　第4回槐樹社展於東京府美術館(-4/14)。
青木新作《早春風景》田辺嘉重《体操》《風景(1)》《風景(2)》《伊豆山》《花》小林猷治郎《土器静物》山道栄助《鶏舎》(出品目録)
3/　第11回院展試作展　(-)。中村岳陵《燕巣》(美之国3-3)
3/　水島爾保布、来浜予定。(浜松2/7)
3/　一木陜二郎、東京府立第六中学校辞任、渡欧の予定。(中央美術13-3)
4/ 1　第1回柘榴社展於東京丸善(-7)。曽宮一念《グレキシニア》(中央美術13-3)
4/ 3　浜松新聞社第5回美術展覧会於西遠産業本社(-7)。
山中古洞《**西行**》井浦耕齢《**出陣**》渡辺守孝《**青緑山水**》同《**松凌誘友**》村上委山《**万年春帯**》松本紫園《**栗鼠**》久石編統嶺《**秋恩**》川内南雪《**布袋**》土門桃陽《**琉球の山水**》山下青城《**芳仙花**》折井愚哉《**太刀に兜**》大河内未雲《**竹林山水**》岡田桜厓《**老梅**》井浦耕齢《**美人図**》花森秀鳳《**山水**》鷲　竹有《**富士探梅**》山口松涛《**老松に日の出**》岸勝《**落雁**》岩崎榛湖《**山間の春**》田中米邨《**蘇鉄**》加藤南柯《**蛸壺**》江花羽谷《**静物**》山下仙谷《**二宮金次郎**》吉原雅風《**飛瀑**》佐藤紫雲《**海棠**》手島蘆洲《**渓山楽居**》古賀西古《**風竹**》瀬川渓雪《**秋江独釣**》尾関古城《**山水**》平井呉鳳《**軍鶏**》岩崎榛湖《**山里の雪**》轟楠外《**京の夕涼**》倉科黙蓮《**花下の狗**》掛澤竹雨《**高砂**》前田直渓《**清警閑伯**》平井呉鳳《**義鳥報恩**》佐藤紫雲《**浅妻船**》筬島東江《**詩書**》山本竹橋《**米點山水**》徳山探華《**老松に明月**》高橋桃園《**河峡**》竹腰僊洞《**熊野**》峡下正僊《**長門の海峡**》前田直渓《**秋景山水**》松井楓亭《**蓬莱山水**》同《**山村の春**》岩崎榛湖《**凌霜花**》平井呉鳳《**雨後山水**》折井愚哉《**山桜**》和　華岳《**不動尊**》衛藤幽翠《**老梅**》矢野松玉《**雨後山水**》平井梅岳《**杜宇乱鳴**》山下青厓《**鴨**》星野歌堂《**恵比寿**》浦田廣香《**月下の狸**》榊原晴雲《**立ちだるま**》出口泰山《**野兎**》浦田廣香《**落武者**》今井　雲《**嵐山**》掛澤竹雨《**鐘馗**》草刈樵谷《**林中静臥**》杉村芳春《**春の滝**》加古天香《**懸崖梅**》平井呉鳳《**鐘馗**》木村光年《**達磨**》神戸凌雪《**柳に燕**》
(浜松3/26,27,28,29,30,4/2,3,5,6,7,8,16,17,28)
4/ 3　第4回白日会展於東京府美術館(-15)。
青木新作《上ノ原風景》《神谷橋》小林猷次郎《富士が見えます》瀧澤清《花の壺》《ダリア》(出品目録)
4/ 5　山本杢兵衛驢馬による東海道五十三次漫画漫文の旅にて来静。神戸新聞企画。
(民友4/7,浜松3/30,4/11,12)
4/12　第6回国画創作協会展於東京府美術館(-25)。
柏木俊一《水辺》《修善寺風景》《庭》《樹木と水》《初春》渋川駿二《柘榴》鈴木長久《風景》《清水村徳倉風景》　(出品目録)他に野島熙正《**牛臥海岸**》(美術年鑑S3)
4/13　浜松美術展覧会於沼津市(-14)。(浜松4/13,14)
4/14　栄西禅師塑像完成し、静岡稲川崇福寺に仮安置の後、狐ヶ崎に御堂建設の予定。(民友4/15)
4/16　浜松美術展覧会於清水小学校(-18)。
(浜松4/15,16)
4/16　岡本一平来浜し揮毫。(浜松4/17)
4/22　第5回春陽会展於東京府美術館(-4/15)。
栗田雄、春陽会賞受賞。(美術年鑑S3)
栗田雄、入選、来年より無鑑別。(浜松5/18)
茨木猪之吉《廃園の春》栗田雄《野川》《川添》《初秋曇日》島田四郎《和田堀之内風景》《風景》《早春》原田聚文《秋なかば》(中央美術13-6,みづ

ゑno.167,出品目録)。
4/25　シャム国伝来釈迦如来開帳於宝台院。
(東日静岡版2/2,3,新報4/3,11,14,15,17,20,21,22,23,24,25,26,29)
4/25　法要記念大展覧会於宝台院。(新報4/20,22,24,26,27)
4/　三島大社古文書の調査。足立鍬太郎等による。
(民友4/29)
5/ 3　《三橋芦穂像》除幕。(浜松T15.4/20新報5/1,東日静岡版・遠州版5/7,民友T15.7/1,S2.5/1)
5/19　村山知義来静。文芸公論社主催文芸講演会の為。(新報5/18)
5/21　麗光社洋画展覧会於静岡商品陳列所(-23)。
(民友5/21,新報5/21,東日静岡版5/21)
5/23　近藤浩一路展於銀座松屋(-29)。**《黄檗山》**他。
(美術年鑑S3,中央美術13-7,美之国3-5)
5/25　川村清雄画業回顧展於東京上野美術倶楽部(-30)。
(美術年鑑S3)
5/29　日本プロレタリア芸術連盟浜松支部創立。
(浜松5/31)
5/　鈴木吉兵衛、所蔵の仏像9点を帝室博物館に提供。
(東日静岡版6/1)
6/　沼津美術協会、水上泰牛作品頒布。
(浜松5/1,6/8)
6/ 3　勝間田武夫個展於大阪心斎橋丹平ハウス(-6)。
(中央美術13-7)
6/ 3　明治大正名作展於東京府美術館(-30)。
中村岳陵《黄昏経》川村清雄《**画室**》《福沢先生像》《花鳥図》松井昇《早春》梅原龍三郎《熱海》山本瑞雲《洞蕭》出品。(美術年鑑S3)
6/ 8　《橋本馬吉像》除幕式於清水秋葉神社。
(新報6/2,浜松6/7,8)
6/11　沼津美術協会新画展覧会於沼津銀行。
(浜松5/9,6/8,12)
6/17　池上秀畝塾伝神洞社中小品作品展覧会於浜松丸三呉服店(-26)。(浜松6/9,16,18,20,24)
6/18　青樹社展於浜松市公会堂(-)。
浜松出身の鈴木里一郎による。赤城泰舒《平野風景》《高原風景》栗原忠二《ベニスの夕陽》栗田雄《野川》有名作家を含め119点。
(浜松5/23,6/18,19)
6/25　桜井静馬「芸術写真観」連載。(浜松6/25,26,27)
/　近藤浩一路、中村岳陵、赤城泰舒、曽宮一念、藤田嗣治、栗原忠二、栗田雄らによる美術会結成の予定。(浜松6/29)
6/　欧米玩具展覧会於静岡商品陳列所。
(新報5/31,6/23)
6/30　冬向織物図案懸賞募集展覧会於浜松工業試験場(-7/4)。(民友6/12)
7/　鳥羽精一、金剛石塗の耐水実験を静岡商品陳列所にて行う。(民友7/7)
7/14　民友カメラ会懸賞撮影大会於狐ヶ崎遊園地。水谷八重子他来静。(民友7/12)
7/17　平田寺国宝公開。(民友7/19)
7/23　浜松書画会発会式於齢松寺。(民友7/22)
7/25　奥村紅稀、沼津美術協会に招きにより来沼し揮毫(-8/8)。(浜松8/10)
7/30　大福寺虫干(-31)。(浜松7/26)
8/ 3　沖六鵬《蘇孝慈墓誌銘》奈良夏季全国書道展覧会特選。(民友8/12)
8/　沼津美術協会、水田竹圃作品頒布。(浜松8/10)
8/28　春光会第3回絵画展覧会於大宮町花島呉服店(-30)。(新報8/30)
9/ 4　第14回院展於東京府美術館(-10/4)。
近藤浩一路(同人)《渓谷風韻》《**鳴門晴日**》*《**竹林清響**》《養老瀑布》《**巨椋水色**》中村岳陵(同人)《貴姫賜浴》*藤井白映《新緑風景》杉本宗一《田園の女》(美術年鑑S3*,アトリエ4-9,中央美術13-10,美之国3-8,出品目録)
9/14　高畠茂雄の写真、天皇献上の為、静岡県に納付。
(新報9/16,民友9/16,東日静岡版9/16)
9/15　桑山景舟、来沼。(浜松9/17)
10/ 1　増田榮一・秀堂、帝展第一部に出品。
(東日静岡版10/1)
10/16　第8回帝展於東京府美術館(-11/20)。
和田三造、帝展第4部(工芸美術)入選。
(民友10/11)
伊藤孝《**池畔**》入選。浜松出身。(中央美術13-12,東日静岡版10/14,)
伊藤孝《池畔》赤城泰舒《**鏡**》小林猷治郎《なぎさ》細井繁誠《**倉小路**》松原郁二《静物》澤田寅《**白日夢**》二橋美衡《衝立》和田三造《**衝立**》*(美術年鑑S3*美術新論2-11,アトリエ4-10,みづゑno273,中央美術13-11,出品目録))
10/23　杉本徹道逝去。静岡浮月楼主人。
(民友10/25,新報10/25)
10/　沖六鳳、静岡市西草深に転居。(新報10/26)
10/29　尚美会第14回美術展覧会於静岡商品陳列所(-11/3)。(目録,新報11/1,2,民友11/1)
10/30　寧楽書道会主催書道講演、揮毫、展観於教育会館。(新報10/27)
11/ 1　報徳図書館竣工。(浜松T15.7/22,11/27,S 2.6/30 9/28,10/26,11/1,3,東日静岡版10/26,民友S3.6/15)
11/ 5　川村清雄展於銀座八咫家(-15)。(美術年鑑S4)
11/ 5　朱明会絵画第1回展於静岡商品陳列所(-7)。
柏木俊一他。(新報11/5,民友11/5)
11/ 6　名家銘刀大会於静岡法伝寺。(民友11/5)
11/ 7　栗原忠二帰国。11/12歓迎会。(民友11/15)
11/ 7　浜松新聞社第6回展覧会於浜松市演武館(-10)。
久石統嶺《**揚柳観音**》横山大寿《**和気清磨**》岸勝《**柏**》村上委山《**君子**》高須芝山《**薄暮渓山**》矢野松玉《**盛夏渓流**》(浜松11/5,8,9,10)
11/11　肖像写真展覧会於静岡すみや(-13)。
(新報11/10)
11/12　戸賀崎紅苑作品展覧会於教育会館(-14)。
(新報11/8)
11/13　浜松洋画協会展覧会於浜松演武館(-14)。
(浜松11/11)
11/15　第1回大調和展於東京上野日本美術協会(-24)。
山村誠《笹塚附近》(美術年鑑S4)
11/16　松本長十郎、松末桃石・貞次、第1回大調和展入選。(民友11/19)
11/18　山塵会展於東京丸善。小栗哲郎《風景》他、井上重生《静物》他。
(中央美術14-1,みづゑno.276)
11/19　静岡県図画教育研究会第3回展於女子師範学校(-20)。(新報11/20)
11/　静岡工芸協会展覧会於静岡商品陳列所。芹澤銈介他。(民友11/21)
11/　沼津美術協会、不動立山、奥村紅穂作品頒布。
(浜松11/22)
11/23　水田竹圃来静、揮毫於葵陽館。(新報11/24)
12/　平尾花笠、坪井文雅、山本徳寿、兼高寿閣、大日本書道作振会第3回展入選。
(東日静岡版12/4)
12/10　朝日新聞社主催帝展、院展、二科展写真展覧会於静岡すみや(-12)。(新報12/11)
12/　三島大社宝物館竣工。(民友12/18)
12/ 7　浜松工業試験場夏物図案予想展覧会於遠江織物組合(-8)。(民友10/29,11/15)
12/　郷土美術品制作講習会於御殿場実業学校。
(東日静岡版12/21)

昭和3年　1928
1/14　野末桃古展覧会於浜松演武館(-16)。武者小路実篤、土屋義郎、中島正貴、美術講演会於浜松市公会堂。(東日遠州版1/15)
1/20　第8回日本創作版画協会展於東京丸菱(-24)。
青木新作《冬日小景》小泉癸巳男(会員)《夜陰の白塔(遼陽)》《埠頭玄関(大連)》《金州城門》《奉天千代田通り午後》《日本橋夜景(大連)》《**遼陽白塔**》*《ラマ塔》《**ロシヤ波止場売買人(大連)**》**《電気楽園A(大連)》《日本橋の夜景(大連)》《電気遊園秋景(大連)》《**鴨緑江の筏**》***山口源《女児》
(駿遠豆7-4*,7-6**,7-7***.出品目録)
1/22　水田硯山、沼津美術協会の招きにて来沼、揮毫。
(浜松1/13,22)
1/26　第2回彩塵会展於東京丸善(-30)。栗田雄《**沼津風景**》他出品。(美術年鑑S4*.みづゑno.277)
/　野末桃吉、郷里浜名を去って、東京市外西巣鴨堀ノ内72へ転居。(浜松2/4)
2/ 1　浜松工業試験場第3回懸賞図案展覧(-5)。
(民友S2.12/20)
2/ 1　第1回テムペラ画会展於東京日本橋三越(-5)。赤城泰舒他。(美術年鑑S.4)
2/ 6　第5回白日会展於東京府美術館(-19)。
青木新作《初秋の午後》栗原忠二(会員)《午後の牧場》小林猷次郎《雑居静物》近藤浩一路(会員)《黒姫山月》《阿蘇連瀑》《東山双塔》《田沢湖深秋》《当麻雨情》
(出品目録,美之国4-3,みづゑno.277)
2/ 9　巌谷小波俳画頒布の会於静岡品川屋旅館。
(新報2/2)
2/11　第3回一九三〇年協会展於東京日本美術協会(-26)。青木新作《浜松郊外》(出品目録)

2/19　第5回槐樹社展於東京府美術館(-3/19)。
高畠茂雄《**修善寺陽春**》入選(美術新論3-3,駿遠豆3-4*,東日静岡版2/26)
青木新作《王子風景》小林猷治郎《岩井袋にて》高畠茂雄《修善寺陽春》田辺嘉重《芍薬》《庭の花》《高原》本間八重子《静物(1)》《静物(2)》(出品目録)

2/22　第13回院展試作展(-3/9)。中村岳陵《**宝粧獅子**》(美之国4-4)

2/22　第24回太平洋画会展於東京府美術館(-3/10)。
澤田寅[政廣]《女立像》松原郁二《カレンダー》《クリームターツ》(出品目録)

2/　佐々木古桜、病気。(浜松3/6)

3/10　田辺力弘《**栄西禅師像**》開眼供養。(新報3/10)

3/10　曽宮一念慰問展於紀伊国屋(-16)。(美術年鑑S4)

3/13　第15回日本水彩画会展於東京府美術館(-30)。
石川欽一郎《郊外》《窓の側》《厦門港》赤城泰舒《アトリエにて》《**裸婦**》
(中央美術14-5,みづゑno.276*)

3/15　第15回光風会展於東京府美術館(-30)。
青木新作《麗日》赤城泰舒(会友)《バラ(A)》《裸婦》《桃郷》《三里塚秋景》石川欽一郎(会友)《並木道》《水溜り》小林猷治郎《峠》清水柳太《内苑残雪》《早春》(出品目録)

3/21　東陵会東西大家展於東京日本橋三越(-24)。近藤浩一路出品。

3/27　大矢峻嶺、沼津美術協会の招きにより来沼し揮毫。(浜松3/14,26)

4/ 6　第9回中央美術展於東京府美術館(-20)。
伊藤孝《**雪後**》《耶馬風景》。(中央美術14-5,出品目録)

4/20　高畠茂雄第2回個展於静岡すみや(-22)。(新報4/20,民友4/20)

4/25　大須賀菊雄洋画個展於静岡商品陳列所(-29)。(新報4/26)

4/27　第7回国画創作協会展於東京府美術館(-5/15)。
柏木俊一《**或る庭の一部**》**《池畔》《花見図》渋川駿二《落合風景》《山茶花とリンゴ》鈴木長久《風景》《晩秋の山》山村誠《上原風景》梅原龍三郎《**静浦**》*(美術年鑑S4*,美術新論3-6**,みづゑno.280**,出品目録)

4/28　第6回春陽会展於東京府美術館(-5/14)。
茨木猪之吉《芽出し》小栗哲郎《薄暮風景》栗田雄(無鑑査)《**旧上水**》《池袋風景》島田四郎《風景》原田聚文《風の吹く日》
(美術新論3-6,出品目録)

4/29　沖六鳳、北京に赴く。(新報4/13)

4/　栗原忠二《川西訓導像》完成。(民友1/22,5/2)

5/13　下岡蓮杖記念碑建碑除幕式。(民友S2.10/21,S3.5/15、新報S2.10/21)

5/13　第3回燕巣会展於東京丸善(-22)。梅原龍三郎《**静浦風景**》出品。(美術年鑑S4)
近藤浩一路個展於東京三越(-6)。

6/ 2　《**駒ケ岳夕月**》他(中央美術14-7,アトリエ5-7,美術年鑑S4,読売 /)

6/ 3　遠州銀行竣工。(新報6/3,民友6/3)

6/　高林兵衛、蒐集の時計を博物館に寄贈。(民友6/14)

6/23　栗原忠二個展於東京朝日会館(-29)。《**ローマの公園**》*《**憩い**》**他。(美術年鑑S4*,アトリエ5-8**,中央美術14-8)

6/25　澤田政廣《**川西訓導銅像**》除幕式。(東日静岡版5/2,6/20,26,新報5/1,4,6/20,26,民友S.2.5/5,6,7,8,9,11,12,13,14,15,16,17,18,19,20,21,22,23,24,25,25,11/19,S3.1/22,4/6,5/2*,6/26)

/　小林猷治郎、御茶ノ水アパートメントへ転居。(中央美術14-7)

7/ 3　県下中等学校生徒商業図案展覧会於静岡商品陳列所(-7)。於島田商業学校(7/10-11)。於藤枝商工会(/ -)。(新報7/3,4,6,11,14)

7/13　田中新古堂主催新古書画売立会於沼津魚保(-17)。(浜松7/10,12)

7/14　静岡少年工芸同好会展於すみや(-16)。(新報7/9)

7/　久能山東照宮の甲冑の国宝指定申請。(民友7/19,20)

7/　浜松市、市内9小学校へ、神戸入江学校長寄贈の楠公壁画を配分。(浜松7/17)

7/22　吉田三郎《**次郎長銅像**》除幕式。(新報T15.5/16,S2.6/3,S3.7/6,22,民友S2.2/19,20,22,6/4,8/16,18,10/30,S3.5/7,9,7/22*,23,　東日静岡版5/9,7/19,22,浜松S2.8/16,S3.7/24)

8/10　漆器用人物画講習会於静岡商品陳列所(-23)。(民友8/14,東日遠州版8/17)

8/23　小室翠雲、久保田翠岳ら、富士登山。(民友8/26)

/　小泉癸巳男画集第2輯頒布。(みづゑno.283)

9/ 2　第15回院展於東京府美術館(-10/4)。
近藤浩一路(同人)《**湖東六月**》《犬山夜漁》《城趾白雨》《春光渓韻》《九体寺路》《雨霽黄昏》《**釣鐘温泉**》《十和田湖》《覚圓山雨》《**奥州街道**》*中村岳陵(同人)《**流泉四趣**》*杉本宗一《花と女》出品。(美術年鑑S4*,中央美術14-10,美之国4-9,10、出品目録)

9/ 3　第15回二科展於東京府美術館(-10/4)。
佐野儀一入選。(駿遠豆3-11)
赤城泰舒《ギターを弾く少年》《**赤い上衣**》佐野儀一《女の顔》(みづゑno.284,出品目録)

9/ 4　図画研究会於沼津第三小学校。講師大井修。(民友9/4)

9/11　レターペーパ表紙絵原画展覧会於田中屋。(民友9/7,8,9,13)

9/17　若山牧水逝去。(新報9/18,民友9/18)

9/19　尚美会第15回美術展覧会於静岡商品陳列所(-23)。松井昇《**天龍帰帆**》等。(目録,新報9/20,22*,民友9/21)

9/21　レターペーパ表紙絵原画展覧会於浜松丸三呉服店(21-28)。(民友9/21,22,25,29)

/　早瀬利三郎、掛川で彫刻に鑿を揮う。(新報9/30,民友9/30)

/　沼津美術協会、山口多門作品頒布。(浜松9/20)

10/1　県教育会主催御大典記念県下小学校教員展覧会於静岡師範学校、同附属小学校、教育会館(-)。(民友10/3,4,5,6,8,東日静岡版9/30,新報10/2,3,4,6,7)

10/16　第9回帝展於東京府美術館(-11/20)。
澤田政廣《**七姫**》特選無鑑査。(美術年鑑S4,中央美術14-11)
長澤幸夫入選。(民友10/12)
豊山廉、松原郁二、入選。(民友10/14,東日遠州版10/14,静岡版10/16)
本間八重子、入選。(新報10/21)
武藤秀雄、入選。(新報10/15)
豊島廉、入選。(駿遠豆3-11)
栗原忠二《**羅馬の夕**》小泉癸巳男《**永代と清洲橋**》*豊島廉《樹蔭》服部四郎《ほほずき》本間八重子《**静物**》松原郁二《**フランスパンのある静物**》*/**武藤秀雄《下田風景》大田重範《**裸女習作**》**澤田政廣(特選無鑑査)《七姫》長澤幸夫《**僊桃**》**(みづゑno.285*,中央美術14-11**,美術新論3-11,出品目録)

10/　外国ポスター展於田中屋(-8)。於浜松丸三呉服店(11-15)。(民友10/1,4,11)

10/　沖六鳳、日本書道作振会第4回展入選。(民友10/17)

10/　工芸協会展。(民友10/18)

10/20　麗光社第4回展於田中屋(-24)。(東日静岡版10/21,新報10/14,21,民友10/15,22)

10/20　平岩光暉逝去。書家。(民友10/21,22)

10/24　県茶業組合連合会議所、松岡映丘《**富岳茶園**》献上画を内覧。(新報10/27)

11/ 2　沼津美術協会一流大家作品展於沼津魚保(-3)。(浜松10/25,29)

11/ 6　静岡肖像写真研究会第2回展覧会於田中屋(-8)。(新報11/6)

11/12　江川担庵遺物展観於江川邸。(民友11/14)

11/15　静岡市左官職組合、御大典記念としてコンクリート製聖徳太子像を静岡市極楽寺に建立し除幕。(新報11/17)

/　桜井健次郎、田辺力松に師事、彫刻を苦学する。(新報11/27)

11/15　静岡嶽陽会展於東京丸ビル丸菱呉服店(-21)。(駿遠豆3-12,みづゑno.285)

11/20　静岡県女子師範奉祝図画展覧会(-22)。(中央美術15-1)

11/20　浜松市中村家所蔵品売立於東京美術倶楽部(-22)。(浜松11/21,24)

11/24　田能村小竹展於浜松市演武館(-25)。(浜松11/24)

11/　小川清處、来浜。(浜松11/25)

11/29　小山汪水来静、画会於浮月楼。(新報11/28,駿遠豆4-1)

12/　野末桃吉個展於田中屋(-3)。(民友12/2)

12/ 1　第3回彩塵会展於東京丸善(-5)。栗田雄《うすれ

日》(美術年鑑S5)
12/16　戸塚大珉密画会於浜松市公会堂。(新報11/28,浜松11/25)
12/　朝倉文夫《高山樗牛胸像》製作。(美術年鑑S5)
/　鈴木秋亭近況。(駿遠豆4-1)
/　小山汪水、掛川に帰郷。(駿遠豆4-1)
/　小泉癸巳男、長崎町高松188に転居。(みづゑno.287)
/　松岡映丘《**富岳茶園図**》静岡県茶業組合献上。(中央美術14-12,新報10/27)

昭和4年　1929
1/　青木生沖滞在し揮毫。(新報1/1)
1/15　第4回一九三〇年協会展於東京府美術館(-30)。青木新作《丘の風景》山道栄助《大連風景》《並木道》(出品目録)
1/20　橋本閑雪来静予定。富士川写生のついで。(新報1/9)
/　田辺力太郎《虚空蔵菩薩》彫像、皇室献上。(新報1/10,12,民友1/20)
1/31　第9回日本創作版画協会展於東京丸菱(-2/5)青木新作《上野冬景》《橋のある風景》山口源《静物(試作)》《花》《読書》出品。(出品目録)
2/ 3　第6回白日会展於東京府美術館(-19)。青木新作《川べり》栗原忠二《**牧場の午後**》《ベニスの風景》近藤浩一路(会員)《醍醐の雨》《冬林》松島淳一《冬の風景》出品。(みづゑno.289,美之国5-3,出品目録)
2/ 4　第16回光風会展於東京府美術館(-20)。青木新作《上の原風景》赤城泰舒《鎌倉風景(A)》《鎌倉風景(B)》石川欽一郎《田園》《農村》《林間の家》《駅路》《並木》清水柳太《神苑池秋》《神苑冬日》滝沢清《金谷風景》服部四郎《自画像》。松島淳一《静物》《卓上静物》(出品目録)
2/ 9　巴里を想ふ展覧会於浜松金井屋呉服店(-11)。(新報2/9)
2/23　第25回太平洋画会展於東京府美術館(-3/9)青木新作《薄暮風景》(出品目録)
2頃　武石弘三郎《**大賀辰太郎銅像**》除幕於浜松西尋常小学校。(新報1/20,浜松S3.11/22)
3/ 9　朝倉文夫《高山樗牛胸像》(美術年鑑S5,民友S3.12/18,29,S4.3/10,新報3/10)
3/　矢尾太華来静、滞在し揮毫於狐ヶ崎翠紅館。(新報3/14)
3/11　福田恵一来静、滞在於辻梅旅館(-24,5頃)。(新報3/18)
3/13　第16回日本水彩画会展於東京府美術館(-30)。石川欽一郎《**水田**》*栗原忠二、小泉癸巳男、長谷川曽一、水野以文他。小山周次《熱海風景》(中央美術15-5*,みづゑno.290)
3/16　第6回槐樹社展於東京府美術館(-4/4)。高畠茂雄《**浜名湖瀬戸風景**》(東日遠州版3/20,民友3/31,新報3/31)青木新作《麗日》本間八重子《静物(1)》《静物(2)》《風景》小林猷治郎《唄》高畠茂雄《浜名湖瀬戸風景》田辺嘉重《**裏庭の秋**》(美術年鑑S5,出品目録)
3/21　第2回等迦会展於東京銀座松坂屋(-27)。一木陽二郎出品。(美術年鑑S5)
3/23　東京美術学校卒業制作展於同校(-25)。太田重範《立女》(美術年鑑S5)
4/ 7　春光画会第4回展於富士浅間大社(-9)。(新報4/6)
4/ 9　在仏日本美術家展於パリ(-20)。一木陽二郎《婦人像》(美術年鑑S5)
4/10　第10回中央美術展於東京府美術館(-25)。伊藤孝(会友)《田園小景》《箱根風景》(出品目録)
4/
5初　《瀧口かね像》除幕式(東日静岡版4/30)横尾芳月来静し、滞在揮毫於金龍館。(新報5/3,6/9)
5/ 3　第7回春陽会展於東京府美術館(-20)。栗田雄《静物》(東日静岡版5/28)茨木猪之吉《早春高台》小栗哲郎《目黒太鼓橋》《千駄ヶ谷風景》栗田雄(無鑑査)《**春昼**》《静物》小泉癸巳男《都会風景》島田四郎《橋と松樹》原田聚文《淡水風景》《公園の暮》(中央美術15-6,みづゑno.291,出品目録)柏木俊一、島田四郎、会友推挙。芹澤銈介、国画奨学賞。(美術年鑑S5)
5/ 3　第4回国画会展於東京府美術館(-20)。柏木俊一《広沢の池》《龍安寺の池》《静浦風景》《新鐘釣温泉》《黒部初秋》渋川駿二《椿》山村誠《本興寺境内》《村秋景》《寺の裏山》《山寺晩秋》芹澤銈介《紺地蔬菜文壁掛》(出品目録)柏木俊一会友推挙。(美術年鑑S5)
5/　山村誠個展。(東日遠州版5/12)
5/14　服部四郎個展於田中屋(-16)。《**ほうずき**》《**女の子ら**》他(新報2/24,5/15*,16,民友5/15**,駿遠豆4-6)
5/20　静岡写友会創立第1回撮影会於法多山。(新報5/24)
5/24　小田松舟来静、静岡ホームの為の揮毫於魚兼。(新報5/9)
5/25　第1回第一美術協会展於東京府美術館(-6/19)。栗原忠二《ベニスの夕日》(みづゑno.293)
6/ 1　パリー日本美術展於パリ(-7/25)。伊藤孝之《箱根小景》(美術年鑑S5)
6/ 2　森守明後援会発会式於岩水寺ホテル。森守明数日滞在予定。(新報6/5)
6/ 2　著名文画展於静岡商品陳列所(-9)。(民友5/28,6/2,3,5,12)
6/ 2　図画海外学生展覧会於県教育会館(-6)。(民友5/28,6/2,3,5)
6/ 8　横尾芳月個展於田中屋(-10)。(新報6/9)
6/15　静岡女子美術会第1回洋画展覧会於田中屋(-19)。本間八重子他。松井昇、三澤佐助が指導。(民友5/18,6/11,16)
6/16　静岡漆器共進会於静岡商品陳列所・水産会館(-25)。(民友6/16)
6/23　長尾建吉古希祝生別宴於鶴見花月園。(美術年鑑S5,駿遠豆4-7)
7/　沖六鳳、日本書道作振会第5回展特選。(東日静岡版7/2,民友7/4)
7/ 6　工芸協会第4回会員作品展覧会於田中屋(-8)。(新報7/6)
7/17　手拭図案募集展覧会於静岡商品陳列所(-21)。(民友7/15)
7/　赤城泰舒、文化学院夏期学校の為、沼津牛臥に滞在。(みづゑno.295)
8/ 1　浜松子供協会図画研究会於浜松第二中学校。(民友7/12)
8/　山本春雲《伊豆から富士を望む》国立公園展於東京三越に出品。(民友6/28,新報6/28,東日遠州版8/1)
8/15　田辺力太郎《大黒》《達磨》《釋迦》男女青年団製作品展覧会於狐ヶ崎(-24)。(新報8/15)
8/16　広告美術展覧会於田中屋(-18)。(民友8/16)
8/16　手芸染色講習会於県教育会館(-19)。(民友8/16)
9/ 1　澤田政廣《**関谷連隊長銅像**》除幕式。(駿遠豆4-10,東日静岡版S2.10/23,新報S2.10/23,S4.2/24,3/23,26,5/24,8/30,9/1,民友S2.11/17,S3.2/2,S4.3/19,4/11,8/10,9/1)
9/ 2　第16回二科展於東京府美術館(-10/4)。竹田久、入選。(駿遠豆4-10)赤城泰舒《**静浦風景**》**《内海遠望》竹田久《静物》《風景》安井曽太郎《熱海附近(小)》《熱海附近(大)》鍋井克之《**伊豆の街道**》*(みづゑno.295*,296**,出品目録)
9/ 2　川村清雄喜寿記念洋画展覧会於東京三越(-7)。《ベニスの夏》他。(美術年鑑S5)
9/ 3　第16回院展於東京府美術館(-10/4)。近藤浩一路(同人)《桶狭間》《雨餘晩驛》《**間道**》*中村岳陵(同人)《**白狗**》*藤井白映《砂丘》杉本宗一《母と子》出品。(美術年鑑S5*,駿遠豆4-10,美之国5-9、アトリエ6-10,出品目録)
9/11　染色競技展覧会於静岡商品陳列所(-18)。(民友9/11,新報9/11,東日静岡版9/11)
9/14　山村誠個展於演武館。(東日遠州版9/17)
9/18　藤川勇造来静。《山田長政銅像》制作の打合せ。(新報4/25,9/18)
9/19　静岡新報社主催文芸観月会第2回於狐ヶ崎。(新報9/20,21)
9/25　尚美会第16回美術展覧会(-29)。(目録,東日静岡版9/20)
9/27　子酒井不木遺作・木村晴三俳画展覧会於田中屋(-29)。(新報9/28)
9/27　川村清雄新旧作品入札即売売立会於東京美術倶楽部(-29)。
9/28　武石弘三郎《**山葉楠寅像**》除幕式。(新報7/18,民友7/18*,9/28,東日遠州版7/18,9/29,駿遠豆4-3)
9/28　大石龍璋東洋画普及会展覧会於焼津高等裁縫女学校(-29)。(駿遠豆4-10)
10/ 5　童土社版画展於田中屋(-7)。(民友10/6)
10/16　第10回帝展於東京府美術館(-11/20)。

井戸義夫、入選。(東日静岡版10/11,15,遠州版10/11,15)
花村晃歓、入選。(東日遠州版10/15、静岡版10/17,駿遠豆4-11)
服部四郎、細井繁誠、入選。(新報10/24,民友10/31)
多田栄蔵、入選。(東日静岡ロ版S5.10/16)
一木隩二郎、入選。(駿遠豆4-11)
澤田政廣《白鳳》特選。(美之国5-12,駿遠豆4-11)
熊谷重太郎、熊谷吉郎、二橋美衡、入選。(東日静岡版10/12,遠州版10/12)
伊藤孝《奥箱根の晩秋》花村晃歓《池畔行楽》一木隩二郎《ロシアの女》栗原忠二《春の平和(テームズ)》多田栄蔵《伊東港俯瞰》服部四郎《夕焼け》細井繁誠《窓際》井戸義夫《霊気に浴する女》澤田政廣《白鳳》長澤幸夫《慈念》熊谷重太郎《ラ･メトロポール》熊谷吉郎《華相》二橋美衡《花鳥文様真鍮製手筥》(出品目録)
石川寅治《下田港》奥瀬英三《**伊豆の海**》出品。(みづゑno.297,出品目録)
10/26　内田六郎コレクション展於浜松内田病院。(浜松10/29)
11/ 1　静岡県下小学校教員図画作品第1回展覧会於教育会館(-5)。審査員牧野虎雄。(目録,民友10/24,10/28,11/1,2,3,新報11/1,2,3,東日静岡版10/31)
11/ 2　静岡民友新聞児童欄特設1周年記念小学校児童作品展覧会於田中屋(-6)。(民友10/30,31,11/2,3,6)
11/ 3　静岡商業創立30周年記念作品展覧会(-5)。(新報11/3)
11/ 4　東京図画手工研究会主催全国児童クレパス画展覧会(-6)。(民友11/6)
11/ 4　澤田政廣《濱田文作胸像》除幕式。(民友11/7)
11/ 6　藤田嗣治写真展於浜松金井屋(-11)。(民友11/7)
11/ 8　出口王仁三郎作品展於浜松市演武館(-10)。(浜松11/8)
11/ 9　東海道五十三次展覧会･全国児童成績展覧会於金谷小学校(-11)。(民友11/7)
11/10　《寺尾昌太郎像》除幕式。(東日静岡版10/27,11/10)
11/11　村上鬼城･小野蕪子俳画展於田中屋(-12)。(民友11/8,新報11/11)
11/16　出口王仁三郎作品展於煙草元捌所(-18)。(民友11/16)
11/17　県下小学校教員図画作品展覧会於浜松笠井屋(-19)。(民友11/17)
11/19　国際学童作品展覧会於田中屋(-21)。(東日静岡版11/17)
11/25　伊藤孝之個展於浜松市演武館。(浜松11/25)
11/29　原田聚文個展於浜松金井呉服店(-30)。《冬の日》《公園の暮》《春の日》台湾スケッチ等68点。(浜松11/26,30)
11/　橋本閑雪、久能山に遊ぶ。
12/18　三熊野神社で高森観好の作、発見される。(民友12/21)
12/18　第2回美育家協会展於東京府美術館(-27)。田辺嘉重《秋》(美術年鑑S6)
12/　沼津美術協会、益田玉城作品頒布。(浜松12/19)
12/　御大典記念に中村秀吉森山焼の献上。(民友S8.7/25)
12/　中村岳陵の参加する日光東照宮社務所杉戸《杜鵑》《白鷺》《猫》《燕語》

昭和5年　1930
/　和田三造、見付のアトリエを閉鎖。
1/ 5　田辺力太郎《大黒天》静岡新報主催実業百傑副賞。(新報S4.10/28,S5.1/7)
1/12　第7回白日会展於東京府美術館(-26)。青木新作《初夏漁村》漆畑廣作《秋晴れの街道》(出品目録)
1/17　武石弘三郎《**山本勝治像**》除幕式於浜松市鴨江寺。(浜松S3.10/8,11/2,9,S5.1/8,18民友S3.9/11,S4.3/3,9/4*,S5.1/17,18,東日遠州版S4.8/1,9/5,S5.1/17,東日静岡イ版1/18)
1/20　橋本関雪、弁天島に来遊し1週間滞在揮毫の予定。(新報1/15)
2/ 1　岸田劉生遺作展於浜松園田病院(-2)。新しき村浜松支部主催。《自画像》《武者小路実篤像》《麗子微笑の図》《六月風景》等二十余点。(浜松1/30,民友1/30)
2/ 1　第17回光風会展於東京府美術館(-15)。青木新作《ある日の漁港》赤城泰舒(会員)《河岸》《千両》《横浜風景》《牛臥風景》《橋二景(A清洲橋)》《橋二景(B聖橋)》石川欽一郎(会員)《峠路》《渓流》《田舎の町》《街道》漆畑廣作《長崎町風景》清水柳太《勝浦即興》《利坊》滝沢清《八重椿乱れ咲く頃》(出品目録)
2/ 1　二科会主催日本アンデパンダン於東京府美術館(-14)。安井曽太郎《熱海風景》(みづゑno.301)
2/ 5　沼津美術協会鑑賞会於沼津浮影楼。(浜松1/30)
2/ 8　長尾建吉古稀賀宴於浮月。(駿遠豆5-2)
2/10　第5回国画会展於東京府美術館(-24)。東克己《沼津風景(1)》《沼津風景(2)》柏木俊一(会友)《風景》《山村秋色》《**重須風景**》《池畔》渋川駿二《静浦の山》《静浦の海岸》中島正貴《初秋》芹澤銈介《葱模様壁掛》《はぐさ模様カーテン1》《同2》《果蔬模様壁掛》《横縞片側帯》《描更紗片側帯1》《同2》《木綿カーテン地(黄)》《同(鼠)》(出品目録)
梅原龍三郎《**静浦風景**》(美之国6-3,みづゑno301.美術年鑑S6*)他に武者小路実篤、金子九平次他に伊豆に取材する作品。(出品目録)
2/　小野竹喬、天竜川並びに秋葉山写生を兼ねて来県、浜松、二俣に滞在。静岡に立ち寄る計画あり。(新報2/12)
2/15　森守明、沼津美術協会の招きにより来沼。浮影楼に滞在し揮毫(-3/2)。(浜松2/6,14,3/2)
2/15　谷島屋主催泥絵展於浜松商品陳列所(-16)。(浜松2/14,15)
2/21　第17回日本水彩画会展於東京府美術館(-4/10)。石川欽一郎《山の宿場》《**街路**》**《日向の並木》赤城泰舒《**港**》*《**松江風景**》***《**清洲橋**》***(美術年鑑S6*,みづゑno.301**,302***)
2/26　第7回槐樹社展於東京府美術館(-3/14)。青木新作《王子風景》勝間田武雄《カーニュの橋》《カーニュの全景》田辺嘉重(無鑑査)《　　》小林猷治郎《**宵闇**》《蜜柑梱》(駿遠豆11-6,出品目録)
2/　栗田雄、外遊。(美術年鑑S6,みづゑno325)
3/ 1　三島宝物館開館。(新報1/21,民友T15.1/19)
3/ 1　第26回太平洋画会展於東京府美術館(-15)。澤田政廣《H氏像》(出品目録)
3/ 8　内藤勘司、第4回光潤社洋画展於東京上野松坂屋(-12)出品。(駿遠豆5-4)
3/　大応国師誕生産湯の井戸の整備なる。(新報3/12)
3/17　第2回聖徳太子奉賛美術展於東京府美術館(-4/14)。山村誠、鈴木長久、入選。(東日静岡イ版3/18)赤城泰舒、山村誠、入選。(駿遠豆5-4)井上恒也《春近き蓮田》都築真琴《湖畔》青木新作《丘》赤城泰舒《椿》茨木猪之吉《高台の新緑》柏木俊一《初秋の富士》渋川駿二《海岸風景》島田四郎《風景》鈴木長久《静浦風景》(曽宮一念《アネモネ》田辺嘉重《ひまわり》原田聚文《川ぞひの村》東克己《千本松原》山村誠《薬師堂》太田重範《弥生の作》澤田寅[政廣]《春陽》杉本宗一《男の首》山本瑞雲《渡海文殊菩薩》(出品目録)
3/21　浜松アサヒ写真クラブ主催第1回光画展覧会於遠電ビル階楽亭(-23)。(新報3/21)
4/　堅山南風来静予定。(新報4/3)
4/22　第8回春陽会展於東京府美術館(-5/14)。茨木猪之吉《初夏風景》小栗哲郎《新緑水辺》《晩秋山村》島田四郎《池を望む景》《公園小景》原田聚文《早春》《道》(出品目録)
4/25　石川欽一郎新日本画展於東京日本橋三越(-29)。(みづゑno.304)
4/26　羅馬日本美術展於イタリア(-5/31)に中村岳陵《白狗》《淡雪》出品。
5/ 9　女子洋画第2回展於田中屋(-12)。(目録,民友5/10)
5/　古瀬甲子郎、勝又恒雄、農民芸術第2回展於大阪三越に出品。(東日静岡ロ版4/13)
5/18　第2回第一美術協会展於東京府美術館(-6/7)。栗原忠二《**レセプション**》他(美術年鑑S6*美之国6-7,美術新論5-7,みづゑno.304)
5/24　大須賀菊雄個展於田中屋(-26)。(駿遠豆5-6)
5/ 1　日仏画廊第1回洋画展於東京赤坂同画廊(-10)。石川寅治《伊豆の海》(美術年鑑S6)
5/28　行幸天覧品陳列於静岡御用邸。(民友5/16)
6/ 3　大河内夜江、沼津美術協会の招きにより来沼、浮影楼に滞在し揮毫(-7/4)。(浜松5/30,6/5,18)
/　静岡市公会堂建設計画。(民友6/6)
6/ 8　第2回国際美術協会展於東京府美術館(-7/3)。一宮聡子《五月雨》入選。(新報6/20)

静岡近代美術年表稿　昭和戦前編　1

近藤浩一路《**水明**》（美之国6-7）

6/14　静岡天満宮天覧の宝物公開（-16）。（新報6/14）

6/15　静岡中学生徒、片山廃寺跡発見。（民友6/18）

6/21　静岡高等学校絵画部白薇会展於田中屋（-22）。（民友6/20）

6/23　森山三郎近作漫画展於田中屋（-27）（民友6/20）

6/　一木隩二郎帰朝。（美術年鑑S6）

6/28　《織田利三郎銅像》除幕式於浜松半僧坊。（駿遠豆5-7,浜松6/26）

7/18　東京漫画展於田中屋（-21）。岩松淳来静。（民友7/19,21）

7/　文部大臣より、県下六社寺の国宝を博物館、遊就館に出陳する通達。（民友7/23）

7/11　第3回等迦会於東京（-16）。一木隩二郎《**マダムの像**》*《肖像》（美術年鑑S6*,美之国6-8）

8/13　和田三造《白鷺城》、首相官邸大広間の《南風》と架け替え。（浜松8/15）

8/15　全国書道展覧会･書道講習会於城内尋常講堂（-19）。沖六鳳斡旋　尾上柴舟、丹羽海鶴講演会開催予定。（新報5/5,東日静岡イ版5/6）

8/23　関野貞、宝台院、霊山寺視察。（民友8/26,新報8/26）

9/ 3　第17回院展展於東京府美術館（-10/4）。中村岳陵（同人）《**牡鹿啼く**》**《**鉢かつぎ草子**》*杉本宗一《裸婦》出品。（美術年鑑S6*,美之国6-9,10**,アトリエ7-10,美術新論5-10,出品目録）

9/ 4　第17回二科展於東京府美術館（-10/4）。赤城泰舒《少女と花》《赤衣》曾宮一念（会友）《**あねもね**》《荒園》《野薊》《サボテン》《花壺》（美術新論5-10,出品目録）

9/ 7　新古書画即売会於岳南デパート（-10）。（浜松9/10）

9/23　沼津美術協会展於沼津魚保（-24）。（浜松9/22,26,27）

9/27　ほけ短歌会主催第1回詩展覧会･北陽会青年団文芸部書画展於静岡市麻機北陽会会館（-29）。（民友9/27）

9/27　川村清雄画伯新旧作品入札即売売立会於東京美術倶楽部（-29）。

/　中島正貴、静岡民友新聞連載小説、野村愛正「街の人魚」挿絵を担当。（民友-S6.4/18まで）

/　曽宮一念、洋画個人教授於下落合623の画室。（みづゑno.307）

10/ 1　静岡師範学校展覧会（-5）。林武、川口軌外、古賀春江、里見勝蔵、清水登之、中川紀元、鈴木亜夫、上野山清貢、鈴木千久馬、栗原忠二他の参考出品。（新報10/3,民友10/5）

10/ 2　洋画展於沼津丹澤楽器店、鈴木長久他。（浜松10/6）

10/ 5　暁花堂所蔵書画展覧会於沼津東方寺。（浜松9/18,10/7）

10/ 6　河村目呂二夫妻、来静。（民友10/8,新報10/8）

10/　山村誠《秋》他8点、丹青会第1回展於銀座伊東屋に出品。（東日静岡イ版10/18）

10/11　みづゑ二十五周年記念絵画展於日本橋三越（-15）。赤城泰舒《**岩**》中澤弘光《**修善寺**》（みづゑno.310）

10/16　第11回帝展於東京府美術館（-11/20）。山下青城、幸田採果、秋野不矩、入選。（東日静岡イ版10/16,17,ロ版10/16,新報10/15,17）松島淳一、青木新作、鈴木利三入選。（東日静岡イ版10/14,民友10/12,新報10/13,14）細井繁誠、松原郁二、入選。（民友10/12,新報10/12）多田栄蔵入選。（東日静岡ロ版10/16）山口益《**少女**》入選。（東日静岡イ版10/10,11*,民友10/11,新報10/11）二橋美衡、入選。（東日静岡イ版10/19）稲木春千里、入選。（東日静岡イ版10/14）一木隩二郎、水野欣三郎、山口益入選。（駿遠豆5-11）秋野不矩《野を帰る》井上恒也《池畔小景》幸田採果《くさむら》山下青城《春暉暁艶》青木新作《初夏水辺》一木隩二郎《露台にて》勝間田武夫《腰掛けたる女》栗原忠二《**野路**》鈴木利三《浴後裸婦》多田栄蔵《伊豆の山》細井繁誠《部屋》松島淳一《横臥裸婦》松原郁二《静物》井戸義夫《河流》澤田政廣《**伊呂古の宮**》*長澤幸夫《壺》水野欣三郎《裸女立像》山口益《少女》稲木春千里《鉄刀木》二橋美衡《赤銅獅子丸筥》（美術年鑑S6*,美之国6-11,美術新論5-11,出品目録）

10/11　童土社第2回展覧会於田中屋（-13）。（民友10/11）

10/26　静岡県下小学校教員展覧会於教育会館（-30）。審査員:中澤弘光、平田松堂、島田佳渓。（目録、民友10/26,新報4/12,10/26,28,29,30,31,浜松7/1）

10/29　沖六鳳門下書道展於田中屋（-71）（新報10/29）

11/ 1　榛の木会画会於榛原中学校（-3）。（民友10/26）

11/ 3　要樹平、沼津美術協会の招きにより来沼し揮毫（-12/10）。（浜松10/29,11/6,12/11）

11/ 5　荻野仲三郎、龍禅寺他視察。国宝候補の調査。（新報11/8）

11/　郷土博物館建設の建議。（民友11/11）

11/12　石井小浪写真展於浜松。（浜松11/5）

11/15　駿河彫静香会展覧会於静岡商品陳列所（-16）。（民友11/12）

11/18　清水市小学校教員及び児童製作図画書方手工手芸品第1回展覧会於清水小学校（-19）。（民友10/15）

11/　楳崎朱雀画会。近々来静し辻梅旅館に滞在揮毫の予定。（新報11/17）

11/22　俵蓑舟絵画展於田中屋（-24）。（新報11/21）

11/23　高山文景を囲む清遊会於臨済寺。三木雲山、出席。（民友11/21）

11/23　東遠第8回新古書画持寄展覧会於榛原郡川崎町報徳会館。（新報11/21）

11/29　中等学校教員絵画展覧会於大宮高等女学校（-30）。（新報11/23）

12/　市川龍子、泰東書道院第1回展入選。（東日静岡イ版12/4）

12/　小野竹喬来静、葵陽館に滞在し揮毫（-26,7頃）。（新報2/12,12/16,17）

特別展「近代を彩った鹿児島の美術家たち」顚末

平成22年10月9日(土)～11月14日(日)

フェルケール博物館 学芸部長　西野 和豊

このたび、上記の展示事業に関して、静岡県博物館協会より地域セミナー助成金(10万円)を頂いたことでもあり、この際この事業に関連する内容について少々記録に残す意味も感じたことから、この紙面を借りてご報告することにしたい。

はじめに

当館は平成3年5月にリニューアルオープンして以来、それまでの常設展のみの展示から、小さいながらも企画展も実施可能なスペースを確保して、今日までの20年間にわたり年間8～9件の企画展を開催している。その内容は、グループ別にしてみると、テーマによる企画展を中心に、寺院所蔵展、美術館・博物館コレクション展、大学所蔵展、自治体所蔵展、個人コレクション展、作家展(個展)などがある。

・寺院関係／
「霊山寺宝物展」(1994年)
「小島龍津寺展」(1996年)
「鉄舟寺展」(2001年)
「富岡鉄斎展」(清荒神清澄寺蔵、2002年)
「朝鮮通信使と清見寺」(清見寺蔵、2007年)
「建穂寺の仏像展」(2010年)

・美術館関係／
「世界の写真」(京都国立近代美術館蔵、2006年)
「いのちの絵展」(無言館蔵、2006年)
「W・ユージン・スミスの写真」(京都国立近代美術館蔵、2008年)
「浜田知明展」(熊本県立美術館蔵、2009年)
「池田満寿夫の版画」(京都国立近代美術館蔵、2009年)
「近代を彩った鹿児島の美術家たち」(鹿児島市立美術館蔵、2010年)

・博物館関係／
「隆盛期における日本客船の航跡展」(横浜マリタイムミュージアム蔵、1992年)
「タイ彩文土器と山岳民族文化展」(ヨコタ博物館蔵、1996年)
「切手に描かれた帆船展」(切手の博物館、1997年)
「『日本客船の旅』ポスター展」(横浜マリタイムミュージアム蔵、2003年)

・大学関係／
「世界環境マンガ」(京都精華大学蔵、2005年)
「京都の美術」(京都市立芸術大学蔵、2007年)
「欧米のポスター100(1945～1990)展」(常葉学園大学蔵、2007年)

・自治体関係／
「静岡の美展」(静岡県蔵、1991年)
「楽しい子供の美術展」(文部省蔵、1995～2000年)
「大竹省二写真展」(静岡県蔵、2009年)

・個人・法人関係／
「富士尽百景展」(1992年)
「東南アジアの民族造形展」(1992年)
「南アジアの民族造形展」(1993年)
「西アジアの民族造形展」(1994年)
「灯火具のうつりかわり」(1994年)
「東北アジアの民族造形展」(1995年)
「一碧楼水口屋展」(1995年)
「松永一生コレクション寄贈記念展」(2000年)
「こけし人形展」(2003年)
「世界の缶詰ラベル展」(2004年)
「戦災等による焼失文化財(美術工芸篇)写真展」(2004年)
「ぽち袋展」(2005年)
「風呂敷による染と織」(2005年)
「めんこ学」(2007年)
「カメラのこだわり展」(2007年)
「駿遠の宿場と相撲」(2008年)
「箸袋」(2009年)

・作家(個展)関係／
「上田毅八郎作品展」(1991年)
「井出孝 港の風景素描展」(1991年)
「上田毅八郎帆船画展」(1992年)
「杉山良雄街道絵油彩展」(1993年)
「井出孝回顧展」(1998年)
「世界の帆船」(中村庸夫写真展、1993年)
「望月昭伸写真展」(1994年)
「THE　SHIMIZUと田辺光彰の世界展」(1994年)
「たむらしげるの世界」(2004年)
「世界のボトルシップ展」(竹内栄照作、1999年・2006年)
「久里洋二の無人島シリーズ」(2000年)
「広井敏通の『紙の惑星』－空想の動物たち」(2001年)
「魏長華の墨彩画(滞日10年記念)」(2001年)
「西巻茅子絵本原画展」(2003年)
「水中カメラマン望月昭伸のメッセージ『小笠原の海』」(2004年)
「市川正三回顧展」(2006年)
「窪野勝彦陶芸展」(2008年)
「金子たかみのファンタスティックワールド」(2008年)
「廣前心齋茶陶展」(2008年)
「富士山の空撮写真」(2008年)
「田宮奈呂の世界」(奇想天外・笑う人形たち)(2009年)
「一言良一郎漆芸展」(2010年)
「蜘蛛の糸」－北川純アートプロジェクト－(2010年)
「池田正司回顧展」(2010年)
「前田守一の版画展」(2011年)

・テーマ展／(所蔵者複数)
「わたしたちの港－いま・むかし」(1991年)
「清水の漁業史展」(1995年)
「清水のヨット－今昔」(1996年)
「いほはらの文化展」(1997年)
「全国の缶詰ラベル展」(1997年)
「わが家の宝物展」(1997～2006年)
「和田英作展」(1997年)
「激動!幕末の清水湊(周辺)展」(1998年)
「フェルケールフォトコンテスト展」(1998～2004年)
「京都岸派と庵原三山展」(1999年)
「よみがえる丸木舟の世界」(1999年)
「港の100年展」(1999年)
「輸出用茶箱と茶業展」(2000年)
「富士の巨匠　岡田紅陽写真展」(2000年)
「西園寺公望と興津」(2001年)
「静岡の煎茶具展」(2001年)
「みなとの役所のはたらき(○○船が来た、その時役所は?!)」(2002年)
「これってなぁに?!」(2003年・2006年)
「折戸湾のうつりかわり展」(2003年)
「曽宮一念展」(2003年)
「世界の鉄道模型展」(2004年)
「近藤浩一路展－生誕120周年記念－」(2004年)
「山下充展」(2005年)
「もうひとつの塩の道(富士川舟運)」(2005年)
「明治の洋館を飾った金唐革紙」(2005年)
「清水の鉄道の歴史と日本の鉄道模型」(2006年)
「神奈川丸の周辺(清水港お茶輸出100周年記念事業)」(20006年)
「三保物語」(2007年)
「昔のみなと祭り写真展」(2007年)
「静岡ゆかりの刀剣展」(2007年)
「清水港の鉄道と荷役展」(2008・2009年)
「お気に入りセルフ・ポートレート展」(2008・2009年)
「日本のわざと美展」(2008年)
「静岡の陸・海・空輸送」(2009年)
「武士の表道具」－甲冑・刀剣の美－(2010年)
「海に消えた徴用船たち」(2010年)
「日本の国境線・知られざる美しき島々」写真展(2011年)

・その他／
多数

特別展「近代を彩った鹿児島の美術家たち」顚末

夥しい展覧会名を前にして、多くの方々が辟易されたことと思うが、当事者にはかなり自己満足の作業とはいえ、既に忘却の彼方の展覧会もあることに気づかされている。

改めてこれらの展覧会名を眺めていると、鮮明に覚えている企画展はどちらかというとテーマ展の方で、コレクション展（所蔵品展）系はぼんやりした部分が比較的多く、その点印象は薄い。それはテーマ展では必死になってストーリーを考え、テーマに沿った展示品を集めることが腕の見せ所なのに対して、コレクション展はいささかコレクションの力を借りている部分がある。つまり、コレクション展は何と言っても収集家の目線が魅力で、学術的、或いは歴史的、また審美眼的、趣味的、などなど多方面の視点、いってみれば価値観による選別が既に行われた結果の物であるという前提があり、その中から展示に適した作品・資料を選べば良いという気安さも手伝っている。一方、寺院のそれは、誰かが総合的に一堂に寄せて選別したわけでもなく、自然に淘汰されたものが残されている訳だが、それも時代の中で寺院そのものが選別していったといえなくもないのだ。従って、テーマ展の方がハードであることはご支持いただけるだろうか。しかし、コレクション展がいつも簡単な作業というわけではない。

鹿児島展について

実は一昨年の秋、旧知の鹿児島市立美術館（以後鹿児島市美と省略）の学芸係長（鹿児島市美には課長職がない）に連絡し、当館の企画展に協力して頂けるかの打診を行ったところ、おおむね実現可能の感触を得た。すぐさま鹿児島に赴き趣旨を説明することにしたのには、当館にとってこの企画展は2点の重要な意味があった。ひとつには、当館が開館して20周年目の節目となる記念展にしたい（財団法人は発足して33年経過）。ふたつ目には、富士山静岡空港が鹿児島空港に就航した記念事業として祝意を表したいと思ったからである。幸い鹿児島市美の館長様を含めて各スタッフが大変好意的で、詳細は追って詰めるとして、基本的には企画を進めて良いとの返事をもらって帰途についたのである。その後1ヶ月ほどが経過した頃、鹿児島からの要請もあり企画書（開催要項）を作ることとなった。まず今回、鹿児島市美から借用する作品の選定の前に、この展覧会のコンセプトを定める必要があったのだ。

それには、フェルケール博物館の20周年記念事業としてふさわしい内容であることが期待されるであろうし、静岡・鹿児島空港就航記念としての意味合いをどう関連づけるかという問題もあった。これらは言葉にすると、いかにも理解され易そうだが、中身については抽象的であいまいで具体性が全くないことは一目瞭然であった。

しかし、そんな不安は短時間のうちに解消されていった。つまり、鹿児島にはおびただしい歴史があり、資料類も多数残されていて、特に島津家関係は鹿児島市美と他館の資料を借用できれば立派な展覧会が可能だし、また木村探元を中心とした鹿児島の日本画の系譜展のような展覧会も可能だった。薩摩切子をはじめとする工芸類も魅力的だし、何といっても、黒田清輝をリーダーとする洋画家たちの展覧会が圧巻であることは私の認識の中にも常にあった。

ここ数年間、NHKの大河ドラマにもたびたび登場する幕末の薩摩の群像を利用するとすれば、例えば「文明開化と鹿児島展」や「鹿児島の絵師たち展」なども机上にのせてみたが、鹿児島市美側のアドバイスもあり「近代を彩った鹿児島の美術家たち」に納まったのである。

そして作品群は、①黒田清輝、藤島武二、和田英作の他に有島生馬、東郷青児、そして無名でも鹿児島にとって必要不可欠な洋画家たち、②黒田らが育った鹿児島の風土、特に日本画、工芸の作家たち、③東京渋谷の初代ハチ公の作者安藤照らを中心とした彫刻家たち、④そして橋口五葉らの版画家たち　などを各ジャンルに配置したいと思った。

そしてその後、当館より希望の出品リストを提示することが出来たが、とりあえず一応の目安としてのものであった。それは当方が借用を希望しても、常設展示や他館への貸出し、それに修復中の作品もあると考え、作品そのものの差し替えは一向にこだわらないというものであった。また、下絵、素描類も出品依頼することにした。その結果当初当館が提出した出品リストと、その後鹿児島市美が修正してきた作品とは少し一致しないリストになったのは上記のような理由から変更されたものであった。

最終リストが漸く出来上がったが、黒田の主宰した白馬会や、黒田が初代校長を務めた東京美術学校の主要画家たちの他に、無名だが地元で活躍した白馬会、東京美術学校卒業生たちも幾人か含まれていて、鹿児島の美術界の奥の深さが見られる作品群に期待は膨らんだ。

ところが、展覧会の入館者は余り振るわず、予想以下の結果で終った。というのは、館の周囲は静岡市美術館がオープニング展を開催中で、また登呂博物館や日本平動物園もリニューアルオープンするという環境であった。彼らにはおめでたいことなのだが、周辺館園は少なからず影響を受けたというか、いや努力が足りなかったということになるのだろう。

感謝

しかし、鹿児島市美術館は同時期に同美術館で開催される田中一村展で全職員超多忙の中、学芸係長の指導のもと、好意溢れる協力体制で我々に援助を惜しまず、この展覧会を支えて頂いた。さらに、担当学芸員から、①有名作家だけでなく無名作家の作品も清水で展示紹介してくれることは鹿児島市美としても有難い。　②日頃チェックの行き届かない作品がこの機会にくまなく点検できるのは有難いし、新しい発見もあった。　③お互いの館の交流が深まった。　④貸出し先の清水の歴史や風土を少し知ることが出来た、などなど思いがけない、我々が気づかなかった点も指摘して頂いた。展覧会が無事終了し返却が完了した時に、「よく耐えて作品群が無事帰ってきて本当に良かった」との本音を聴いて、所蔵館としての重い責任を一身に負っていた担当学芸員に改めて感謝したのだった。

① チラシ（表）

② チラシ（裏）

③ 第一会場

④ 第一会場

⑤ 第二会場

⑥ 第三会場

⑦ 第三会場

⑧ 第三会場

〈出品リスト〉

	作家名	生没年	作品名	制作年
〈油彩画〉				
1	床次正精	(1842～1897)	「富士」	(不詳)
2	黒田清輝	(1866～1924)	「風景」	(1892年)
3			「桜島爆発図(噴煙)」	(1914年)
4	藤島武二	(1867～1943)	「鳥羽の日の出」	(1931年)
5			「少女」	(1940年)
6	和田英作	(1874～1959)	「清水海岸」	(1908年)
7			「富士」	(1919年)
8	時任鵬熊	(1874～1932)	「裸体(男習作)」	(1900年)
9			「臥仔牛」	(1907年)
10	橋口五葉	(1881～1921)	「港」	(不詳)
11	山下兼秀	(1882～1939)	「桜島爆発図」	(1914年)
12	有島生馬	(1882～1974)	「欄干」	(1907年)
13			「静物」	(1916年)
14	有馬三斗枝	(1893～1978)	「若き日」	(1953年)
15	東郷青児	(1897～1978)	「巴里の女」	(1921年)
16			「椅子」	(1933年)
17	和田香苗	(1897～1977)	「支那服」	(1955年)
18	山口長男	(1902～1983)	「卓上B」	(1933年)
19			「作品B」	(1939年)
20	海老原喜之助	(1904～1970)	「魚」	(1927年)
21			「準備」	(1938年)
22	吉井淳二	(1904～2004)	「裸婦」	(1927年)
23			「せり市」	(1965年)
24	中間冊夫	(1908～1985)	「黒い人間」	(1957年)
25	堀之内一誠	(1908～1980)	「卓上のヴァイオリン」	(1960年)
〈日本画〉				
26	平山東岳	(1834～1899)	「風竹図」	(不詳)
27	服部英龍	(1842～1905)	「西郷隆盛像」	(不詳)
28	江口暁帆	(1839～1921)	「桜島・天保山・磯山図」	(1900年)
29	小松甲川	(1857～1938)	「ぼたん図」	(1892年)
30	河本其山	(1875～1957)	「瀧図」	(不詳)
31	山下巌	(1898～1977)	「薩州吉野寺山図巻」	(1959年)
32	満田天民	(1905～1985)	「菜の花」	(1954年)
〈工　芸〉				
33	12代沈寿官	(1824～1906)	「錦手人形置物」	(19C後期)
34	東郷寿勝	(1855～1936)	「金襴手添寝人形(苗代川)」	(19C後期)
35	有山長太郎(初代)	(1871～1940)	「鉄砂釉白蛇蝎花生(長太郎)」	(20C前期)
36	宮之原謙	(1898～1977)	「彩土盛葉陰大皿」	(1957年)
37	黒田清輝	(1866～1924)	「SK組合せサイン入模様茶碗」	(20C前期)
38	帖佐美行	(1866～2002)	「騒心双鶴」	(1964年)
〈彫　刻〉				
39	新納忠之介	(1868～1954)	「西王母の像」	(1950年)
40			「阿弥陀如来像」	(不詳)
41			「牛の像」	(不詳)
42	安藤照	(1892～1945)	「裸婦仰臥像」	(1927年)
43			「ポイント第二」	(1931年)
44			「忠犬ハチ公」	(不詳)
〈版　画〉				
45	橋口五葉	(1881～1921)	「神戸の宵月」	(1920年)
46			「鴨」	(1920年)
47			「夏装の女」	(1920年)
48			「爪を切る女」	(1920年)
49			「浴後の二人」	(1920年)
50			「顔を洗う女」	(1920年)
51	海老原喜之助	(1904～1970)	「蝶」	(不詳)
52			「篭をあむ」	(不詳)
53			「春眠」	(不詳)
54			「大根を持つ男」	(不詳)
〈素　描〉				
55	橋口五葉	(1881～1921)	「かがむ女」	(不詳)
56			「片手をつく女」	(不詳)
57			「夕涼みの女」	
58	古城江観	(1891～1988)	「南国瞥見」	(1938年頃)
59			「海南島三亜街零族一家」	(1938年頃)
60	伊達孝太郎	(1878～1964)	「メリー・ウーリッチ嬢肖像」	(1917年)
61	海老原喜之助	(1904～1970)	「男・風景」	(不詳)
62			「女・漁師・竹」	(不詳)
63			「顔の構成」	(不詳)
64	黒田清輝	(1866～1924)	「婦人像」	(不詳)

「報告」
博物館園の交流――富士山ネットワーク推進委員会の試み

富士市立博物館 学芸員　井上 卓哉

1.はじめに

富士山ネットワーク推進委員会は、富士山周辺（静岡県側）に設置された博物館・美術館・動物園などの施設が市町村、運営母体、対象分野の壁を取り払い、博物館園施設として利用者に供するサービスを向上させることと、効果的なPRを実現させるため、平成5年に立ち上げられた博物館ネットワークである。本報告では、加盟各園の概要とともに、17年間にわたる活動内容を中心に、広域的な博物館の交流事例について報告したい。

2.加盟各館園の概要

富士山ネットワーク推進委員会は、平成5年に「奇石博物館」（富士宮市）、「富士美術館」（富士宮市・平成20年度に東京富士美術館と統合し脱退）、「富士市立博物館」（富士市）、「裾野市立富士山資料館」（裾野市）の4館によって立ち上げられた。その後、平成6年には「富士山御胎内清宏園」（御殿場市）、平成8年には「富士サファリパーク」（裾野市）、平成19年には「富士山こどもの国」（富士市）が順次加盟し、現在6館園で運営されている。

現在加盟している6館園はそれぞれ異なる運営母体や対象分野のもとで活動を行っている（表1）。そこでまず、以下では各館園の概要について取り上げてみたい。なお、この概要については、各館園の富士山ネットワーク推進委員会の担当者が執筆したものを筆者が編集を行なった。

「奇石博物館」

奇石博物館は、富士山南麓標高520mの緑の中に位置し、近くには景勝地の白糸の滝や朝霧高原があり、晴れた日には遠く駿河湾も望める場所に立地している。

奇石博物館は、昭和46年(1971年)に朝霧高原で開催されたボーイスカウトの世界大会「ジャンボリー」を機に、鉱物界の泰斗“益富寿之助”博士の地学標本をもとに設立された日本で最初の石だけの博物館である。

館の特徴は、江戸時代中期に石の長者“木内石亭”が「雲根志」という石の啓蒙書に著した奇石という視点から、石を科学的な見方だけでなく、外観や人文科学的な視点で分類展示している点があげられる。（桜石、饅頭石、算盤玉石、人形石、コンニャク石、テレビ石など）。この視点は、素朴で親しみやすく、馴染みにくいとされる地学の普及には好適であり、設立趣旨にも、奇石の視点にたって石の不思議さや面白さを伝えることで馴染みにくい地学に興味を持ってもらうことを掲げている。

現在、約15000点の標本が収蔵されており、その中より1800点ほどが常設されているほか、館内には、石に触っていただきながら不思議な石をご紹介する人気の解説コーナーを設けている。また、併設の宝石探し体験施設「宝石わくわく広場」では、30分間500円で約40種類の宝石を探し持ち帰ることもできる（期間限定）。

なお、2011年の4月から、館内に美しい宝石や誕生石をご紹介するコーナーを新設する予定である（写真1および2）。

施設名	所在地	開館年	運営母体
奇石博物館	富士宮市山宮3670	昭和46年（1971）	財団法人石の博物館
富士市立博物館	富士市伝法66-2	昭和56年（1981）	富士市
裾野市立富士山資料館	裾野市須山2255-39	昭和53年（1978）	裾野市
富士山御胎内清宏園	御殿場市印野1382-1	昭和34年（1959）	社団法人印野郷土振興協会
富士サファリパーク	裾野市須山2255-27	昭和55年（1980）	小泉アフリカ・ライオン・サファリ株式会社
富士山こどもの国	富士市桑崎1015	平成11年（1999）	静岡県・指定管理者:小泉アフリカ・ライオン・サファリ株式会社

表1　富士山ネットワーク推進委員会加盟館園一覧

「報告」博物館園の交流――富士山ネットワーク推進委員会の試み

写真1　奇石博物館外観

写真2　「宝石わくわく広場」での宝石探し体験

「富士市立博物館」

富士山を背後に抱き、駿河湾に面した富士市には、富士山・愛鷹山の火山活動によって発達した山地や丘陵地、富士川などの堆積作用によってつくられた平野および浮島沼といった多様な自然環境が存在している。この地方で生活してきた先人達はこの自然に適応し、利用し、厳しく闘ってきた歴史の中で、富士山を中心とする文化や、製紙業をはじめとする地域独特の産業を形成してきた。富士市立博物館は、これらの歴史・文化・産業にかかわる貴重な資料を収集し、調査・研究を行い、保存・展示・教育普及を行う目的のもと、昭和56年に開館した。

富士市立博物館では、「富士に生きる-紙のまちの歴史と文化」というテーマのもと、富士市の歴史を時代別に紹介する第一展示室、製紙業の変遷を紹介する第二展示室において常設展示を行っている。あわせて、特別展示室では、常設展示以外の特別展、企画展、共催展を随時開催している。また、博物館に接した広見公園歴史ゾーン内に市内の建造物を移築し、屋外展示をおこなっているほか、平成6年には民俗資料を中心に展示する分館・歴史民俗資料館がオープンした。

上記の展示活動に加え、付属施設である実習室、陶芸室、染色室や平成20年にオープンした旧稲垣家住宅などで、紙漉体験、陶芸体験、染色体験、農家の暮らし体験などの教育普及事業を実施している。

また、平成18年度に市内の旧家・六所家から4万点を超える貴重な歴史・民俗・美術資料が寄贈され、それらの資料の総合調査を実施するなど、調査研究活動にも力を注いでいる（写真3および4）。

写真3　富士市立博物館外観

写真4　旧稲垣家住宅での体験事業

「裾野市立富士山資料館」

富士山資料館は昭和53年5月8日に開館し、裾野市民も富士山といろいろな面でかかわりあっているとの観点から、富士山に関する基本的な情報を幅広く紹介する資料館として活動を行っている。また、富士山資料館は裾野市教育部生涯学習室に属し、職員は4名体制となっている。また、市民を含めた富士山資料館運営委員会が、館の運営や活動について審議し、館の活動に反映させている。

富士山資料館では、Ⅰ富士に棲む.Ⅱ富士の成り立ち.Ⅲ富士に生きる.Ⅳ富士を見る.Ⅴ裾野のくらし（郷土館）.と各テーマにそって富士山の自然、歴史、文学・芸術、民俗などの資料の展示を行っている。

また、常設展示のほか年間を通して下記の講座、企画展、特別展等の事業も実施している。資料館講座として、市民に富士山の自然の大切さを知らせる「春・夏の自然探索会」、

参加体験型の「古代体験講座ー勾玉作りー」など、企画展は、市民参加型の作品展として市内小学5年生を対象とした「子どもたちの富士山絵画展」などを開催している。また、「なつかしい民具展」は、市民と資料館が連携し、テーマにそって民具資料を展示する企画展となっている。特別展は、資料館主催により毎年時節にあったテーマを設け、調査・取材を重ね開催している。平成22年度は富士山の火山活動と防災体制を紹介した「活火山富士山―防災体制を追うー」を開催したほか、写真家岡田紅陽が創設した、日本観光写真連盟会員の作品による「富士百景写真展」も毎年開催している(写真5および6)。

写真5　富士山資料館外観

写真6　富士山資料館展示室内

「富士山御胎内清宏園」

御殿場市印野にある溶岩隧道は、通称「御胎内」と呼ばれ、富士山修験者が修行をした霊場であったと伝えられる。明治30年代には隧道の見物と神社参拝のため、多くの人が訪れるようになり、大正2年に「印野公園」として開園した。昭和3年には御胎内隧道が国の天然記念物に指定され、その後、印野郷土振興協会が自然公園として造成工事を行い、昭和34年4月に「富士山御胎内清宏園」として開園した。

現在、御胎内清宏園は、静岡県名勝百景、御殿場市観光12選、御殿場市指定野鳥の森等に指定されており、総面積約11haの園内には、フジザクラ、樹齢100年以上のナラ林、ツツジ、モミジなど多くの樹木、高山植物が自生している。

また、近隣には「御胎内温泉健康センター」、手づくり体験工房「たくみの郷」があり、更に平成23年4月には交流センター「富士山樹空の森」がオープン予定である。

これらの施設を含めた地域を「御殿場リゾート富士の郷」とし、新たな観光拠点として期待を寄せているところである(写真7および8)。

写真7　胎内神社と溶岩隧道

写真8　御胎内の風景

「富士サファリパーク」

富士サファリパークは、昭和55年4月23日に開園した森林型動物自然公園で、富士山の裾野に広かる大自然の中、動物本来の姿を車にのったまま見学することが出来るサファリ形式の動物園となっている。74万平方メートルの敷地内の約60%は緑地として保存され、緑豊かな園内では、現在70種約900頭羽の動物達を飼育・展示している。

園内では、マイカーや金網張りのジャングルバスに乗ったまま、ライオンやアムールトラ、アフリカゾウなどの野生動物を間近に観察することができる「サファリゾーン」と、歩きながら、カンガルーやリスザルなどの小動物とのふれあいや乗馬体験・各種イベントが楽しめる「ふれあいゾーン」に分かれているほか、「イヌの館」・「ネコの館」などで世界の様々なイヌ・ネコと触れ合うことができる。

そして、サファリゾーンの外周フェンスに沿った1週2.5kmのコースを、森林浴を楽しみながら動物達をじっくり観察できる「ウォーキングサファリ」もあり、動物と自然を通じてさまざまな楽しみ方ができる施設となっている。また期間限定(4月中旬から10月末までの土日祝およびGW夏休みの毎日)で「ナイトサファリ」が開催されており、昼間とは違った夜しか見られない野生動物の姿をマイカーや専用バスに乗ったまま観察することができる。

サファリパークの職員は、サファリゾーンではジープに乗車し、動物の監視やお客様車両の安全確保を行なっており、ふれあいゾーンでは動物の飼育以外にも接客に従事している。また、サファリショップ・レストランでは販売・飲食業務に従事している。

今後、富士サファリパークでは、動物園の役割の一つである「自然保護」を目的に、チーターやアムールトラといった希少動物の繁殖を園内なみならず、他の園とも協力をしながら繁殖活動に努めていきたい考えている(写真9および10)。

写真9　サファリバス

写真10　サファリゾーン内ゾウと富士山

「富士山こどもの国」

富士山こどもの国は、広さ94.5ヘクタールの自然豊かな静岡県営都市公園として、富士市桑崎に平成11年4月26日開園した。平成16年度までは県の運営となっていたが、平成17年度からは、利用者サービスの向上と効率的な管理運営を実現するため、指定管理者制度を導入して、富士サファリパークを運営する小泉アフリカ・ライオン・サファリ株式会社にその管理運営を委託、現在に至っている。

園内は「街」、「草原の国」、「水の国」の3つのエリアに分かれ、季節ごとに移り変わる自然の中、動物とのふれあい、カヌー体験、水遊び、雪遊びなどが楽しめるほか、工作・食べ物作り・ゲームイベント・自然観察会や歳時記の体験、農業体験やクイズラリーなどの期間限定イベントの実施に加え、ディスクゴルフやパークゴルフ、オリエンテーリングやアスレチック、変り種自転車など体を動かして楽しめる施設も備えている。園内の特徴として、ユニバーサルデザインを取り入れた設計になっており、障害の有無や年齢にかかわらず、誰でも楽しめる施設になっていることがあげられる(写真11および12)。

写真11　こどもの国施設外観

写真12　雪の丘での雪すべり体験

3.富士山ネットワーク推進委員会の活動内容

前章で紹介したように、富士山ネットワーク推進委員会加盟各館園の運営母体や対象分野は大きく異なっており、活動内容も千差万別である。そのような中で、ネットワークを立ち上げ、活動を行ってきた大きな目的は、富士山周辺地域に住む人々、そしてこの地域に訪れた人々に提供するサービスを向上させること、そして、各館園が連携し、単独では困難な広範囲でのPR活動を充実させるということである。そのために、富士山ネットワーク推進委員会では、各館の担当者が定

期的に会合を持ち、打ち合わせを行う中で、様々な事業を企画・実施してきた。そこで、以下では、これまでに実施した事業についてとりあげてみたい。

・共通展示の実施

富士山ネットワーク推進委員会は平成5年に立ち上げられたが、当初は設立当初は各館の担当者レベルでの情報交換会や勉強会を重ね、平成7年度にはじめて共通展示という形で事業を実施した。この事業では、「富士山情報の再発見」を共通スローガンに、同一時期に各館で富士山をテーマとした展示やスタンプラリーを行った。

・富士山ぐるりん手帳の作成

平成7年度に実施した共通展示の際に行なったスタンプラリーを発展させ、各館を巡回し、スタンプを集めると景品をもらうことのできるスタンプ帳、「富士山ぐるりん手帳」（有償）を作成した。このスタンプ帳の販売は平成15年度まで継続した。

・富士山ぐるりんマップの作成

平成7年度に実施した共通展示の際には、各館を紹介するマップ、「富士山ぐるりんマップ」が作成された。その後、平成11年度、平成15年度にそれぞれマップの内容を見直し、より使い勝手の良いマップを目指してきた。そして、平成22年度においても富士山ぐるりんマップの改定を行なった。このマップは加盟各館園において来館者に配布を行なっている（写真13）。

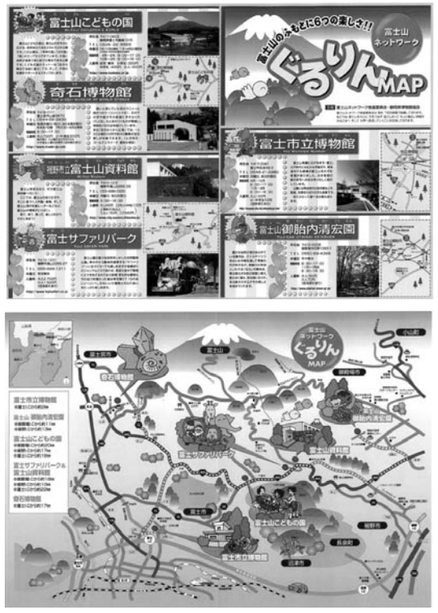


写真13　富士山ぐるりんマップ 表（上）、裏（下）

・ふじさん写生大会

平成10年度に実施した事業。この事業は、小学生以上を対象に、富士山を描いた絵画を公募し、表彰を行うというものであり、約180名の応募があった。

・体験フェスタ

平成12年度、13年度に実施した事業。この事業は、富士サファリパークにおいて、各館独自の体験型イベントを行い、各館の活動の紹介を行うというものであった。

・夏休み発見・体験レポートコンテスト

平成14年度から現在に至るまで9回にわたって実施している事業であり、現在の富士山ネットワーク推進委員会における主要な事業の一つとなっている。その内容は、夏休み期間中に加盟各館園を訪れた小学生を対象にした作品や感想文、レポートのコンテストを実施し、表彰を行うというものである。年によって前後するものの、近年は約60点の応募があり、厳正な審査の結果受賞された応募者を対象にした表彰式を、御殿場市の国立中央青少年の交流の家が実施するフェスティバル（10月中旬に開催）の一プログラムとして行っている。

なお、レポートコンテストの実施に際しては、開催告知チラシを作成し、夏休み前には各館園の所在地の市町の小学生全生徒に配布を行っている。平成19年度からは、開催告知チラシに各館園の割引券やプレゼント券を付け、より各館園へ足を運んでいただけるような工夫に取り組んでいる。

また、レポートコンテストを実施するにあたっては、第1回から周辺市町の後援を得てきたが、より効果的なPRを目指して、平成19年度からは、静岡県内のマスコミ各社に依頼し、事業の協賛・後援および記念品の提供等の協力を得るようになっている。

それだけではなく、平成20年度からは、レポートコンテストを実施する直前の6月下旬に、富士山こどもの国において、レポートコンテストのPRイベントを開催している。このイベントでは、宝石探しや手漉和紙体験など、各館園がそれぞれ体験ブースを設置し、体験者にレポートコンテストのPRを行っている。この各館独自の体験活動については、レポートコンテスト表彰式当日にも交流の家フェスティバル会場内においても実施している（写真14および15、16）。

写真14　レポートコンテスト告知チラシ

写真15　レポートコンテスト表彰式

写真16　レポートコンテストの際の体験ブース

・館園長会議

平成8年度から隔年で実施。館園長会議では、会議開催前年度と前々年度の事業および会計報告、開催年度の事業計画報告を行うとともに、各館園の近況報告や、「ボランテア活動と博物館園」や「学校との連携」といった、その時々の博物館園を取り巻く状況や課題に応じたテーマでの懇話会などを実施している。

・研修会

平成22年度に実施した事業。静岡県庁を通じて、静岡県観光顧問の谷口せい子氏、静岡県観光協会の松永喜美子氏をお招きし、静岡県を取り巻く観光の状況、外国人観光客に対する接遇方法などの講演を行っていただいた。なお、この研修会には富士山ネットワーク推進委員会の担当者だけではなく、各館園の職員も参加した。

ここまで紹介してきたように、富士山ネットワーク推進委員会では、立ち上げ以来、様々な事業を実施してきた。これらの事業の実施にあたっては、印刷物や記念品、事務費などの経費が発生するが、この費用については、各館園から負担金（年3万円）の徴収を行っている。また、平成18年度、19年度、20年度、22年度には、静岡県博物館協会が実施した「地域セミナー」からの助成を受け、富士山ネットワーク推進委員会のノボリや看板、夏休み発見・体験レポートコンテストの告知ポスター、富士山ぐるりんマップの改定などを実施させていただいている。

4.富士山ネットワーク推進委員会の課題と今後の展望

私見の限りでは、富士山ネットワーク推進委員会のような、運営母体、対象分野が異なる施設が広域でネットワークを形成し、独自の事業を実施しているという事例は全国的にみてもそれほど多くはみられないのではないだろうか。

運営母体が公的機関もあれば私的機関もあるということで、たとえば、負担金の増額についてもかつて検討されたことがあるが、私的な機関については、ある程度柔軟に対応できるが、公的機関ではなかなか対応できないといった問題も抱えている。しかしながら、運営母体が異なっているからこそ、幅広く博物館園の抱えている課題や現状についての情報交換が可能になっているという点や、対象分野が異なっているからこそ、それぞれの分野での展示活動や教育普及活動を、自館の活動に活用させることができるといった利点がある。

また、富士山ネットワーク推進委員会では、サービス充実と効果的なPRを大きな目標として活動を行ってきたが、現状で「富士山ネットワーク推進委員会=富士山周辺の博物館園」という関係が多くの人々に知られているというわけではない。現在、富士山を世界文化遺産に登録するという動きが活発となっているが、登録されたあかつきには多くの人々が富士山周辺を訪れることとなろう。富士山ネットワーク加盟各館園は、富士山周辺を訪れた人々に対する学びの場、体験の場として活動していくことがさらに求められることとなる。このような状況の中で、富士山ネットワーク推進委員会として、現状の活動に加え、どのようなサービス、そしてどのようなPRを行っていけるのかということを考えていくことが今後の課題である。

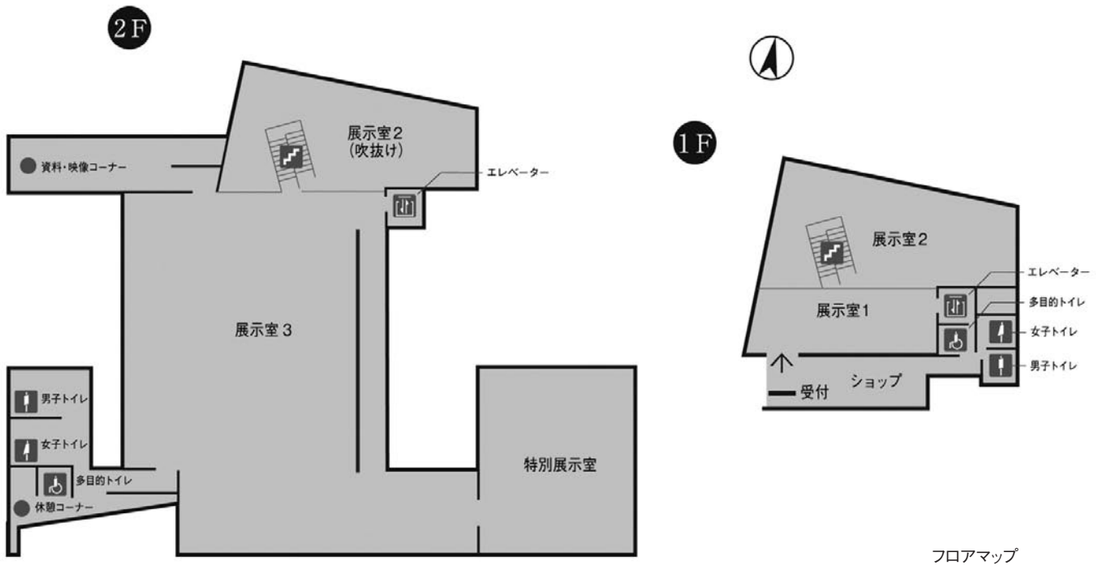
詩人の軌跡　―大岡信ことば館収蔵品から―

大岡信ことば館 学芸員　松﨑 なつひ

1.はじめに

大岡信ことば館は、2009年10月5日に静岡県三島市文教町に開館し、今年で2年目となります。三島駅北口から徒歩で1分のところにある10階建てのビルの1階と2階を展示スペースとしています。1階にはミュージアムショップと展示室1・2、2階に624.5平方メートルの広々とした展示室3と温湿度管理を徹底し重要文化財の展示にも対応する特別展示室、合計4室を擁し、二つのフロアをむすぶ吹き抜けに配した大きな窓から外光が差し込む開放的な空間です。

収蔵品の主体は、三島市と沼津市の名誉市民である詩人、大岡信氏（1931-）の原稿や詩稿などの文芸資料や書籍類、および氏が所有していた美術品など、いずれも長い間本人が大切に保存してきた品々で構成されています。開館以来、これらの収蔵品を通じて大岡信の軌跡を紹介する開館記念特別展「ようこそ　大岡信のことばの世界へ」を、全6期に分けて順次開催してきました。各会期のテーマと展示内容は以下の通りです。



フロアマップ

≪「ようこそ　大岡信のことばの世界へ」展の会期と内容≫

その1「水のメッセージ」　2009年10月5日～12月27日
・生誕から中学時代までの歩み
・10篇の詩「故郷」…学生時代の作や故郷にまつわる詩10篇を紹介
【同時開催】:大岡信コレクション　作家名あ～か

その2「いのちにふれる」　2010年1月16日～3月30日
・旧制高校時代～読売新聞記者時代までの歩み
・10篇の詩「青春」・・・初期の詩集から10篇を紹介
【同時開催】大岡信コレクション　作家名か～し

その3「うたげと孤心」　2010年4月17日～6月29日
・読売新聞退社後の歩み（1978年刊行の評論『うたげと孤心』を中心に）
・10篇の詩「展開」・・・1960～70年代の詩集から10篇を紹介
【同時開催】大岡信コレクション　す～と

その4「ことばは織物」　2010年7月17日～9月28日
・朝日新聞連載の「折々のうた」を中心に80年代以降の活動を概観
・10篇の詩「自在」・・・1980年代以降の詩集から10篇を紹介
【同時開催】大岡信コレクション　な～わ

その5「見ること見られること」　2010年10月16日～2011年1月16日
・さまざまな詩人たちとの「連詩」について
・10篇の詩「豊穣」…ことばや詩にまつわる詩10篇を紹介
【同時開催】大岡信コレクションA～Z（海外作家）

その6「捧げるうた」　2011年2月5日～5月31日
・他者へ捧げた詩を通じて大岡にとっての詩の存在理由を問う
・10篇の詩「きづな」・・・親しい人に捧げた詩の中から10篇を選んで紹介
【同時開催】大岡信コレクション　大岡信の作品群

参考1:その5「見ること見られること」展示室2のようす

現在開催中のその5「見ること見られること」展（2010年10月16日～2011年1月16日）につづき、本年2月5日から、その6「捧げるうた」展（～5月31日）がはじまり、その終了をもって、一年半にわたった展覧会が幕を閉じることになります。そこで本稿では、すでに終了している会期（その1～その4）を中心にこの展覧会の報告というかたちで、当館の収蔵品とこれまでの歩みをご紹介します。なお、各会期のテーマに合わせて大岡の詩作品を毎回10篇選び、これらを造形的に工夫して新たな視点でご覧いただけるよう展示する試みも行いましたが（参考1）、ここでは館のご紹介という主旨に鑑みて、収蔵品の中核をなす文芸資料類に焦点を当て、各会期の出品資料の中から特に重要なものをとりあげ、これに沿って詩人大岡信の軌跡をたどることを試みます。

2.開館記念特別展「ようこそ　大岡信のことばの世界へ」

その1「水のメッセージ」展では、三島に暮らした小学校～中学校時代にスポットを当て、子どもの頃の日記や作文のほか、中学3年生のときに友人や教師とともに結成した同人誌「鬼の詞（ことば）」（図1）などをご覧いただきました。故郷ですごしたこの時期は、のちの大岡信の活動における核となる「ことば」との出会いの原体験となる重要な時期であるといえます。

歌人の父[1]を持ち、文学とは比較的身近であった大岡の子ども時代ですが、それは同時に、戦争が「片時の休みも

1　大岡信は、1931年に静岡県田方郡三島町（現・三島市）に生まれた。父の博と母の綾子はともに小学校の教員で、父は、教鞭を取る傍ら、歌誌「菩提樹」を主宰する歌人でもあり、また自らの短歌の師である窪田空穂（1877－1967）の研究もおこなっていた。

なしに続いている」[2] 時代でもあり、好きな本を自由に読むことができるような環境とは、かならずしもいえなかったようです。敗戦の年、県立沼津中学校（現・沼津東高等学校）の3年生だった大岡にとって、戦争の終結とは生きる時間を延長されたような感覚であり、ふって沸いたようなこの時間を惜しむように、戦火を避けて庭に埋めていた父の蔵書を掘り返し、読みふけりました。「鬼の詞」という同人誌が誕生したのも、同じ1946年のことです。

タイトルは、明治時代の詩人伊良子清白（1877-1946）の詩集『孔雀船』に収められた詩「鬼の語」からとったものです。「鬼の詞」は全8巻刊行され、各号表紙に美しいカット[3]が配されています。中を見ると同人たちの自作の詩や短歌、俳句のほか、毎号の担当者による「編集後記」も付され、とても中学生の作ったものとは思えない充実した内容です。大岡はこの中で文語体の詩を掲載していますが、当時は父の影響もあり、文学への入り口は短歌であったといってよいようです。また、手作業で版を切る「ガリ版刷」自体が今ではあまり見ることのできない上、学生たちが自主的に作ったこのような同人誌が全巻そろって残されているのは珍しく、そうした観点から見ても貴重な資料であるといえるでしょう。

その2「いのちにふれる」展では、旧制第一高等学校時代～読売新聞社退社までの約17年間をたどりました。大岡は1947年に旧制第一高等学校の文科丙類に入学し、1950年には東京大学文学部国文科へ進学します。高校時代は、ボードレール、ヴァレリーなどフランス文学に熱中する一方、『新古今和歌集』も愛読していたといいます。東京大学国文科に進学後は、学内外の同人雑誌や文芸新聞などに、詩「海と果実」[4] や「エリュアール論」（「赤門文学」1952年11月1日発行に掲載）といった論考を発表し、卒業論文「夏目漱石論」（図2）を書き上げて1953年に卒業、読売新聞社に就職します。同じ頃、「詩学」という雑誌の1953年8月号に掲載された「現代詩試論」が詩人の那珂太郎（1922-）の目にとまります。那珂は、大岡が発表していたいくつかの詩とこの「現代詩試論」を読み、「しぶきをあげて廻転する金の太陽」[5] といった詩における瑞々しい表現力と、評論における確かな論旨および「明快機敏に動く思考をうつすしなやかで活性にみちた」[6] 文章力とに感服します。そしてちょうど書肆ユリイカで計画されていた『戦後詩人全集』に大岡を入れることを伊達得夫（ユリイカ社主、1920-1961）に勧め、伊達もこれに応じました。2年後には那珂が大岡をみとめるきっかけとなった『現代詩試論』も書肆ユリイカから出版されています（図3）。このように大岡は、詩人としてスタートを切ったのと同時に、現代詩を論ずる気鋭の論客としてもその名を知られるようになったのでした。

就職した読売新聞社では、フランス語ができる語学力を買われ、外報部の記者となり海外のニュースを翻訳する仕事につきますが、同人誌「櫂」[7]（図4）や「鰐」[8]（図5）などにも参加し、詩作も並行して続けていました。1956年には、先述の「海と果実」を改題した「春のために」や「櫂」に発表した「翼あれ　風　おおわが歌」などを収めた第一詩集『記憶と現在』が刊行され、詩人として順調な滑り出しを見せています。

また、同年には、飯島耕一（詩人、1930-）や東野芳明（美術評論家、1930-2005）らとともに「シュウルレアリスム研究会」を結成し、おもに雑誌『美術批評』や『みづゑ』などの誌上での活発な討論によって、シュルレアリスム運動への理解を深め、詩作にもその成果を投影しています。日本のシュルレアリスム運動における第一人者ともいうべき瀧口修造（詩人・美術評論家、1903-1979）や、後述する南画廊主・志水楠男との出会いもこの時期のことでした。

そのほか、ユリイカの伊達得夫を通じて版画家の駒井哲郎と知遇を得たり、『美術手帖』に展覧会評を寄せたりするようにもなり、現代美術へも関心を向け始めました。

展示では、大岡が保存していた「櫂」や「鰐」などのほか、学生時代に詩を書きとめていた手帖や詩稿、那珂太郎から届いたはがきなどの展示を通して、いきいきと活躍していた20代の大岡信を浮き彫りにしました。

その3「うたげと孤心」展では、大岡氏の著書『うたげと孤心』（集英社、1978）（図6）のタイトルをテーマに掲げて、この著作を中心に、1960年代～70年代にかけての活動の様子をご覧いただけるよう展示を構成しました。1963年、大

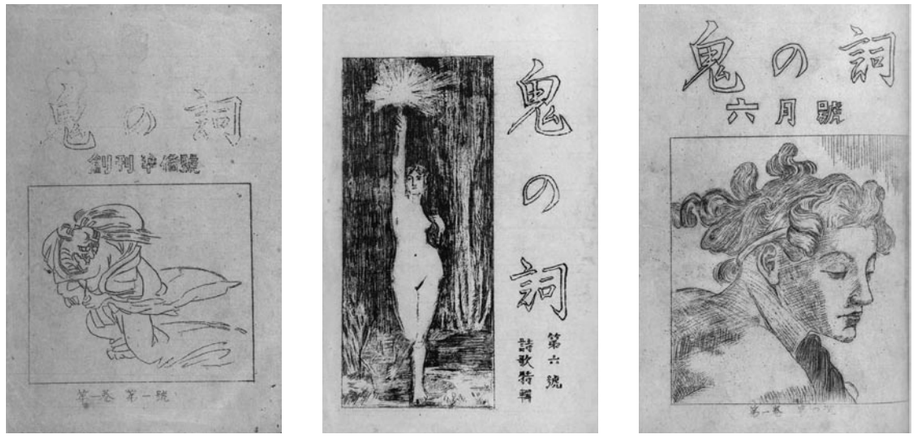


図1:同人誌「鬼の詞」

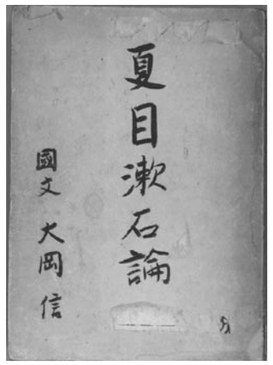


図2:卒業論文「夏目漱石論」（1953年）

図3:『現代詩試論』（書肆ユリイカ、1956年）

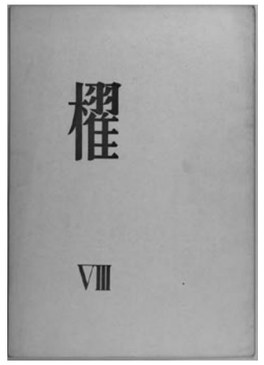


図4:同人誌「櫂」（1954年9月10日発行）

図5:同人誌「鰐」（1962年9月20日発行）

2 『詩への架橋』p25
3 表紙のカットや本文などの「ガリ切り」は、同級生の重田徳が一手に引き受けていた。
4 のちに「春のために」と改題し第一詩集『記憶と現在』（書肆ユリイカ、1956年）に所収。
5 詩「春のために」の一部。
6 那珂太郎「大岡さんとの初対面、そしてその名前」より。『大岡信著作集1』（青土社、1977年）「月報」p2
7 「櫂」は、川崎洋と茨木のり子が1953年に創設した詩誌。ほかにメンバーは友竹辰、谷川俊太郎、吉野弘ら。
8 「鰐」は、吉岡実、飯島耕一らとともに1959年に創刊した詩誌。ほかにメンバーは清岡卓行、岩田弘ら。

岡は読売新聞社を退社し、同年渡仏してパリ青年ビエンナーレの詩部門に参加、1965年にこの渡欧の記録をまとめたエッセイや芸術論などをおさめた『眼・ことば・ヨーロッパ』（美術出版社）を刊行します。パリで日本の詩についてフランス語で講演した大岡は、自分が「徹頭徹尾ヨソのクニの言葉」[9]であるこの言語に対し、日本語で語るよりはるかに気楽でどこか無責任な気持ちでいられたことから、逆説的に日本人である自分と「日本語」との結びつきや無意識に感じている責任感に気づかされます。展示では、青年ビエンナーレで朗読した詩の台本を出品しました。さらに、1973年6月から74年9月にかけては、文芸季刊誌「すばる」に「うたげと孤心」と題する評論を全6回にわたって連載しました（図7）。この「うたげと孤心」の主題を生み育てる土壌となったのは、1960年代末ごろから安東次男（詩人・俳人、1919−2002）や丸谷才一（小説家、1925-）らと始めた歌仙（連句）の経験でした。公の場で各自が個性を保ちながらも他者と協力することによって、独り自分の内面と向き合って孤独に作詩するのとは全く違う結果が生まれることを体験したのです。

展示では、のちにこの連句を発展させて大岡が提唱した「連詩」についてもふれながら、実際に大岡がさまざまな人と連句を巻くようすをおさめた写真などを展示し、「うたげの場」を思い描いていただけるよう工夫しました。また、この時期には、『芸術と伝統』（晶文社、1963年）、『超現実と抒情　昭和十年代の精神』（晶文社、1965年）『現代詩人論』（角川書店、1969年）、『現代芸術の言葉』（晶文社、1967年）など文芸や美術に関する評論が数多く刊行されました。60年代に多く手がけた放送劇の台本や草月実験劇場のための台本「鍵穴」（ジャック・タルデュー作／大岡信訳、1964年）なども展示し、大岡の仕事の幅がこのころ格段に広がったこともご紹介しました。詩集としては『大岡信詩集』（思潮社、1968年）『悲歌と祝祷』（青土社、1976年）、散文詩『彼女の薫る肉体』（湯川書房、1971年）など、連句やシュルレアリスム研究などを通じて得たものを消化し詩作へ結びつけるようすが伺えました。また、こうした生き生きとした活動の背景にあった高度経済成長期の自由な雰囲気に満ち溢れていた社会そのものをも、これらの資料からは読み取ることができたのではないでしょうか。

その4「ことばは織物」展では、1980年代以降の活動を「折々のうた」を中心にご紹介しました。「折々のうた」は、朝日新聞の朝刊に連載したコラムで、1979年にはじまり、その後足かけ29年間にわたって続き、この時期以降の大岡にとって、ライフワークともいえる仕事となりました。古今東西の詩歌に大岡が独自の視点で解説を加えた180文字の小さなコーナーですが、開始当初は新聞紙上でのそうしたコラムはまだ珍しいものでした。

全部で6762回におよぶ連載を調査をしたところ、とくに多く取り上げられたのは、松尾芭蕉や与謝蕪村ら江戸時代俳人の句であることが分かりました。ただし、一番多い芭蕉でも81回と、全体の1%程度にとどまっていました。一方で中古の今様歌謡をあつめた『梁塵秘抄』（後白河院編、1169年頃）や中世の歌謡集『閑吟集』（1518年）、江戸時代の俳句付句集『武玉川』や川柳集『誹風柳多留』などからも数多くの引用があったほか、現代の詩や高校生の短歌など、あらゆる方面から有名無名に関わらず選んでいたことが分かります。原稿および草稿（草稿には、別の原稿用紙の裏を使用。）などとともに、実際の新聞記事の切り抜き（図8）を拡大したパネルを用意し、7000回近くという圧倒的な連載数を感じていただけるよう、できるだけ多く展示しました（参考2）。「折々のうた」を、古今東西の詩歌をゆるやかにつなぎとめて大きな一枚の言葉の「織物」を作るように編んでいたと、のちに大岡は振り返っています。まるで連句のようにうたとうたをつなぐこの壮大な試みは、大岡だからこそできたことと言えます。

また、2003年に受賞した文化勲章をはじめ、フランスの芸術文化勲章シュバリエ勲章（1990年）やマケドニアのストルーガ詩祭大賞（1996年）など、80年代以降、これまでの仕事が評価されて国内外で受賞した多数の賞の一部も併せて展示しました。

その5「見ること見られること」展は、大岡が世界中の詩人たちと巻いた「連詩」の世界をご紹介しています。また、その6「捧げるうた」展では、「詩」というものを何ものかへの「呼びかけ」であると考える大岡が、他者に捧げた「詩」をテーマに展示を試みます。

図6:『うたげと孤心』（集英社、1978年）

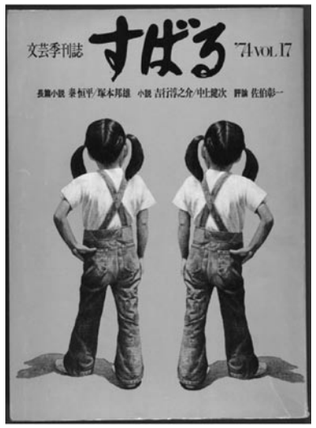


図7:「すばる」（集英社、1974年9月号）

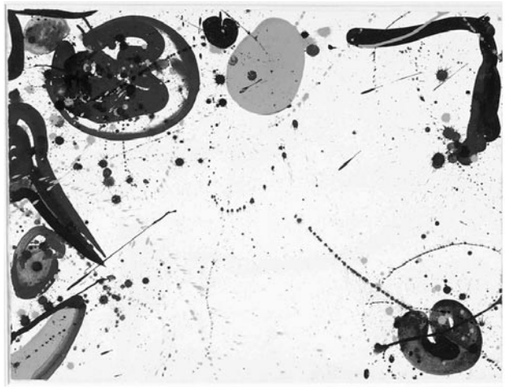
参考2:その4「ことばは織物」特別展示室のようす

図8:「折々のうた」（朝日新聞社朝刊）

9 『大岡信著作集11』（青土社、1977年）所収の「眼・ことば・ヨーロッパ」p47より抜粋。

詩人の軌跡　ー大岡信ことば館収蔵品からー

3.同時開催展:大岡信コレクション



参考3:サム・フランシス《大岡の月》1964年頃

ここまで文芸資料を中心に簡単に全体を振り返ってきた「ようこそ、大岡信のことばの世界へ」という企画展ですが、これと並行する形で、当館の美術コレクションも6期に分けて展示してきました。

大学時代から東野芳明らとの交流を通じて高まりつつあった現代美術への関心は、1960年代に入りますます強く深いものとなります。現代美術と大岡とを直接に結びつけることになるとくに大きなきっかけとなったのが、日本橋にあった南画廊という画廊の存在でした。画廊主・志水楠男(1926-1979)は、大岡のフランス語の能力を知って、同画廊で開催する「フォートリエ」展のカタログのためのフランス語テキストの翻訳を依頼してきたのです。1959年のことでした。志水の礼儀正しく情熱的な人柄に惹かれたこともあり、その後大岡は南画廊にしばしば通うようになります。やがて展覧会パンフレットの文章を書いたり、外国からの手紙類を志水のために読んだり、個展を開く作家の選択について相談にのったりと、画廊での仕事を手伝うことも多くなりました。当時、南画廊は他の画廊に先んじてティンゲリーやサム・フランシス(参考3)など海外の現代作家を紹介していたほか、駒井哲郎、加納光於、宇佐美圭司など日本の作家の個展も積極的に行っていました。大岡は、南画廊に出入りするうちに、上述のような作家や評論家など美術関係者たちとも親しくなり、自らも美術評論や作家論を執筆しました。当館の美術コレクションの多くは、この頃交流した作家たちの作品です。自ら気に入って購入した作品のほか、作家自身から(たとえばカタログに寄せた詩のお礼として、あるいは友情の記念として)譲り受けたものも数多く含みます。そして大岡自身は美術のコレクターであるという意識は全くないにも拘わらず、いつの間にか400点余りの美術品が彼の手元に集まったのです。このような自然発生的なコレクション成立の経緯を考え、展示の際はあえて学芸員が何らかのテーマを設けて作品を選定することをせず、単純に作家名の五十音順(海外作家はアルファベット順)で作品を展示しました。また、大岡がその作家のために、あるいは作品そのもののために寄せた詩や文章を作品の隣に配し、大岡の目を通した作家像や作品評をご紹介するとともに、美術と文学が非常に近いところで交流し、互いに刺激を与えあったようすが伝わるよう工夫をしました。

4.むすび

以上のように、開館記念特別展「ようこそ、大岡信のことばの世界へ」は、文芸資料や美術品などの収蔵品を通じて、まずは大岡信の活動全体を知っていただくことをめざして企画されました。改めてまとめてみると、大岡の活動が決して一般にイメージされる「詩人」の枠組みに収まるものではないということがよく分かります。大岡は自らを「詩人」と称していますが、ここで大岡の考える「詩」は、いわゆる詩や短歌、評論などすべてを内包する広義の意味での「詩(poesy)」です。つまり大岡は、自分の書くものが詩であるか、小説であるか、評論であるか、といった区別をすることに大きな意味を見いだしていません。すべては、大岡から生まれてきた言葉のつらなりであり、できあがったものがどのような形式に当てはまったとしても、その内には「詩」が存在するということなのでしょう。本稿をあえて「詩人の軌跡」と題したのは、そうした大岡の「ことば」を巡る視点をお伝えしたいと考えたからです。

大岡の視点に立っていろいろな角度から「ことば」と出会うことで、まだまだ多くのことを学ぶことができるに違いありません。私たちことば館のスタッフは、大岡が与えてくれるたくさんの切り口をヒントに、できるだけ多くの方に豊かなことばの世界をお伝えしていこうと考えています。個人主義的傾向が強いといわれる現代、社会が求める「人とのつながり」にとって「ことば」が一つの答えとなり得るのではないでしょうか。枠組みにとらわれない大岡の姿勢そのものをお手本にして、展示という手法だけでなく、ワークショップや朗読会、講演会など活動型の企画にも積極的に取り組み、ことばを楽しむ「場」として親しんでいただけるような館作りを志して、日々新たな挑戦を続けていこうと考えています。

参考文献

＜書籍＞

『大岡信著作集』第1巻　大岡信著　青土社　1977年

『大岡信著作集』第11巻　大岡信著　青土社　1977年

『詩への架橋』　大岡信著　岩波書店　1977年

『うたげと孤心　大和歌篇』　大岡信著　集英社　1978年

『詩・ことば・人間』　大岡信著　講談社　1985年

『大岡信全詩集』大岡信著　思潮社　2002年

＜展覧会カタログ＞

『詩人の眼・大岡信コレクション』　朝日新聞社、2006-7年

＜その他＞

「大岡信フォーラム会報」通巻12号　2003年6月講義「詩のはじまり「憂愁」」大岡信フォーラム事務局　2003年10月発行

「大岡信フォーラム会報」通巻13号　2003年7月講義「鬼の詞」大岡信フォーラム事務局　2003年10月発行

静岡市立登呂博物館リニューアルオープン

静岡市立登呂博物館 主任主事　稲森 幹大

はじめに

平成22年10月3日、静岡市立登呂博物館（以下、「登呂博物館」）がリニューアルオープンを迎えた。登呂博物館は、弥生時代の農耕集落である特別史跡登呂遺跡に隣接した博物館であり、登呂遺跡に関する知識の向上と文化の発展に寄与することを目的として昭和47年に開館した。今回のリニューアルオープンは、登呂遺跡の再発掘調査の成果に基づき整備される遺跡と一体化した新しい博物館を目指して進められたものである。

なお、現在隣接する登呂遺跡も平行して再整備を進めているところであるが、その経緯等については省略させていただき、本稿では、登呂博物館がリニューアルするにあたり、どのような博物館として生まれ変わったのかという視点で述べたいと思う。

また、リニューアル前後で博物館を区別するため、それぞれ「旧博物館」、「新博物館」と表記することとする。

1 旧博物館の概要

旧博物館は、特別史跡登呂遺跡に隣接した博物館として、昭和47年4月1日に開館した。建物は、高床倉庫を模した外観となっており、1階に稲作農耕文化を伝える民俗資料、2階に登呂遺跡出土遺物を中心とする考古資料をそれぞれ展示する2つの常設展示室と、特別展示室を備えていた。

主な活動としては、年1回考古と民俗に関する特別展を交互に開催するほか、夏休み等を利用した教育普及事業、社会科見学や修学旅行等での学校団体の受け入れなどであった。開館当時、静岡市内唯一の公立博物館であったことから、地域の幅広い歴史を扱った博物館として活動を展開してきた。一方では登呂遺跡に隣接しているという立地環境のもと、多くの観光客が全国各地から訪れ、観光地としての博物館でもあった。

また、早くから体験学習を効果的に取り入れた活動の展開を図り、平成6年度には民俗資料を展示していた1階展示室を弥生時代の生活体験を常時行うことができる参加体験ミュージアムとしてリニューアルし、全国に先駆けた体験学習活動の手法として注目を浴びた。

2 建替事業の経緯

旧博物館の開館初年度は28万人を超える入館者数を数え、35年余りの間で約700万人もの人々が訪れてきた。しかし、近年の全国各地における大規模遺跡の発見や様々なレクリエーション施設の誕生、少子化による学校団体参加者数の減少などにより、入館者数は少しずつ減少を重ね、平成18年度には年間8万人余りとなるに至った。また、平成15年度に実施した耐震診断では、施設の老朽化が進んでいることがわかるなど、現在の建築基準には適合できない部分も生じ始めた。

このような中、静岡市では平成11年度から5ヵ年事業で登呂遺跡の再発掘調査を実施し、新しい調査成果を踏まえ、平成23年度までの計画で再整備事業を実施することが決定した。そして平成16年度に、登呂遺跡の再整備と併せて登呂博物館の建替事業を実施することが、静岡市第1次総合計画に位置づけられた。

建替事業は平成17年度からスタートした。17年度は、有識者による建替検討委員会を設置し、基本構想を策定した。18年度には、建築と展示の2種類の設計業務について別々にプロポーザル方式による業者選定を行い、基本設計を実施、19年度に実施設計を行った。また、旧博物館と同じ場所に新博物館を建設するため、平成19年6月末をもって旧博物館は閉館し、解体工事を行った。そして平成20年度よりおよそ2ヵ年かけて新博物館の建設工事及び展示工事を行った。

登呂博物館建替事業は、国土交通省所管のまちづくり交付金事業を活用して実施された。まちづくり交付金事業は、特徴として旧来の補助金に比べ各自治体で比較的自由に事業展開を図ることが可能な事業であり、各地区ごとに地区全体の位置づけや目標及び指標を決めた上で実施するものである。登呂博物館建替事業は「登呂公園周辺地区」の中に位置づけられ、登呂遺跡を核とした魅力ある空間を創出するという大目標のもと、事業成果としても施設の利用者数を年間144,000人とするという指標目標が定められた。また、まちづくり交付金事業には本来の国土交通省所管となる基幹事業と各自治体の裁量により定められる提案事業に分かれており、新博物館は基幹事業である地域交流センターと提案事業である博物館の複合的な機能をもつ施設として位置づけられた。

3 基本構想

新博物館の基本構想策定作業は、登呂博物館建替検討委員会を設置し、明治大学名誉教授の大塚初重氏を委員長に招き、平成17年度に実施した。

この基本構想において、新博物館の最も重要なコンセプトとして「登呂遺跡と一体化した遺跡博物館」が明記された。遺跡博物館としての機能をより明確にし、目指す姿を登呂遺跡に特化した博物館とすることを狙いとしたものであった。

このことを踏まえ、博物館の主要事業である調査研究活動では、「東アジアの中の登呂遺跡」という広域的な視野に立ち、最新の発掘調査成果を加えながら、稲作農耕文化に関する調査研究の拠点となること、また、登呂遺跡の発掘調査がもたらした学史的意義、社会的意義を継承していくという2つのことを役割と使命として掲げている。

また、まちづくり交付金事業の趣旨である地域に開かれた「まちづくり」の拠点施設として、情報の発信、地域の交流センター的役割を担っていくことを掲げている。

4 施設概要

新博物館は、基本構想の中で掲げられた理念を遂行するために様々な機能を持った諸室が配置された。以下にその概要を述べる。

新博物館は鉄骨鉄筋コンクリート造2階建で、敷地面積2,841.50㎡、延床面積2,296.52㎡の建物である（写真1）。

1階には、弥生体験展示室をはじめ、登呂交流ホール（写真2）、情報映像コーナー、図書コーナー（写真3）、民間活力を利用したミュージアムショップ（写真4）を設けている（図1）。これらは、地域に開かれた博物館を目指すため、無料ゾーンとし、誰でも気軽に入館できるよう入口を2つ設けるなど、明るく入りやすい雰囲気となっている。特に図書コーナーでは、他館の展覧会図録、弥生時代及び考古学の一般図書、児童書などを自由に閲覧できるように配置し、利用者の自主的な学習を促している。また、ミュージアムショップでは博物館の顔として登呂博物館オリジナルグッズを販売し、利用者の満足度を高めるなどの効果をもたらしている。これらは従来の博物館のイメージにあった、暗く近寄りがたい雰囲気を払拭させ、様々な世代の人々の利用につながっている。

2階は常設展示室、特別・企画展示室の各展示室をはじめ、収蔵庫、調査研究室、事務室等の管理エリアを設けてい

写真1　新博物館外観

写真2　登呂交流ホール

写真3　図書コーナー

写真4　ミュージアムショップ

る（図2）。空気環境に配慮した収蔵庫は、一般の収蔵庫と特別収蔵庫の2種類があり、収蔵資料によって保管・整理ができるようになっている。各展示室の詳細については次項で述べることとする。

また、屋上は展望フロアとなっており、富士山を背景に登呂遺跡全体を眺められるコーナーとなっている。富士山の眺望は、県内外各地からの見学者を満足させ、日ごとに姿を変化させる富士山によりリピーターの誕生が見込まれるなど、「富士山の見える博物館」として新しい博物館の要素を生んでいるように感じている。

5 展示

展示室は、弥生体験展示室、常設展示室、特別・企画展示室の3つからなる。

弥生体験展示室は旧博物館からの伝統を引き継ぎ、弥生時代の登呂ムラを再現した展示室である。壁に描かれた風景と、復元された住居、高床倉庫、祭殿という3種類の建物、土器や木製品などの道具、そして実際に貫頭衣を着た入館者の方々によって登呂ムラの様子が復元されている。ここでは、弥生時代の米づくりを模擬的に体験できるとともに、当時使われていた様々な道具を実際に手に取り使用できることから、人気を呼んでいる（写真5）。

常設展示室は、登呂遺跡からの出土資料を展示した「登呂ムラと稲作」と登呂遺跡発見から整備に至るまでの学史を展示した「登呂遺跡の記憶」の2つのコーナーからなる。「登呂ムラと稲作」は、「米づくり」、「建物づくり」、「食べものと調理」、「道具づくり」、「木の加工」、「身を装う」、「まつり」に分かれており、部屋の中央に登呂遺跡の全体模型を配置し、各種の映像技術を用いながら、登呂遺跡出土資料により弥生時代の水田稲作を中心とするムラの姿を展示表現している（写真6）。また「登呂遺跡の記憶」では、「登呂遺跡の実像を求めて」と「登呂メモリー」に分け、前者では昭和18年の登呂遺跡発見から、昭和22年から25年にかけての発掘調査、その後の史跡整備、平成の再発掘調査までを年表上に展示し、当時のニュース映像などと併せて、登呂遺跡の学史的価値を伝えるための展示を行っている。また後者では、当時の新聞記事を集めた新聞記事ブラウザーや、発掘調査に参加された方々のインタビュー映像などが閲覧でき、当時の発掘にかけられた人々の想いを直接的に感じられるようになっている（写真7）。

特別・企画展示室は、考古、民俗をはじめ、様々な視点から登呂遺跡を考える展示を行う展示室である（写真8）。今後、文化庁の定める文化財公開承認施設に向け、重要文化財級の文化財を扱った展示も視野に展示計画を立てていく予定である。

写真5　弥生体験展示室

写真6　常設展示室「登呂ムラと稲作」

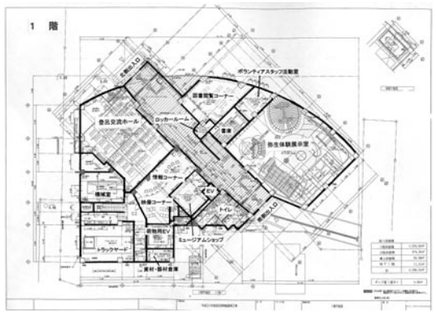


図1　1階平面図

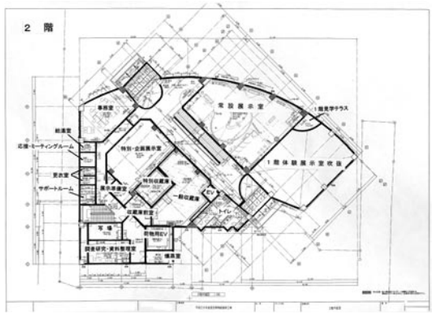


図2　2階平面図

6 キャラクターの誕生

新博物館の開館に向けて、平成21年度に登呂遺跡・登呂博物館イメージキャラクターの公募、選考を行った。キャラクターには地元小学生が作成したデザインが採用され、愛称も地元小中学生の応募した「トロベー」に決定した。募集にはそれぞれ、1,836点、2,221点の応募があり、市内の子どもたちを中心に盛り上がりをみせた。トロベー（図3）は現在ポスター、チラシ等の各種印刷物、看板、着ぐるみなどで活躍中であり、来館者の注目を集めている。今後登呂遺跡・登呂博物館を全国へと発信するためのトロベーを活用した事業展開を図り、今まで以上のPR活動を進めていきたいと考えている。

7 組織・運営形態

登呂博物館は、博物館法に基づく登録博物館として教育委員会の所管となっており、静岡市が直営で管理運営にあたっている。教育委員会事務局教育部教育総務課の中に社会教育担当が設けられ、その傘下に組み入れられている。職員は館長以下、5名の正規職員と5名の非常勤嘱託職員（うち4名は体験指導員）から成り、博物館の管理運営に関わる業務に従事している。

また、体験学習の補助や遺跡でのガイド等として現在56名のボランティアが活動を行っている。今後、博物館も含めた遺跡全体においてのボランティア活動の展開を図っていきたいと考えている。

登呂遺跡の管理運営については、都市公園法の定める「登呂公園」としても位置づけられていることから、史跡の整備管理を行う文化財課と公園の整備管理を行う公園整備課の所管となっており、駐車場を所管している観光・シティプロモーション課も含めての4課が連携を取りながら遺跡全体の管理運営に取り組んでいる。現在文化財課において、遺跡との一体化に向けた取り組みとして緊急雇用創出事業を活用した遺跡内での体験学習活動も実施しており、来訪者の好評を得ているところである（写真9）。

おわりに

登呂博物館は、リニューアルオープンという大きい目標を達成した。そして、入館者数は概ね開館初年度の目標値をクリアできる見込みである。

しかし、一方で新博物館は新しい施設として新たな目標に向けてスタートを切ったばかりである。まだまだ手探りの状況の中での管理運営となっているが、今後、入館者数等の数値目標だけでなく、登呂博物館の目指す姿をより明確にして新博物館としての実績を積んでいくことが求められる。また、登呂遺跡の価値を後世へ伝えるという意識を持って、今後も遺跡博物館の在り方、活動内容について検討を重ね、魅力ある博物館づくりに取り組んでいきたい。

写真7　常設展示室「登呂遺跡の記憶」

写真8　特別・企画展示室

図3　登呂遺跡・登呂博物館イメージキャラクター「トロベー」

写真9　野外体験学習活動

静岡市美術館の新規開館について

静岡市美術館の新規開館について

静岡市美術館 学芸課長　以倉 新

静岡市美術館は、JR静岡駅北口の再開発ビル「葵タワー」3階に、平成22(2010)年5月1日開館、10月2日より開館記念展をスタートしグランドオープンした。新幹線も停まる主要な駅から徒歩3分という、全国にも珍しい好立地の美術館である。筆者は、(財)静岡市文化振興財団の職員として、平成20(2008)年5月より準備業務に関わり[1]、開館とともに同財団が美術館の指定管理者となって現在に至っている。開館からおよそ1年が経とうとする美術館の概要について報告したい。

【経過】

静岡市は、平成17年度に「静岡市文化振興ビジョン」を策定、「個性あるしずおか文化の創造と継承」を理念に、文化活動の環境整備に取り組む指針を定めた。市は、これまでも、静岡駅南口に「静岡アートギャラリー」を平成9年より開設し、展覧会や教育普及事業などを行ってきたが、複合用途ビル内に整備された施設であるため、天井が低く、作品搬入用のトラックヤードや専用エレベーターがないなど、施設面での制約が多く、国宝や重要文化財など国指定文化財の展示も出来なかった。

そこで、市は、平成18年度に、有識者による「(仮称)静岡市立美術館基本計画懇話会」を立ち上げ、市民意向調査やパブリックコメントなど市民意見の聴取に努め、基本計画を策定、翌19年度には懇話会メンバーに市民委員を加え「静岡市新美術館準備検討委員会」(委員長・白井嘉尚静岡大学教授)を設置、運営実施計画を策定した。そして、平成21年7月「静岡市美術館条例」が制定された。

整備にあたっては、国指定文化財も展示出来ることが目指され、文化庁と事前協議が重ねられた。結果、上階での火災爆発等に備え、展示室及び収蔵庫区画の天井を完全な2重スラブとするなど多くの要件をクリアし、複合用途ビル内の美術館としては恐らく、全国でも初めて、指定品の展示可能な施設となった[2]。内装設計は(株)丹青研究所、内装建築工事は(株)木内建設が請負い、平成21年内装建築工事着手、平成22年4月に完成した。

尚、「静岡アートギャラリー」は平成21年12月で展覧会事業を終了、その使命を終えて整理業務に入り、平成22年3月末をもって閉館した。

静岡市美術館の管理運営にあたっては、(財)静岡市文化振興財団が指定管理者として市より指定を受け、指定期間は平成22年5月1日から平成27年3月31日までの4年11カ月である。

【静岡市美術館の設置目的と基本理念】

静岡市美術館の設置条例(「静岡市美術館条例」)には、美術館の設置目的が次のように定められている。

●静岡市美術館の設置目的

多様な美術表現を広く市民に公開し、静岡市の特色ある美術文化の創造と発信を行い、及び美術文化の交流を促進することにより、美術に関する市民の知識及び教養の向上を図り、もって市民の美術文化を振興することを目的とする。

また、市が作成した指定管理者の業務仕様書には、運営実施計画を踏まえ、美術館の基本理念が次のように掲げられている。

●静岡市美術館の基本理念

静岡市美術館では、「人・地域が躍動する芸術文化の創造・発信」を基本理念に掲げる。

・「しずおか文化」を培う自然・歴史を尊重し、美術を主軸にデザインや工芸などの芸術文化の検証と情報発信を目指す。

・市民の美術活動の醸成を促し、常に敏感な感性を養う。

・静岡市そして周辺地域における芸術文化の拠点として、躍動感あふれる活動を行う。

また、基本計画や運営実施計画において当初より、静岡駅前の中心市街地に整備されることから、「都市型の美術館」としての性格が強く意識され、文化振興を通じた「賑わいの創出」が期待されている。

【指定管理者としての運営方針】

以上を踏まえ、指定管理者として、基本理念の実現に向け、恵まれた立地条件と施設を活かし、“街に開かれ、いきいきとした美術館”をキーワードに、次の4つを美術館運営の基本方針に掲げている。

●静岡市美術館の運営方針

1・新しい「しずおか文化」を創造し、世界に向けて発信します。

2・美術ファン層だけでなく、広く市民に向けて多様な事業を展開します。

3・街にひらかれた「芸術文化の交流拠点」を目指します。

4・子どもたちからお年寄りまで、みんなが集う“いきいきした美術館”を目指します。

このうち、「しずおか文化」については捉え方が難しいが、運営実施計画ではその特徴を、“温暖な気候と海や山など自然に恵まれ、古くから東西交通の要衝として、人やものの交流が盛んで、その交流の中から、常に豊かな文化を育んできた、その歴史的伝統そのものが「しずおか文化」である”と分析している。

そこで、館の運営にあたっては、この静岡の伝統を受け継ぎ、郷土の美術や歴史を検証しつつ、芸術文化を通じて様々な地域、世界と活発な交流を育むことで、新しい「しずおか文化」の創造に取り組んでいく。

【芸術文化の交流拠点】

そのためにも、実施計画に示されたもう1つの目的、美術館を「芸術文化の交流拠点」とすることが大切だと考えている。

市の文化振興ビジョンでも、“人々の価値観が、心の豊かさをより重視するよう変化し、個性や創造性が発揮できる、魅力的な地域づくりの必要性”が指摘されており、美術館に期待される役割りも変化しつつある。

すなわち作品を保存、調査研究し、展示公開するという旧来の役割に加えて、これからの美術館には、好むと好まざるに関わらず、芸術文化を通じた“市民の創造的な参加・交流の場”としての役割がますます求められる。社会が情報化、少子高齢化し、人と人、地域の繋がりが希薄化するなか、人がいかに心豊かに生きるかということは、21世紀の日本の社会が直面する切実な問題だろう。

こうしたなか、美術や芸術の持つ“人に感動を与える力”、“人を結びつける力”は大きな可能性を持つ。成否はともかく、近年、各地で美術を通じた街の活性化、地域のコミュニティ作りが盛んに行われているのはそのあらわれだろう。美術館で作品と出合い、アーティストの活動に触れ、創造的な活動に参加する――美術館を、そのような芸術文化を通じた交流の場とするために、静岡市美術館は、“美術の素晴らしさをより多くの人に伝える”ことをモットーに、美術ファン層だけでなく潜在的観客である市民に向けて、広く事業を展開することを目指している。

【2つの柱 企画展事業と交流ゾーン事業】

そのため、美術館の活動の柱である展覧会事業については、美術を主軸にデザインや工芸等、幅広いジャンルの展覧会を、年間を通じてバランスよく実施していく。

特に静岡市美術館は、積極的な作品収集及び常設展示は行わず、企画展を柱にしている。これは、既に一通り全国的に美術館整備の終わった後に開館する後発の美術館として、また、施設面積が制約される駅前の複合用途ビル内の都市型美術館として、妥当な選択だろう。

展覧会事業に加え、もう一つの柱として「交流ゾーン事業」も重視している。、エントランスホールや多目的室、ワーク

1 平成20年度、21年度の2年間、(財)静岡市文化振興財団が、静岡市より「(仮称)静岡市立美術館開館記念展開催準備業務」を受託、開館の準備業務に携わった。

2 同様の施設にサントリー美術館があるが、サントリー美術館は美術館施設部分が、構造的に本体ビルより独立性の高い構造になっている。

ショップ室を「交流ゾーン」と位置づけ、同時代のアートシーンを紹介する小企画展示や、トークイベント、コンサートや美術映画の上映など様々な事業を行う。それにより都市型の美術館としての魅力を高め、展覧会を目的とした人だけでなく、より多くの人が気軽に立ち寄る「ちょっと面白い、街の中の広場」のような美術館を目指している。

特に、エントランスホール（天井高6m、約500㎡）と多目的室（天井高5m、約180㎡）は、ガラス壁で仕切られ見通しが利き、ガラスの大引戸（高さ3.5m）を開ければ一体的な利用も可能である。出入口も2か所にあり、中をただ通り抜けることもできる。白を基調にした、外光のよく入る開放的な空間で、ソファやミュージアムショップ&カフェもあり、いつでも無料で気軽に利用できる特徴的な空間となっている。（①）

【施設】（②③④）

美術館は、民間の複合ビルである「葵タワー」の3階ワンフロアーに入っている。1階に専用トラックヤードを持ち、延床面積は3,393.22㎡である。

展示室は3室で、広さ併せて約1100㎡、天井高4.1～4.5mあり、ほぼどのような展覧会にも対応できる。照明は、蛍光灯+ライトシェードによる光天井とスポットライト+ライティングダクトの併用で、専用のPC端末によりリモートで、細かなゾーン毎に様々なシーン設定が可能である。床は明るいフローリングで、壁はガラスクロス貼り白の水性塗料仕上げ、壁面には総長60mのエアタイト型ガラスケースを備え、スライディングウォール（可動壁）の利用と相まって（総壁面長約290m）、かなり柔軟性の高いニュートラルなホワイトキューブを実現している。

これは、常設展示を行わず、古美術から現代美術まで、多様なジャンルの展覧会を開催していくという館の方針に沿ったものである。

また、収蔵庫（約140㎡+前室約46㎡）も、主に企画展の借用作品の一時保管などのため整備している。

1F専用トラックヤードは、10tトラック1台を格納、テーブルリフター（4t）及び作品搬入用エレベーター（4t）を備える。搬入用エレベーターから荷解き室、収蔵庫、展示室へは最短経路となっており、面積、経路の両面で効率的に配置されている。

尚、展示室及び収蔵庫エリアは、ガス（窒素）消火設備を備える。また、事務室兼学芸員室は一室で集密式書庫を備え、廊下や展示室も含め壁面を出来るだけ収納スペースとして利用するなど、バックヤード不足を補っている。

整備費は約33億2千万円で詳細は下表の通りである。

市財政の厳しいなか、国庫補助金や合併特例債が有効に活用されている。

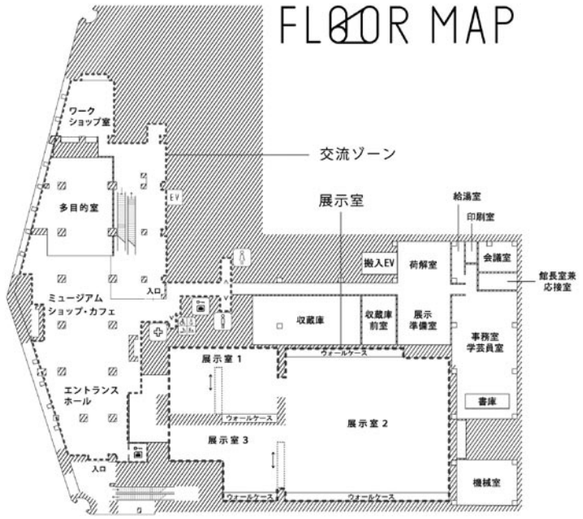
ここまで、整備経過や運営方針などについて述べてきたが、次に実際に開館してからの様子について触れておきたい。

昨年5月1日の開館以降、10月2日から開館記念展を開催しグランドオープンするまでは、展覧会関連のプレイベントや様々な「交流ゾーン事業」を実施した。

【5月～9月　交流ゾーン事業を中心に】

5月の開館と同時にスタートした事業の一つに「美術館探検ツアー」（⑤）がある。これは、施設紹介と鑑賞マナーを分かりやすく解説した、子ども向けの「美術館探検マップ」（⑥）を使って、館内の案内サイン（⑦）を巡りながら案内す

①エントランスホールより多目的室



延床面積　約3,393.22㎡

展示室

■展示室　約 1,100㎡
- 展示室1　209.76㎡
- 展示室2　713.03㎡
- 展示室3　204.17㎡

・天井高　4.1～4.5m
・総壁面長　290m（可動壁含む）
・床荷重　500kg／㎡
・ウォールケース　壁面にエアータイト型ガラスケース総長60mを設置

交流ゾーン

■エントランスホール　612㎡　天井高6m
■多目的室　180㎡　天井高5m
■ワークショップ室　92㎡　天井高3m

②フロアーマップ

③収蔵庫

④ワークショップ室

静岡市美術館　整備費内訳（単位:円）

保留床購入費（葵タワー再開発組合からの占有床購入経費）		￥ 2,461,200,000
内装・展示工事費		￥ 859,533,150
（内訳）	建築工事費	￥ 712,007,100
	電気工事費	￥ 132,826,050
	衛生工事費	￥ 14,700,000
整備費合計		￥ 3,320,733,150
（財源内訳）	まち交（国庫補助金）	￥ 1,180,000,000
	市債（合併特例債）	￥ 1,571,200,000
	一般財源	￥ 569,533,150

静岡市美術館の新規開館について

るもので、5月の連休中、及び8月末までの毎週土曜に実施し、延べ1500人近くが参加した。展示室や収蔵庫、搬入用エレベーターなど普段見ることの出来ないバックヤードも含め、その機能や役割を具体的に紹介することで、美術館について自然と理解を深めて貰えるよい機会となった。

ちなみに、館内の案内サインは、モザイクタイルによる市民の手作りである。当館のロゴマーク（⑧）などを制作した、デザイナーでアートディレクターの柿木原政広氏の発案による。開館直前の3月にワークショップを実施し、親子約80人により制作された。市民に開かれ、末永く愛される美術館となるようにとの願いが込められている。

また、エントランスホールでは、体験型のインスタレーションワークショップシリーズvol.1「鈴木康広　まばたきの葉」（5/2～6/13）（⑨）、及びvol.2「日詰明男　黄金比のカタチ」（6/26～9/23）を開催した。

鈴木康広（1979年浜松市生まれ）は、ユニークな作品で注目を集める気鋭のアーティストで、今回は彼の代表作の一つ「まばたきの葉」を展示した。シンプルな円錐形の胴の部分に真っ白な紙の葉を投入すると、風で吹きあげられて、高く伸びた筒先から勢いよく舞いあがる。葉には表裏に、開いた目と閉じた目が印刷されていて、きれいにくるくると回りながら落ち、本当にまばたきしているように見える。

たくさんの葉が、一度に吹きあげられ落ちてくる様は美しく壮観で、訪れた来館者は誰もが驚き、にっこりして、子どもたちの歓声が絶えなかった。そばのテーブルには、無地の葉とカラフルなサインペンが用意され、訪れた人が自分で目を描いて飛ばすことも出来た。

日詰明男（1960年長野市生まれ／川根本町在住）は、植物の葉のつき方や惑星の運行など、自然界の様々なカタチにあらわれる“黄金比”の研究者で造形作家である。今回は、黄金比で出来た星型の幾何学的立体「プレアデス」を、アルミを素材に直径2m大の大きさで、学生ボランティアと一緒に公開制作し設置した。黄金比をもとにした音とリズムによる静謐な「黄金比の音楽」が流れ、そのリズムに合わせ光が明滅する、黄金比の不思議な世界が体感出来るものだった。

どちらも作家によるワークショップを多数実施し、アーティストと直接触れ合う機会を設けることに努めた。

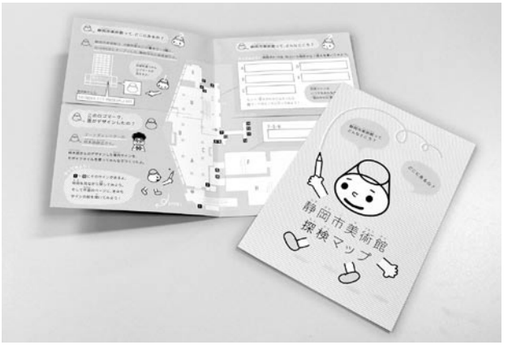
ほかにも、映像と音楽の融合した作品で知られる高木正勝（1979年生まれ）のドキュメンタリーフィルムの上映会とトークや、矢野顕子による開館記念出前コンサート、ブロードキャスターとして幅広く活躍するピーター・バラカンのトークシリーズなどを実施した。

いずれも、館職員が直接先方に連絡を取り、こちらの思いを伝えるところから始まった企画である。美術を主軸にしながらも、様々な分野のイベントを開催したことで、普段美術館に足を運ばない方々も取り込む糸口をつかんだように思う。参加者にも好評で、今後もこのような職員の創意と熱意を活かした企画を一つでも多く実現していきたい。

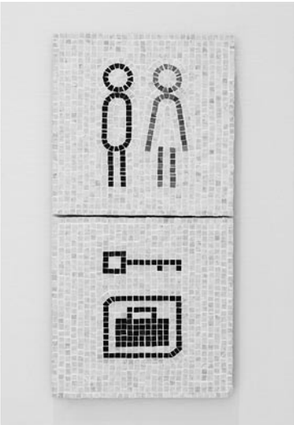
また夏には、商店街恒例の「夜店市」にも参加した。お盆の3日間、夕方4時から夜9時まで、職員交代で開館展の特製ウチワを配り、前売り券を販売した。商店街の方々や道行く人から直接、展覧会への期待や美術館への励ましの声を聞いたことは、励みにもなり、嬉しい思い出となっている。

このほか開館記念展のプレイベントとしての講演会やワークショップ、ラジオの公開録音や市内ウォークツアー、関連映画の上映会などを多数実施したが、紙幅の都合で省略する。7月には、エントランスホールのなかにミュージアムショップ&

⑤「美術館探検ツアー」の様子（展示室2）



⑥「美術館探検マップ」



⑦市民の手作りの案内サイン。
モザイクタイルで出来ている。

⑧ロゴマークとロゴタイプ（デザイン:柿木原政広）

富士山をモチーフに、重ねられた2つの円には、人の輪の広がりと地域と世界を結ぶイメージが表わされている。また、視点と奥行きの変化による“視ることの楽しさ”にも気付かせてくれる。

⑨鈴木康広「まばたきの葉」

カフェもオープンした結果、展覧会がまだ始まらないなか、5月から9月末日までの5カ月間で93,849人の来館者を得た[3]。

【10月～　開館記念展3展について】

10月2日から「開館記念展＜I＞ポーラ美術館コレクション展―印象派とエコール・ド・パリ」（～11/30）を開催した。前日10月1日にはグランドオープン記念式典を開催、オペラ歌手の佐藤しのぶ氏をゲストに華やかな幕開けとなった。

ポーラ美術館のコレクションは、静岡市発祥のポーラ・オルビスグループ2代目オーナー鈴木常司（すずきつねし・1930-2000）氏が一代で築いたものである。約9500点に上るコレクションのなかから、今回は選りすぐった74点を、横浜美術館、名古屋市美術館とともに巡回した。静岡会場では、故鈴木氏が静岡市内のデパートで初めて購入し、コレクター人生のきっかけとなった、レオナール・フジタの≪誕生日≫も特別に展示した。

また、当館独自に子ども向け「展覧会鑑賞ガイド」を制作、普及事業にも力を入れた。会期中に、一般向け及び親子向けギャラリートークを2回ずつ計4回、また、学校や団体向けの展示解説である「ミュージアム教室」を、一般来館者に配慮して、開館前の9時から10時を中心に受け入れ、学校など50団体以上、1800人近くが参加した。共催者の静岡新聞社・静岡放送の広報協力も得て、展覧会の観覧者総数は、38,695人であった。

続いて12月11日から「開館記念展＜II＞家康と慶喜―徳川家と静岡」展（～1/30）を開催した。幼少期と大御所時代を駿府で過ごした家康と、将軍職を辞した後、静岡で30年余り暮した慶喜の二人を取り上げた静岡ならではの展覧会である。（財）徳川記念財団や久能山東照宮を中心に、各地の美術館、寺社等の協力を得て、重要文化財33件を含む約200件を展示した。

特に重要文化財など指定品の展示は、美術館整備の大きな目的の一つともなっていただけに、無事、環境調査をクリアし文化庁の許可を得て展示出来たことは喜ばしい。指定品に限らず、新設の美術館にも関わらず貴重な作品を出品頂いた、多くの所蔵各位には厚く感謝したい。

普及事業にも力を入れ、ギャラリートークを3回実施したほか、「ミュージアム教室」では18団体、700人近くを受け入れた。また、展覧会に関係した寺社などを紹介した「駿府探検マップ」を制作、観光ボランティアガイド「駿府ウエイブ」の協力で市内ウォークツアーを実施し好評を得た。

静岡市美術館　利用者数（単位:人）

	総入館者	展覧会観覧者	関連事業参加者	交流ゾーン事業参加者	事業参加計
5月	35,059	0	103	833	936
6月	13,708	0	136	293	429
7月	14,987	0	200	338	538
8月	17,540	0	253	1,609	1,862
9月	12,555	0	376	16	392
10月	40,570	18,559	901	0	19,460
11月	40,011	20,136	1,572	163	21,871
12月	18,161	5,483	496	66	6,045
1月	51,971	28,941	950	193	30,084
計	244,562	73,119	4,987	3,511	81,617
月平均	27,174	8,124	554	390	9,069

3 入口の自動カウンターによる

静岡市美術館の新規開館について

尚、年末は29日まで、年始は2日から開館し、特に年明けには多くの来館者を得た。広報面では、共催者のNHK静岡放送局の開局80周年記念事業の1つに位置付けられたこともあり、展覧会の観覧者総数は、34,424人だった。交流ゾーンを含めた美術館への来館者総数は、5月の開館以来、1月末日までで244,562人である。

この後、2月11日からは「開館記念展＜III＞棟方志功祈りと旅」展（～3/27）を開催予定である。志功没後35周年を記念した大規模な展覧会で、祈りと旅をテーマに約330点を紹介する。静岡市には本美術館のほかに、芹沢銈介美術館、東海道広重美術館があり、連携事業として棟方志功展に関連した企画展や、3館すべてのスタンプを集めると記念品をプレゼントする「3館スタンプラリー」も予定されている。こちらも、是非多くの方に見て頂けることを願っている。

最後に、当館は、館長、副館長はじめ職員14名で、学芸課（正規5、嘱託3、臨時1）、総務課（正規1、嘱託2）ともに若い職員が多い。準備の段階から、県内外の美術館、関係各位には多大なご支援、ご協力を頂いた。特に県立美術館や佐野美術館には職員の研修も受け入れて頂くなど、多くの方に支えられての開館であることを身にしみて感じている。開館したばかりで課題は多いが、今後も、職員一同、研鑽に努め、初心を忘れず努力していきたい。引き続き、ご指導、ご協力頂き、温かく見守って頂くことを願っている。

（以上）

開館記念展一覧

開館記念展＜I＞ 「ポーラ美術館コレクション展　印象派とエコール・ド・パリ」	
会期　10/2～11/28	観覧者　38,695人
開館記念展＜II＞ 「家康と慶喜ー徳川家と静岡」展	
会期　12/11～1/30	観覧者　34,424人
開館記念展＜III＞ 「棟方志功　祈りと旅」展	
会期　2/11～3/27	観覧者　――

静岡県博物館協会　研究紀要投稿規程

1. 投稿を受け付ける原稿

(1)内容規定

加盟館園職員が従事している職務(展示・調査研究・保存、教育普及・その他)に関する論文、報告、事例紹介、収蔵品紹介等
※専門分野に関するものに限りません。学芸職員以外の投稿も歓迎します。

(2)執筆者規定

加盟館園職員一人もしくは複数人の執筆によるものとします。複数人による場合、全執筆者の1/3が加盟館園職員であることを条件とします。

2. 入稿規定

(1)

日本語による原稿を基本とします。

(2)

デジタルデータと印字原稿、必要なら図版(ポジ、印画紙写真、デジタルデータ、図面等)等を併せて提出して下さい。
デジタルデータはOSを問いませんが、必ずテキストデータを添付して下さい。図版のデジタルデータはJPEGに統一して下さい。
※万一の場合に備え、原稿提出の際には必ず手元に控えを残しておいて下さい。

(3)分量

ページ数目安(1ページ当たり)				事例報告等(1～4ページ分程度)			事例報告等(1/2ページ分)		
論文	縦書き	写真無しの場合	2,000字	縦書き	写真無しの場合	2,000字	縦書き	写真無しの場合	1,100字
		写真有りの場合	1,600字		写真有りの場合	1,600字		写真有りの場合	900字
	横書き	写真無しの場合	2,000字	横書き	写真無しの場合	2,000字	横書き	写真無しの場合	1,100字
		写真有りの場合	1,600字		写真有りの場合	1,600字		写真有りの場合	900字

(4)文字原稿(印字原稿は次の書式でご提出下さい)

字数(1シート)　A4版　40字×30行
※誌面レイアウト・フォーマットに揃えた入稿も歓迎します。レイアウト見本をご希望の方は、事務局にお問い合わせ下さい。

(5)図版原稿(1ページの版面はA4)

カラー(巻頭図版)　掲載希望があればご相談下さい。
モノクロ　すべて挿図として扱います。

- a カラー図版原稿には、目次用のデータを明示して下さい。
- b 挿図原稿裏面に挿図番号とネームを記入して下さい。デジタルデータの場合は、データ名に明示して下さい。
- c 挿図原稿のコピーもしくは印刷された挿図原稿に、掲載希望範囲を、製版作業の支障にならないよう、明示して下さい。
- d レイアウトや掲載時の大きさの希望がある場合は、その旨注記して下さい。
- e 本文の印字原稿に、挿図番号で挿入箇所を示して下さい。

(6)図版の著作権申請

写真等掲載に関する作品所蔵者・著作権者からの許諾等取得は、執筆者が行なって下さい。

(7)執筆者の表示

原稿には氏名・自宅住所および所属機関所在地(それぞれ〒、Tel.、Fax.番号)・部署・役職を明記して下さい。氏名には読み仮名をふって下さい。
成果品である紀要には、氏名と所属のみ記載します。

3. 原稿の送付先

原稿は、下記宛にお送りいただくか、ご持参下さい。

〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田53-2　静岡県立美術館内
静岡県博物館協会事務局
Tel. 054-263-5857
Fax. 054-263-5742

4. 日程および申込・校正手順

(1)日程

申込締切　平成23年11月末日
入稿締切　平成24年　1月末日
発行予定　平成24年　3月末日

(2)申込方法

申込締切までに、下記項目を静岡県博物館協会事務局宛にご連絡下さい。

- ・執筆者　(複数執筆者の場合は、全員の氏名と所属を明記)
- ・題名　(仮題で可)
- ・分量見込 (レイアウト見本による全ページ数で表示。図版、表等の希望も含む。)
- ・縦書き、横書きの希望

※分量は、1本の論文当たり15ページ以内を基本とします。

(3)申込の確認

静岡県博物館協会事務局は、申込締切後2週間以内に、執筆者申込時の分量見込みに基づいて紀要製作の見積もりを行ないます。予算上製作が可能であれば、全申込者に申込通りの分量での執筆が可能である旨を連絡します。予算上不可能な場合は、申込者に対して分量についてのご相談を行ない、ご執筆いただく分量上限を決定します。

(4)

入稿は、上述2の「入稿規定」に従って、上述3の「原稿の送付先」に送付するか、ご持参下さい。4-(3)で示した事情により、実際に入稿した原稿が分量見込みより増えた場合、執筆者に分量を減らしていただくか、当該号での掲載を取りやめることがあります。

(5)校正

入稿締切までに入稿された場合、執筆者は文字校正2回、図版校正2回を行なうことが出来ます。入稿締切が守られなかった場合は、この限りではありません。

(6)レイアウト

レイアウトはフォーマットに基づき、執筆者の希望を尊重して行ないますが、最終的には静岡県博物館協会事務局が決定します。

5. その他

(1)文責

原稿の内容についての文責は、全て執筆者にあるものとします。著作権や誤植、不適切な表記等の問題について静岡県博物館協会及び静岡県博物館協会事務局は、一切の責任を負いません。

(2)執筆者への成果品割当

執筆者には、30部を贈呈します。複数執筆者の場合、全員分を合わせて90部を上限として贈呈することが出来ます。

(3)抜き刷りの作成

執筆者から希望のある場合、実費をご負担いただくことで、執筆箇所の抜き刷りを作成します。静岡県博物館協会事務局にご相談下さい。